42525
教科書文庫
4
810
44-1938
20000
44854

Kodak Gray Scale

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

資

教科書文庫
4
810
44-1938
2000044854

375.9
Ka9

文部省檢定濟

昭和十三年二月八日　實業學校國語科教科書

垣内松三
西尾實　編

實業學校

國文新選

新制版

株式會社　文學社

広島大学図書
2000044854

一　國民教育の要求に基づき、國語教育の使命に鑑みて、各時代に於ける最もすぐれた人と文とを網羅蒐集しようと力めました。

二　教材はそれぞれの形質はもとより學習の方法をも考慮して選擇しました。

三　教材は縱に學年を貫ぬき横に學期を連ねて發展的・體系的に排列しました。

廣島大學圖書印

廣島大學教育
44854
圖書

目次　卷四

一　簡易生活……芳賀矢一……四
二　樹の根……和辻哲郎……一四
三　古典的といふこと……太宰施門……一九
四　爲朝の弓勢……（保元物語）……二三
五　平重盛……（平家物語）……三一
六　有王島下り……（平家物語）……四一
七　落花の雪……（太平記）……五二
八　日野の閑居……鴨長明……五七
九　家居……吉田兼好……六六
一〇　山路……夏目漱石……七〇
一一　俚諺論……大西祝……七七
一二　川柳點……金子元臣……八二
一三　法律閑話……穗積重遠……八九
一四　不安の救濟……土田杏村……九五
一五　勞働と人生……綱島梁川……一〇一

一六　鎚一下……森鷗外……一〇七
一七　空知川の岸邊……國木田獨歩……一一〇
一八　音の世界……宮城道雄……一二九
一九　良寛禪師の歌……伊藤左千夫……一四一
二〇　短歌鈔……西行……源實朝……一五二
二一　能樂禮讃……戸川秋骨……一五六
二二　羽衣……（觀世謠本）……一六二
二三　俳句鈔……松尾芭蕉……與謝蕪村……一七一
二四　茶境……奥田正造……一七六
二五　生花の美……岡倉覺三……一八一
二六　月と日本人……谷川徹三……一九二
二七　雪に立つ竹……北原白秋……二〇二
二八　日本畫の傳統……平福百穗……二〇五
二九　武士道の復活……平泉澄……二一二
三〇　楠氏論……賴襄……二一九
三一　福澤先生を悼む……島田三郎……二二二
三二　天理と人道……福住正兄……二二六
三三　世界の四聖……高山樗牛……二四〇

芳賀矢一
文學博士　國文學者　昭和二年歿、年六十一

大椿
鈴木百年　大椿はその號　畫家　明治二十四年歿、年六十八

一　簡易生活

芳賀　矢一

大椿といふ人が豆をかじつて苦學したとは、余等が子供の時小學讀本で讀んだ話である。修行の間は弊衣・麁食に甘んじて苦學するといふのが、我が學生の美德である。佛教徒も亦乞食を本旨としてゐるので、僧侶の修行にも美衣・美食は固より許されない。「菜根を咬み得て百事なすべし。」といふのが古來の精神である。この衣食住に簡易であるといふことは、總じて日本人本來の特性のやうに思はれる。上

歸去來圖（大椿筆）

廣島大學圖書之印

醍醐天皇
第六十代の天皇　御在位（一五五七―一五九〇）延長八年崩御、實算四十六

時平
藤原氏　延喜九年（一五六九）歿、年三十九

禁祕抄
三卷　順德天皇の御著　禁中の儀式・制度・故實の詳記

順德天皇
第八十四代の天皇　御在位（一八七〇―一八八一）仁治三年（一九〇二）崩御、實算四十六

代の服裝には、曲玉の樣な裝飾を用ひた事も見えてゐるが、これとても今日から見れば極めて麁末なもので、しかもそれは高貴な身分の人に限られたらしい。一般には今日の朝鮮服のやうな飾のない白い服で、何等の裝飾も無かつた。隨分文明の發達しない野蠻人でも、服裝を好む國民は鳥の羽を附けたり、獸の毛を附けたり、貝を飾つたりするが、日本には其の風がない。

文明の進むに從つて、奈良・平安時代と段々生活の進んで來たのは事實である。平安時代になつて人心が驕奢に傾いたといふが、併しそれとても大したことではない。藤原氏など上流社會のものが奢侈に流れたことはあつたが、朝廷が驕奢をなさつて、下民の怨恨を買はれたといふやうな例は一つも無い。醍醐天皇は左大臣時平と圖つて朝臣の衣服の過差を止められた。順德天皇の禁祕抄には、「公の奉り物はおろそかなるをよしとす。」

九條師輔
藤原氏　天德四年（一六二〇）歿、年五十三

徒然草
二卷　吉田兼好の隨筆集

北條時賴
北條氏五代の執權　弘長三年（一九二三）歿、年三十七

と書かれ、九條師輔の遺誡にも「始自衣冠。及于車馬。隨有用之。勿求美麗。」とあるのは、徒然草にも引かれてある。外國の歷史を見ると、支那でも、西洋でも、上、王者たる人が驕奢に耽り、重稅を課して下を虐げる。下民の怨の聲から世が亂れる。かういふ例は數へきれぬ程多い。然るに、日本にはそんな例は一つも無い。民の貧苦を憐んで租稅を免除されたり、飢寒を察して御衣を脫し給うた例こそあれ、二千五百年來の歷史を通觀して、皇室が下民を虐げられた例は決して無い。皇室は禮儀・道德・風雅等の淵源であらせられたと共に、儉約の德に於ても亦模範とならせられたのである。

鎌倉幕府の政は全く勤儉で押通した。それ故、この時代の逸話として傳はつてゐるものには、さういふ話が多い。徒然草に、北條時賴が味噌を戶棚から尋ね出させて酒を飲んだ話がある。

山內一豐
信長・秀吉に仕へ、後家康に仕へて土佐守となる　慶長九年（一二二六五）歿、年六十

加藤淸正
豐臣氏の忠臣　慶長十六年（一二一七一）歿、年五十

黑田如水

時の執權としては儉約なことである。其の母の松下禪尼が明障子の切張りをしたことも、徒然草にある。時賴の用ひたといふ青砥藤綱といふ人は、歷史上の事實としては疑はしい人物であるさうだが、とにかく十文を川に落して五十文の松明をとぼして拾つたといふ話が、やはり時代の精神を示してゐる。足利時代になつての各家の家法・家憲ともいふべきものは、いづれも儉素を條文に立ててゐる。山內一豐のやうに、平素貧困に甘んじて、馬を買ふ時には金を吝まぬといふやうな心掛が、武士の模範として見られた。加藤淸正が家中に示した七箇條の中には、「衣類の事、木綿・つむぎの間たるべし。」とか、「平生傍輩つきあひ、客一人亭主之外出申間敷候。食は黑飯たるべし。」とかいふやうに、一一の場合を規定してある。黑田如水が客を馳走するに、到來の鯛の片身を食はせたのを、さりとては吝いことと嘲つた人があ

名は孝高　秀吉の臣　慶長九年（一二六四）歿、年五十九

安藤重信　家康の家臣　時の老中　元和七年（一二八一）歿、年六十五

水戸義公　徳川光圀　水戸の城主　大日本史を編む　元祿十三年（一二三六〇）歿年七十三

つたが、後に或人に貸した金をすつかり免してやつた話を聞いて、大いに感心したといふ話もある。安藤重信は辨當に握飯をもつて行つて、その包紙までも皺をのばして取つて置いたといふ。水戸義公が、奥女中が紙を麁末にするのを憂へて、寒中紙漉くさまを女中に見せたといふのも有名の話である。このやうに、上に立つ人がいつも先に立つて勤儉を躬行した。武士は何時戰場に立つかも知れぬといふので、平素麁食に甘んじ、弊衣を厭はぬといふことを常に忘れなかつたのである。

上に立つ武士がその通りであつた上に、佛教の教理も亦この風を助長した。といふのは、武家が奬勵した佛法は禪宗で、この宗は樹下石上に法を說くのを主眼とし、一鉢一衣の生活に滿足して、雲水行脚して澹泊の生涯を送つた。いはゆる禪といふのは、寂靜を主として榮華に遠ざかり、富貴榮華を度外に視るとい

五山　京都五山は種種變遷あり、至德三年には天龍寺・相國寺・建仁寺・東福寺・萬壽寺　鎌倉五山は建長寺・圓覺寺・壽福寺・淨妙寺・淨智寺

金閣寺　足利義滿の造營せる別莊　京都市上京區

銀閣寺　足利義政の造營せる別莊　同左京區

ふ態度を以て悟に達するのを目的とするものであつた。茶の味・豆腐の味がその味である。鎌倉以後の五山の僧侶などは、學問見識を以て將軍にも頭を下げさせたが、富貴を貪らうとはしない。常に富貴に遠ざかつた態度を以て將軍の師となり得たのである。

足利將軍の驕奢といつても、實際はそれ程の事でもなかつたらうと思はれる。金閣寺・銀閣寺を見ても大抵は察せられる。總じて、世間の富貴や驕奢に近づくことは下品な所行として擯斥する氣風が、此の時代を支配してゐた。即ち高尙といふこと、又風流とか風雅とかいふことは、富貴に遠ざかつた簡易な生活に在るといふ思想が流行したのである。徒然草の作者の如きも、一方古代を慕ひ、平安時代を追慕し、皇室の禮儀を尊ぶと同時に、生活はすべて簡易なるがよいとして、唐から來るものは藥の

芭蕉
松尾氏　名は宗房　俳諧正風の祖　元祿七年（二三五四）歿、年五十一

横井也有
名は時般　俳人　半掃庵と號す　天明三年（二四四三）歿、年八十二

ほかは用が無いとまでいつてゐる。

俳人は和歌者流に對して起つた一種の平民的文學者であるが、これも澹泊洒落を以て其の道の眞意を得るものとした。芭蕉は、俳味は奈良茶にありとした。奈良茶といふのは茶粥である。即ち簡單・質素を以て風流の生命とし、驕奢や贅澤は俗惡な事として擯斥したのである。横井也有の謝「無馳走」辭にも、「今日の無馳走は紫隱里の掟にして、『菜根咬み得ば百事なすべし。』を、貧の風雅の方人とはし侍るなり。」とある。勿論俳人にも品性の惡い幇間的の者もあつたが、眞の俳諧者は澹泊な生涯を理想としたのである。

故に、家の飾にも美しい金ぴかの物を用ひない。すべてが閑寂な味を主として、一碗の抹茶に一幅の掛物、一輪の花ざしで、趣味を其の中に求める。物の多きを望まず、足るを知り、富の眼を

眩するを望まず、貧しきを以て安んずる。かういふ淡泊な氣象であるから、人を羨まず、世を恨まない。禪家といひ、俳家者流といひ、隱遁者・世棄人に似て、實は世間に立交つて其の榮華に心を惑はされないといふ境域に達したものである。單に隱遁・遁世といへば、世間を離れて無用の人となり、厭世の人となつてしまふことかのやうであるが、我が國の風流人・隱遁者は、たゞ心を世外に置いて高尚にすることを欲したので、全く世間を離れて世事に頓着せぬといふのではない。佛教は國民を厭世的にするといふが、日本ではむしろ其のよい方ばかりがあらはれた。其の質素の風と思切りのよい所、富貴を超越

芳賀矢一

トランスヴァール　南アフリカのイギリス植民地　かつて獨立共和國なりしが、西紀一八九九年イギリスに敗戰後はその植民地となり同一九一〇年南アフリカ聯邦に加入せり

した態度は、武士の決斷及び質素に影響したことが少くない。元寇の役の一斷などは、禪宗の安心に由來するところが多かつたといふ。

余が歐洲行の際、往きには獨逸の船に乘つたが、還りには郵船會社の船に乘つた。航海の熱さに、獨逸人の水夫はビールやラムネを盛に飲んだが、日本の水夫は水を飲んで働いてゐた。かく簡素に甘んじて働けばこそ、日本の船を出して西洋の船とも競爭が出來るのだと其の時感じた。日露戰爭にも、露西亞の兵隊は茶を飲まなければ軍は出來ぬといひ、將校などは三鞭酒が無ければならぬといふ風であつたといふ。英吉利のトランスヴァールの戰爭などには、軍隊はまるで獵場にでも行つたやうに贅澤な有樣であつたといふ。日本人はそこへ行くと眞劍だ。例の梅干と握飯で我慢する。軍隊の方としては、勿論給養を好

くすることに力を盡くしたであらうが、兵士の方では贅澤は求めぬ。これは古來からの勤儉の風がまだ遺つてゐるのである。此の祖先の風はいつまでも保存しなければならぬ。併し、食ふ物も食はずに儉約するのは、もとより儉約ではない。儉と吝とは似て非なるものとは昔の人も言つた。積極的に働く爲には、榮養も十分とらねばならぬ。たゞ分を守るといふ心得が肝要である。木綿着に慣れ、麥飯に甘んじた老農は、絹布を纏ひ、白米を食ふのを勿體ないといふ。この勿體ないといつて身の程を守る心持だけは、祖先の遺產として、又國民生活の基礎として、いつまでも保存したいものである。（日本人）

和辻哲郎
哲學者　文學博士　東京帝國大學教授
明治二十二年生

二　樹の根

和辻哲郎

松の樹に圍まれた家の中に住んでゐても、松の樹の根が地中でどうなつてゐるかは、餘り考へてみたことがなかつた。美しい赤褐色の幹や、わりに色の淺い清らかな綠の葉が、永い馴染である松の樹の全體であるやうな氣持がしてゐた。雨が降ると、幹の色はしつとりと落着いた潤ひのある鮮かさを見せる。綠の葉は涙にぬれた樣なしをらしい色艶を增して來る。雨の後で太陽が輝き出すと、早朝の樣な爽かな氣分が樹の色や光の內に漂うて、いかにも朗かな生の喜がそこに躍つてゐるやうに感ぜられる。折節可愛い小鳥の群が活き活きした聲で囀り交して、綠の葉の間を樂しさうにゆき來する。それが私の親しい松の樹であつた。

しかるに、或時私はその松の樹のおひ育つた小高い砂山を崩してゐる所にたゝずんで、砂の中に喰込んだ複雜な根を見まもることが出來た。地上と地下の姿がなんとひどく相違してゐることだらう。一本の幹と、簡素に竝んだ枝と、樂しさうに葉先を揃へた針葉と、それに比べて地下の根は、戰ひ、もがき、苦しみ、十分の努力を盡くしたやうに、枝から枝と分れて、地上の枝幹の總量よりも多いと思はれる太い根、細い根の無數を以て、一齊に大地に抱きついてゐる。私はこのやうな根が地下にあることは知つてゐた。しかし、それを目の前にまざまざと見たときは、思はず驚異に打たれぬわけには行かなかつた。私は永い馴染の間に、このやうな地下のくるしみが不斷に彼等にあるといふことを、一度も心胸に感じたことがなかつたのである。彼等のくるしみの聲を聞いたのは、時折に吹く烈風の際であつた。彼等

高野山
和歌山縣伊都郡　眞言宗古義派の本山金剛峯寺あり
不動坂
高野山の登り口

の苦しさうな顏を見たのは、濕りのない炎熱の日が一月以上も續いたあとであつた。しかし、その叫や萎れた顏も、その機會さへ過ぎればすぐに元の快活に歸つて、苦しみの痕を滅多に後に殘さない。しかも、彼等は、我々の眼に祕められた地下の營を一日も怠つたことがないのであつた。あの美しい幹も、葉も、五月の風に吹かれて飛ぶ綠の花粉も、實はこのやうな苦勞の上にのみ可能であつた。この時以來、私は松の樹のみならず、あらゆる植物に心から親しみを感ずるやうになつた。彼等は我々と共に生きてゐるのである。それは誰でも知つてゐることだが、私には新しい事實としか思はれなかつた。

私は高野山へのぼつた。そして、不動坂にさしかゝつた時に、數知れず立並んでゐるあの太い檜の樹から、何ともいへぬ莊嚴な心持を押しつけられた。なるほどこれは靈山だと思はずに

弘法大師
空海　我が國眞言宗の祖
高野山を開き金剛峯寺を建つ　能書の譽高く我が國三筆の一人　承和二年（一四九五）寂、年六十二

はゐられなかつた。この地を選んだ弘法大師の見識にも、つくづく敬服するやうな氣持になつた。それは外廓に連なる山々によつて平野から切離された、急峻な斜面である。幾世紀を經て來たか解らない老樹たちは、金剛不壞といふ言葉に似つかはしいほどどつしりとした、迷のない壯大な力强さを以て、天を目指して直立してゐる。さうして、樹々の間に漂うてゐる生々の氣は、ひたひたと人間の肌にも迫つて來る。私は底力のある興奮を心の奥底に感じ始めた。

私の眼はすぐに立樹の根に向つた。地下の烈しい營は既に地上一尺の所に明かに現れてゐる。土の層の深くないらしいこの山に育つて、あの亭々たる巨幹を支へる爲に、太い强靱な根は力かぎり四方へひろがつて、地下の岩にしつかりと抱きついてゐるらしい。あの巨大な樹身にふさはしい根は一體どんな

であらう。殊に相隣つた樹の根と入りまじつて、薄い地の層の間に複雜にからみ合つてゐる有樣は、想像するだけでも我々に驚異の情を起させる。

確に山は烈しい生の力の營によつて、殘る所なく包まれてゐるのである。我々はそれを肉眼によつて見ることは出來なかつたが、しかし一種の靈氣として感ずることは出來た。隱れたる努力の威壓が、神祕の影さへ帶びて、我々に敬虔の情を起させずにはゐなかつたのである。

私は老樹の前に根の淺い自分を恥ぢた。さうして、地下の營に沒頭することを自分に誓つた。今氣づいてもまだ遲くない。

成長を欲するものは根を確に下さなくてはならぬ。上にのびる事をのみ欲するな。まづ下に喰入ることを努めよ。

（偶像再興）

太宰施門
文學博士　京都帝國大學教授　明治二十二年生

三　古典的といふこと

太宰施門

一國の文學を正しく領得することは、竝々な努力では出來ない。その言語に深く熟達し、その民族の歷史・習慣・感情に通じ、なほその文學史一般の鳥瞰圖的知識を比較的精細にそなへ持つことが肝要である。この一方ならぬ勤勞を終つて後に、始めてその文學に關して何程かのことを言ひ得る資格が生じて來る。この必須の階梯を順序正しく修める上に、「古典的」の語が示す眞の意味が何人にも自づと了解され、會得されて來る。

古典的とは、その民族の輿論が推して模範的・代表的なものとして立てる若干の作物・作家に對して附する形容詞である。その民族に屬する何人も、之によつて趣味を養ひ、その感化のもとに次第に各個の文學的判斷が形づくられて行く。文學に携は

る若い人々は、先づ古典を學ぶのが通例である。が、やがて次第にその指示を離れて新味を求め、時に對立の部署に立つて少年時の教養に弓引く場合もある。そして時に反古典文學者の名を冠らせられることも決して稀ではない。しかし、見逃すことの出來ないことは、彼等でさへも、何等かの意味に於て古典に親しみ、全民族的に尊崇せられ來つた大作家・大作物を糧にその文學生命を養うて來たといふ事實である。古典文學が、謂はば彼等に文學への伎癢をそゝり、未來への方向を決定せしめたのであつた。かくして、この古典的な作品が一つの動力となつて、世界に輝く近代文學が形づくられるに至つたのであつた。

この意味から、文學への第一歩として、出來るだけ緻密・正確に古典文學を修めることが何人にも望まれ、またある範圍の人々には須要な責務の一つとしてさへ感ぜられて來る。文學の研

鑽を志して以後數年、或は十數年を、古典の讀破にあて、その民族的主要特性の闡明につとめても、決してそれで十分すぎるとはいはれない。最初にこれを行はない文學學徒の行程が、しばしば收拾し得ない破綻を見せ、遲く目ざめた學的良心への叛逆を心ならず強ひられる實例を、餘り多く我々は知つてゐる。決して一時的な風潮・好尚に誘はれること無く、心を空しうして一民族の推稱し、禮讃する諸家の作品に就いて評價の根柢を培ひ、その後に萌し出た個性の指す方へ徐々に攻究の歩を轉ずべきであるとは、我々の畏敬する人の事例が示してゐるところである。繁り出た大木の梢にかをる青葉の新鮮さを、その枝・幹・根の協力が支へる力を通して鑑賞してこそ、その色の深さ、生氣の潑剌さを味はひ得るであらう。現代文學もこの用意を以て向ふことによつて、始めて眞の鑑賞理解が期し得られるであらう。(瑪蘭樹)

鎌田次郎　名は正清　藤原秀郷の裔

筑紫の御曹司　源爲朝

下野守　源義朝　爲義の嫡子

八虐　謀反・謀大逆・謀叛・惡虐・不道・大不敬・不孝・不義

四　爲朝の弓勢

さる程に、夜も漸う明け行くに、主もなきはなれ馬、源氏の陣へかけ入りたり。　鎌田次郎是を取らせて見るに、鞍壺に血たまり、前輪は破れて、尻輪に鑿の如くなる鏃とまれり。　これを大將軍に見せ奉つて、「今夜筑紫の御曹司の遊ばされてありげに候。あないかめしの御弓勢や。」と申しければ、義朝「八郎は今年十八九の者にてこそあれ。未だ力もかたまらじ。それは敵をおどさんとて、作りてこそ放しけめ。　それには臆すべからず。　汝向つて一當あてて見よ。」と宣へば、「さ承りて候。」とて、正清百騎ばかりにて押寄せて、「下野守の郎等、相模の國の住人鎌田次郎正清。」と名乘りければ、「さては一家の郎從ござんなれ、大將軍の矢面をば引退け。」と宣へば、「もとは一家の主君なれども、今は八虐の凶徒なり。　違

勅の人々討取つて高名せよや者ども。」と云ひも果てず、よつぴいて發つ矢が、御曹司の半頭にからりとあたつて、兜のしころに射附けたり。　爲朝餘りに腹を立てて、此の矢をかいかなぐつて投捨て、「己程の者をば、矢だうなに、手取にせん。」とてかけ給へば、首藤九郎家季・惡七別當以下、例の二十八騎ぞつゞきたる。　正清叶はじとや思ひけん、百騎の勢を引具して、川原を下りに二町ばかり、ふるひふるひ逃げたりけり。　御曹司は弓をば脇に搔挾み、大手をひろげて、何處まで何處までと追はれけるが、「さのみ長追ひなせそ、判官殿は心こそ猛くおはすとも、年老い給ひぬ。　殘りの人人は口はきゝ給へども、さのみ心にくからず。　小勢にて門破らるな、かへせや。」とて引返す。

鎌田は、河原を西へ引かば大將軍の陣の前、敵の追ひかけんも惡しかりなんと思ひて、眞下りに逃げたりけるが、敵引返すと見

首藤俊通
藤原秀郷の末裔　源義朝の臣

てければ、川を直違に馳渡して、「遁れ參つて候。坂東にて多くの軍に逢ひて候へども、これ程軍立はげしき敵にいまだあはず候。いかづちなどの落ちかゝらんは、事の數にも候はじ。」と申しければ、義朝「それは聞ゆる者と思ひておづればこそはさあるらめ。八郎は筑紫そだちにて、船の中にて遠矢を射、徒立などは知らず、馬上の業は坂東武者にはいかでか及ばん。馳雙べて組めや者ども。」と下知せられければ、相模の國の住人首藤刑部丞俊通、其の子瀧口俊綱、海老名源八季定・波多野次郎延景等を始として、二百餘騎にて追懸けたり。爲朝、寶莊嚴院の西うらにて返し合はせて、火出づる程ぞ戰うたる。

大將は赤地の錦の直垂・黑絲縅の鎧に、鍬形打つたる兜を着、黑き馬に黑鞍置いて乘つたりけり。鐙蹈ん張り突立ち上り、大音揚げて、「清和天皇九代の後胤、下野の守源の義朝、大將軍の勅命を

判官殿
源爲義

蒙つて罷り向ふ。若し一家の氏族たらば、速に陣を開いて退散すべし。」とぞ宣ひける。爲朝聞きもあへず、「嚴親判官殿の、院宣を蒙り給ひて御方の大將軍たる其の御代官として、鎭西八郎爲朝、一陣を承つて固めたり。」とぞ答へける。義朝重ねて、「扨は遙かの弟ござんなれ。汝兄に向つて弓引かん事冥加なきにあらずや、且は宣旨の御使なり。禮儀を存ぜば、弓をふせて降參仕れ。」とぞ申されける。爲朝また、「兄に向つて弓引かんが冥加なしとは理なり。正しく院宣を蒙つたる父に向つて弓引き給ふはいかに。」と申されければ、義朝道理にや詰められけん、其の後は音もせず。武藏・相模のはやりをの者どもが、驀地に打つてかゝるを、爲朝暫し支へて防ぎけるが、敵は大勢なり、かけ隔てられては判官のため惡しかりなんと思ひて、門の内へ引退く。敵是を見て、防ぎかねて引くとや思ひけん、勝に乘つて門の際まで攻めつけて、入替

へ入替へ揉うだりけり。

こゝに爲朝、敵の勢ごしに見れば、大將義朝、大の男の、大きなる馬には乘つたり、人に勝れて軍の下知せんとて、突立ち上りたる內兜、誠に射よげに見えければ、願ふ所の幸得たりと悅びて、件の大矢を打ちくはせ、たゞ一矢にて射落さんと打揚げけるが、「待てしばし、弓矢取る身の謀、『汝は內の御方へ參れ、我は院方へ參らん。汝負けなば憑め、助けん。我負けなば、汝を憑まん。』など約束して、父子立別れてかおはすらん。」と思案して、はげたる矢を指しはづす、遠慮の程こそ神妙なれ。すべて八郎の矢に中る者、助るものぞなかりける。されば罪造りとや思はれけん、名乘つて出づる者ならでは、左右なく射給はざりけり。

長井の齋藤別當實盛・弟の三郎實員・片桐小八郎大夫景重・首藤瀧口以下宗徒の兵、攻入り攻入り戰ひければ、惡七別當・手取の與

內　後白河天皇院方　崇德上皇

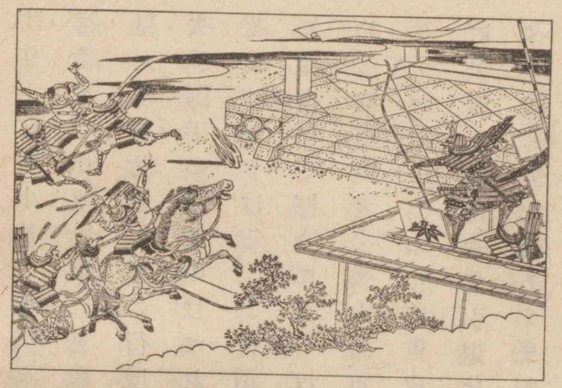
長井齋藤別當實盛　越前國の人

實遠の孫　武藏國長井庄に住す

首藤瀧口　首藤九郎　瀧口は清涼殿の角にある瀧口に侍る武士の稱

次・高間の三郎・同じき四郎・吉田の太郎以下、こゝをせんどと防ぎけり。片桐小八郎大夫に手取の與次ぞかけ合ひける。與次は若武者なり。景重は老武者なるうへ、戰ひ疲れて既にあぶなく見えける所を、秩父の行成馳合はせて、よつぴいてはなつ矢に、與次が馬手の草摺のはづれを射させて引退けば、景重、勝に乘つてぞかけ入りける。御曹司、首藤九郎を召して、「敵は大勢なり、若し矢種盡きて打物にならば、一騎が百騎に向ふとも終には叶ふまじ。坂東武者の習、大將軍の前にては、親死に子討たるれども顧みず、いやが上に死に重なつて戰ふとぞ聞く。いざさらば、大將に矢風を負はせて引退けんと思ふは如何に。」と宣へば、家季「然るべう候。但し御あやまちや候はん。」と申しければ、「何條さる事あるべき。爲朝が手本は覺ゆるものを。」とて、例の大矢を打ちくはせ、しばし固めてひやうと射る。思ふ矢つぼを過たず、下野の守

の兜の星を射削りて、餘る矢が寶莊嚴院の門の方立に篦中せめてぞ立つたりける。其の時義朝手綱搔繰り打向ひ、「汝は聞及ぶにも似ず、無下に手こそあらけれ。」と宣へば、爲朝「兄にて渡らせ給ふ上、存ずる旨あつてかうは仕つたれども、誠に御免を蒙らば、二の矢を仕らん。眞向・內兜は恐れも候。障子の板か、梅檀・弦走か、胸板の眞中か、草摺ならば、一の板とも二の板とも、矢坪を慥に承つて仕らん。」とて、既に矢取つて番はれける所に、上野國の住人深巢七郎清國、つとかけ寄せければ、爲朝是を弓手に相受けてはたと射る。清國が兜の三の板より直違



爲朝豪勇

八幡殿源義家

鎌倉權五郎景政　平良茂の五代の孫　鎌倉權守景成の子

に、左の小耳の根へ篦中ばかり射込まれたれば、暫しもたまらず死ににけり。首藤九郎落合ひて深巢が首をば取つてけり。

これをも事ともせず、我先にとかけける中に、相模の國の住人大庭平太景義・同じき三郎景親、眞前に進んで申しけるは「八幡殿、後三年の合戰に、出羽國金澤の城を攻め給ひし時、十六歳にして軍の眞前かけ、鳥海三郎に左の眼を兜の鉢附の板に射附けられながら、答の矢を射返して、其の敵を取りし鎌倉權五郎景政が末葉、大庭平太景義・同じき三郎景親とぞ名乘つたる。御曹司これを聞き給ひ、西國の者どもには、皆手なみの程を見せたれども、東國の兵には今日始の軍なり、征矢をば度々射たりしが、鏑矢にて射ばやと思ひて、目九つ指したる鏑の、めばしらには角を立て、風返し厚くくらせて、鏑卷に朱さしたるが、普通の墓目程なるに、手先六寸しのぎを立てて、前一寸には、みねにも刃をぞ附けたりけ

保元物語　三巻　康和五年より壽永三年（一七六三—一八四四）迄の記事、主として後白河天皇保元元年七月に起れる戰亂の顚末を記す　作者不詳

る。鏑より上十五束ありけるを取つて番ひ、ぐつさと引いて發されたれば、御所中に響きて長鳴し、五六段ばかりに控へたる大庭の平太が左の膝を、片手切りにふつと射切り、馬の太腹かけずとほれば、鏑は碎けて散りにけり。馬は屏風を倒す如くがばと倒るれば、主は前へぞあまされける。敵に首を取られじと、弟の三郎馬より飛下り、兄を肩に引懸けて、四五町ばかりぞ引いたりける。（保元物語）

爲朝を勇ません爲にや、俄かに除目行はれて、藏人たるべき由仰せけり。八郎「これは何といふ事ぞ。人々は何にも成り給へ。爲朝は今日の藏人と呼ばれても何かせん。只もとの鎭西八郎にて候はん」とぞ申しける。（保元物語）

平重盛　清盛の長子　この時（治承元年、一八三七）年四十一

太政入道　太政大臣平清盛入道淨海

嚴島大明神　主神市杵島姫命　廣島縣佐伯郡嚴島町に鎭座

貞能　平貞能　清盛の腹心の臣

保元　保元の亂　後白河天皇の保元元年（一八一六）

平右馬助　清盛の叔父忠正

五　平重盛

太政入道はかやうに人々數多縛め置きても、なほ心ゆかずや思はれけん、すでに赤地の錦の直垂に、黑絲縅の腹卷の、白金物打つたる胸板せめて、先年安藝守たりし時、神拜のついでに靈夢を蒙つて、嚴島大明神より現に賜はられたりける銀の蛭卷したる小長刀、常の枕を放たず立てられたりしを脇挾み、中門の廊へぞ出でられける。その氣色大方ゆゝしうぞ見えし。貞能を召す。

筑後守貞能は、木蘭地の直垂に緋縅の鎧着て、御前に畏まつて候ふ。やゝあつて入道宣ひけるは、「貞能、この事いかが思ふ。保元に平右馬助をはじめとして、一門半ば過ぎて新院の御方へ參りにき。一宮の御事は、故刑部卿殿の養君にてましましかば、旁見放ち參らせ難かりしかども、故院の御遺誡に任せて、御方に

新院　崇德上皇
一宮　崇德上皇の皇子重仁親王
故刑部卿　清盛の父忠盛
故院　鳥羽法皇
平治元年　二條天皇の御代（一八一九）
信頼　藤原信頼
義朝　源義朝
院　後白河上皇
內　二條天皇
經宗　藤原經宗
惟方　藤原惟方

て先をかけたりき。これ一つの奉公なり。次に平治元年十二月、信頼・義朝が院・內を取り奉り大內に立籠り、天下暗闇となりしにも、入道身を捨てて兇徒を追落し、經宗・惟方をめし縛めしに至るまで、既に君の御爲に命を失はんとする事度々に及ぶ。たとひ人何と申すとも、七代まではこの一門をばいかでか捨てさせ給ふべき。それに成親といふ無用のいたづら者、西光といふ下賤の不當人めが申すことにつかせ給ひて、この一門を滅すべき由、法皇の御結構こそ遺恨の次第なれ。この後も讒奏する者あらば、當家追討の院宣下されつと覺ゆるぞ。朝敵となつて後は、いかに悔ゆとも益あるまじ。世を鎭めん程、法皇を鳥羽の北殿へ移し奉るか、然らずばこれへまれ御幸をなし參らせんと思ふはいかに。その儀ならば、北面の輩、矢をも一つ射んずらん。侍共にその用意せよと觸るべし。大方は入道院方の奉公思ひ切

藤原惟方
成親　藤原成親
西光　藤原師光　入道して西光といふ
法皇　後白河法皇
鳥羽の北殿　京都の南郊鳥羽にありし離宮
盛國　平盛國　正度の子
小松殿　平重盛の邸　又重盛をもいふ
法住寺殿　後白河法皇の御所
禪門　入道清盛

つたり。馬に鞍おかせよ。着脊長取出せ。」とぞ宣ひける。

主馬判官盛國、急ぎ小松殿へ馳參つて、「世は既にかう候。」と申しければ、大臣聞きもあへず、「あゝ、はや成親卿が首を刎ねられたるな。」と宣へば、「さは候はねども、入道殿御着脊長を召され候。侍どもも皆打立つて、法住寺殿へ寄せんと出で立ち候。法皇をば鳥羽殿へ押籠め參らせうと候が、內々は鎭西の方へ流し參らせうと擬せられ候。」と申せば、大臣、爭かさることと在るべきと思へども、今朝の禪門の氣色、さる物狂ほしき事もあるらんとて、車を飛ばして西八條へぞおはしたる。

門前にて車より下り、門の內へさし入りて見給へば、入道腹卷を着給ふ上は、一門の卿相雲客數十人、各、色々の直垂に、思ひ思ひの鎧着て、中門の廊に二行に着座せられたり。その外、諸國の受領・衞府・諸司などは緣に居こぼれ、庭にもひしと竝み居たり。旗

西八條清盛の邸

五戒
不殺生・不偸盗・不邪淫・不妄語・不飲酒

五常
仁・義・禮・智・信

竿ども引側め引側め、馬の腹帶を固め、兜の緒を縮め、たゞ今皆打立たんずる氣色どもなるに、小松殿、烏帽子・直衣に大紋の指貫のそば取つて、さやめき入り給へば、事の外にぞ見えられける。

入道伏目になつて、あはれ例の內府が世をへうするやうにふるまふ、大いに諫めばやとこそ思はれけめども、さすが子ながらも內には五戒を保つて慈悲を先とし、外には五常を亂らず禮儀を正しうし給ふ人なれば、あの姿に腹卷を着て向はんこと、面はゆう恥づかしうや思はれけん、障子を少し引立て、素絹の衣を腹卷の上にあわて着に着給ひたりけるが、胸板の金物のすこし外れて見えけるを隱さうと、頻りに衣の胸を引違へ引違へぞし給ひける。大臣は舍弟宗盛卿の座上に着き給ふ。入道も宣ひ出さず、大臣も申しいださるる事もなし。

やゝあつて入道宣ひけるは、「成親卿が謀叛は事の數にもあら

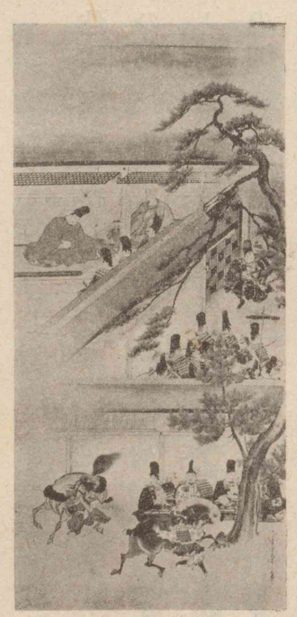
天兒屋根命の末藤原氏

ず、一向法皇の御結構にて在りけるぞや。世を鎭めん程、法皇を鳥羽の北殿へ遷し奉るか、然らずばこれへまれ御幸をなし參らせんと思ふはいかに。」と宣へば、大臣聞きもあへず、はらはらとぞ泣かれける。入道、「いかに、いかに。」とあきれ給ふ。大臣涙を抑へて申されけるは、「この仰承り候に、御運ははや末になりぬと覺えて候。人の運命の傾かんとては、必ず惡事を思ひ立ち候なり。又御有樣、更に現とも覺え候はず。さすが我が朝は邊地粟散の境と申しながら、天照大神の御子孫、國の主として、天兒屋根命の末、朝の政を掌り給ひしよりこの方、太政大臣の官に至る人の甲冑をよろふこと、禮儀を背くに非ずや。就中、御出家の御身なり。夫れ三世の諸佛解脫幢相の法衣を脫ぎ捨てて、忽ちに甲冑を鎧ひ、弓箭を帶しましまさんこと、內には既に破戒無慙の罪を招くのみならず、外には又仁義禮智信の法にも背き候ひなんず。旁、

普天の下云々
普天之下、莫レ非ニ王土一、率土之濱、莫レ非ニ王臣一（詩經）
潁川に云々
許由の故事
首陽山に云々
伯夷・叔齊の故事

恐ある申事にて候へども、心の底に旨趣を遺すべきに非ず。まづ世に四恩あり。天地の恩・國王の恩・父母の恩・衆生の恩これなり。その中に最も重きは朝恩なり。普天の下、王地に非ずといふことなし。されば潁川の水に耳を洗ひ、首陽山に蕨を折りし賢人も、勅命背き難き禮儀をば存知すとこそ承はれ。いかに況や、先祖にも未だ聞かざりし太政大臣を極めさせ給ふ。いはゆる重盛が無才愚暗の身を以て、蓮府・槐門の位に至る。加之、國郡半ば過ぎて一門の所領となり、田園悉く一家の進止たり。これ、希代の朝恩に非ずや。今これ等の莫大の御恩を思召し忘れて、紊りがはしく法皇を傾け參らせ給はん事、天照大神・正八幡宮の神慮にも背き候ひなんず。日本はこれ神國なり。神は非禮を受け給はず。しかれば君の思召し立つ所、道理半ばなきに非ず。中にもこの一門が代々の朝敵を平げて、四海の逆浪を鎭

むる事は無雙の忠なれども、その賞に誇る事は傍若無人とも申しつべし。聖德太子十七箇條の憲法に『人皆心有り。心各執あり。彼を是し我を非し、我を是し彼を非す。是非の理、誰か能く定むべき。相共に賢愚なり。環の如くにして端なし。爰を以て縱ひ人怒ると云ふとも、かへつて我が咎を懼れよ。』とこそ見えて候へ。然れども御運盡きざるによりて、御謀叛既に露れぬ。その上仰せ合はせらるる成親卿を召置かれぬる上は、たとひ君いかなる不思議を思召し立たせ給ふとも、何の恐か候べき。所當の罪科行はれん上は、退いて事の由を陳じ申させ給ひて、君の御爲には愈奉公の忠勤を盡く


重盛諫言圖（冷泉爲恭筆）

千顆萬顆の玉
瑩レ日瑩レ風高
低千顆萬顆玉、
染レ枝染レ波表
裏一入再入之
紅（和漢朗詠
集）

し、民の爲には益、撫育の哀憐を致させ給はば、神明の加護に預り、佛陀の冥慮に背くべからず。神明・佛陀感應あらば君も思召し直す事、などか候はざるべき。君と臣とを比ぶるに親疎わく方なし。道理と僻事を竝べんに、爭か道理につかざるべき。

これは君の御理にて候へば、かなはざらんまでも、院の御所法住寺殿を守護し參らせ候べし。その故は、重盛敍爵より今大臣の大將に至るまで、しかしながら君の御恩ならずといふことなし。その恩の重きことを思へば、千顆萬顆の玉にも超え、その恩の深き色を案ずれば、一入再入の紅にも過ぎたらん。然れば院中に參り籠り候べし。其の儀にて候はば、重盛が身に代り、命に代らんと契りたる侍共、少々候らん。是等を召具して、院の御所法住寺殿を守護しまゐらせ候はば、さすが以ての外の大事でこそ候はんずらめ。

迷盧
蘇迷盧の略
又須彌とも書
く　梵語　妙
高山と譯す
小世界の中心
にて、海中に
聳えて諸天を
支へ、水に入
ること八萬四
千由旬、水上
に聳ゆること
八萬四千由旬
なりと

再び實なる木
云々
常觀ニ富貴之
家ヲ、祿位重疊、
猶ニ再實之木
其根必傷ー
（後漢書）

悲しきかな、君の御爲に奉公の忠を致さんとすれば、迷盧八萬の頂よりもなほ高き父の恩、忽ちに忘れんとす。痛ましきかな、不孝の罪を逃れんとすれば、君の御爲にはすでに不忠の逆臣となりぬべし。進退これ谷れり。是非いかにも辨へ難し。申し受くる所詮は、たゞ重盛が首を召され候へ。院中をも守護し參らすべからず。院參の御供をも仕るべからず。富貴といひ、榮華といひ、朝恩といひ、重職といひ、旁、極めさせ給ひぬれば、御運の盡きんこと難かるべきに非ず。『富貴の家には祿位重疊せり。再び實なる木はその根必ず傷む。』と見えて候。心細うこそ覺え候へ。いつまでか命生き七、亂れん世をも見候べき。たゞ末代に生を受けて、かゝる憂き目にあひ候重盛が果報の程こそ拙う候へ。只今侍一人に仰せ附けて、御坪の内に引出されて、重盛が頭の刎ねられんことは、易い程の御事でこそ候へ。これ各聞き

給へ。」とて、直衣の袖も絞るばかりに涙を流しかきくどかれければ、一門の人々、心あるも心なきも皆袖をぞぬらされける。

太政入道も、頼みきつたる内府は斯様にのたまふ。力もなげにて「いやいや、これまでは思ひも寄りさうず。惡黨どもが申す事につかせ給ひて、ひがごとなどや出で來んずらんと思ふばかりでこそ候へ。」とのたまへば、大臣「たとひいかなるひがごと出で來候とも、君をば何とかし參らせたまふべき。」とて、つい立つて中門に出で、侍どもに仰せられけるは「たゞ今重盛が申しつる事をば汝等承らずや。今朝よりこれに候うて、かやうの事ども申ししづめんと存じつれども、あまりにひたさわぎに見えつる間、先づ歸りたりつるなり。院參の御供においては、重盛が頭の召されんを見て仕れ。さらば人參れ。」とて、小松殿へぞ歸られける。

（平家物語）

平家物語
普通は十二巻に劍巻・灌頂巻の二巻を加ふ　平家の勃興より滅亡までを記す　作者不詳　異本多し

有王
俊寛僧都の僕

鬼界が島
今の鹿兒島縣大島郡の島

俊寛僧都
法勝寺の執行　平家討伐を計りて鬼界が島に流され、治承三年（一八三九）寂、年三十七

二人
丹波少將成經と平判官康頼

鳥羽
京都市伏見區

六波羅
京都市賀茂川の東、今の下京區轆轤町　清盛の邸ありし所

六　有王島下り

さる程に、鬼界が島へ三人流されたりし流人、二人は召還されて都へ上りぬ。俊寛僧都一人、憂かりし島の島守となりにけるこそうたてけれ。僧都の、稚うより不惑にして召使はれける童あり。名をば有王とぞ申しける。鬼界が島の流人、今日既に京都へ入ると聞えしかば、鳥羽まで行向うて見けれども、我が主は見え給はず。「如何に。」と問へば「それは猶罪深しとて、島に殘され給ひぬ。」と聞いて、心憂しなども疎なり。常は六波羅邊に佇みありいて聞きけれども、赦免あるべしとも聞出さず。僧都の御女の忍びておはしける處へ參りて「此の瀬にも洩れさせ給ひて、御上りも候はず。如何にもしてかの島へ渡りて、御行方をも尋ね參らせんとこそ思ひ立ちて候へ、御文賜はらん。」と申しければ、泣

三月
治承三年三月

法勝寺
今の京都市左京區岡崎町にありし天台宗の寺　承暦元年（一七三七）白河天皇の御創建

く泣く書いてたうだりけり。暇を乞ふともよも赦さじとて、父にも母にも知らせず。唐船の纜は卯月・五月にも解くなれば、夏衣たつを遅くや思ひけん、三月の末に都を出て、多くの波路を凌ぎつゝ、薩摩潟へぞくだりける。薩摩よりかの島へ渡る船津にて、人怪しみ、着たる物を剝取りなどしけれども、少しも後悔せず、姫御前の御文ばかりぞ、人に見せじとて元結の中に隠したり。

さて商人船に乗りて、件の島へわたりて見るに、都にてかすかに傳へ聞きしは事の數にもあらず、田もなし、畑もなし、村もなし、里もなし。おのづから人はあれども、言ふ詞も聞知らず。もしかやうの者共の中に我が主の行末知りたる者やあらんと、「もの申さう。」といへば、「何事。」と答ふ。「これに都より流され給ひし法勝寺の執行御房と申す人の御行末や知りたる。」と問ふに、法勝寺とも執行とも知りたらばこそ返事もせめ、唯頭を掉りて「知らず。」と

白雲跡を埋んで
山遠雲埋ニ行客跡一　松寒風破ニ旅人夢一（和漢朗詠集）

沙頭に印を刻む
沙頭刻レ印鷗遊處（和漢朗詠集）

いふ。其の中に或者が心得て、「いさとよ、さやうの人は三人これにありしが、二人は召還されて都へ上りぬ。今一人は殘されて、あそこゝに迷ひありけども、行方も知らず。」とぞいひける。

山の方の覺束なさに、遙かに分入り、峯に攀ぢ、谷に下れども、白雲跡を埋んで往來の道も定かならず、晴嵐夢を破りて其の面影も見えざりけり。山にては終に尋ねも遇はず、海の邊について尋ぬるに、沙頭に印を刻む鷗、沖の白洲にすだく濱千鳥の外は、あと問ふ者もなかりけり。

或朝磯の方より、蜻蛉などのやうに痩せ衰へたる者一人よろぼひ出できたり。元は法師にてありけりと覺えて、髮はそらざまへ生ひあがり、よろづの藻屑取附けて、荆棘を戴きたるが如し。繼目顯れて皮ゆたひ、身に着たるものは絹・布のわきも見えず。片手には荒海布を拾ひ持ち、片手には網人に魚を貰うて持ち、歩

阿修羅
梵語 無酒・非天等と譯す 闘争を事とする一種の鬼神

修羅
阿修羅の略

三悪
地獄・餓鬼・畜生の三悪道

四趣
四悪道 前の三悪道に修羅を加ふ

む様にはしけれども、はかもゆかず、よろよろとして出て來たり。都にて多くの乞丐人見しかども、かゝる者をば未だ見ず。「諸阿修羅等居在大海邊」とて、修羅の三悪四趣は深山大海の邊にありと佛の說き置き給ひたれば、知らず、われ餓鬼道に尋ね來るかと思ふほどに、彼もこれも次第に歩み近づく。若しかやうの者も、我が主の御行方知りたることやあらんと、「物申さう。」といへば、「何事。」と答ふ。「これに都より流され給ひし法勝寺の執行御房と申す人の御行末や知りたる。」と問ふに、童は見忘れたれども、僧都はいかでか忘るべきなれば、「これこそそれよ。」といひもあへず、手に持てる物を投棄てて、沙の上に倒れ伏す。さてこそわが主の行方も知りてけれ。頓て消え入り給ふを、膝の上にかき載せ奉り、「有王が參りて候。多くの波路を凌ぎてこれまで尋ね參りたる甲斐もなく、如何に頓てうき目をば見せさせ給ふぞ。」と、泣く泣く

去年
治承二年

申しければ、やゝありて少し人心地出で來、扶け起されて、「誠に汝がこれまで尋ね來たる志の程こそ神妙なれ。明けても暮れても都の事のみ思ひ居たれば、戀しき者どもが面影は夢に見る折もあり、幻に立つ時もあり。身いたく疲れ弱りて後は、夢も現も思ひわかず。されば今汝が來れるも、只夢とのみこそ覺ゆれ。若し此の事夢ならば、覺めての後は如何せん。」有王、「現にて候なり。此の有様にて、今まで御命の延びさせ給ひて候こそ、不思議には覺え候へ。」と申せば、「されば、こそ、去年少將や判官入道に棄てられて後の頼り無さ、心の中をば只推量るべし。其の瀨に身をも投げんとせしを、よしなき少將の『今一度都の音信をも待てかし。』など慰め置きしを、愚かに若しやと頼みつゝ、存らへんとはせしかども、此の島には人の食物絶えてなき所なれば、身に力のありし程は、山に登りて硫黄といふ物を取り、九國より通ふ商人に遇ひ、

物に換へなどせしかども、日に添ひて弱りゆけば、今はその業もせず。斯様に日の長閑なる時は、磯に出でて、網人・釣人に手を摺り、膝を屈めて魚を貰ひ、汐干の時は貝を拾ひ、荒海布を取り、磯の苔に露の命を懸けてこそ、今日までもながらへたれ。さらでは、うき世を渡るよすがをば、如何にしつらんとか思ふらん。」

僧都、「これにて何事をもいはばやとは思へども、いざ我が家へ。」と宣へば、「この御有様にても家を持ち給へる不思議さよ。」と思ひて行く程に、松の一叢ある中に、より竹を柱とし、蘆を結ひて桁・梁にわたし、上にも下にも、松の葉をひしと取懸けたれば、雨風溜るべうもなし。昔は法勝寺の寺務職にて、八十餘箇所の庄務を司りしかば、棟門・平門の内に、四五百人の所従眷族に圍繞せられてこそ坐せしか。目のあたりかゝる憂き目を見給ひけるこそ不思議なれ。業にさまざまあり。順現・順生・順後業と云へり。僧

西八條
京都八條の北にありし平清盛の邸

鞍馬
京都府愛宕郡にある山

都一期の間、身に用ふる所、皆大伽藍の寺物・佛物にあらずといふ事なし。されば彼の信施無慚の罪に依つて、今生にはや感ぜられけりとぞ見えたりける。

僧都、現にてありけりと思ひ定めて、「抑、去年少將や判官入道が迎にも、此等が文といふ事もなし。今汝が便りにも音信のなきは、かうとも言はざりけるか。」有王、涙に咽び俯して、暫しは物も申さず。やゝありて起き上り、涙を抑へて申しけるは、「君の西八條へ出でさせ給ひしかば、やがて追捕の官人參りて御内の人々搦め取り、御謀叛の次第を尋ねて、失ひ果て候ひぬ。北の方は、稚き人を隱しかね參らせ給ひて、鞍馬の奥に忍ばせ給ひて候ひしに、此の童ばかりこそ時々參りて宮仕つかまつり候ひしか。何れも御歎のおろかなる事は候はざりしかども、稚き人は餘りに戀ひまゐらさせ給ひて、參り候度毎に、『有王よ。鬼界が島とかやへ

我具して參れ。』とむづからせ給ひしが、過ぎ候ひし二月に、痘と申す事に失せさせ給ひぬ。北の方は其の歎と申し、この御事と申し、一方ならぬ御思に沈ませ給ひ、日に添へて弱らせ給ひしが、同三月二日の日、遂にはかなくならせ給ひぬ。今は姫御前ばかり、奈良の姨御前の御許に御渡り候。是に御文給はつて候。」とて取出だいて奉る。

開けて見給へば、有王が申すに違はず書かれたり。奥には、「などや三人流されたる人の、二人は召還されて候に、今まで御上り候はぬぞ。あはれ尊きも賤しきも、女の身ばかり心うかりける物はなし。男の身にて候はば、渡らせ給ふ島へも、などか尋ね參らで候べき。此の有王御供にて、急ぎ上らせ給へ。」とぞ書かれたる。「これ見よ、有王。この子が文の書き様のはかなさよ。『おのれを供にて急ぎ上れ。』と書きたるこそ怨めしけれ。心に任せた

人の親の人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな（後拾遺和歌集）

蟬の聲
「千峯鳥路含ニ梅雨一、五月蟬聲送ニ麥秋一」（和漢朗詠集）

る俊寛が身ならば、何とてか三年の春秋をば送るべき。今年は十二になるとこそ思ふに、これ程はかなくては、人にも見え、宮仕をもして、身をも扶くべきか。」とて泣かれけるにこそ、人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふ程も知られけれ。「此の島へ流されて後は、暦もなければ月日の換りゆくをも知らず、只おのづから花の散り、葉の落つるを見て、春秋を辨へ、蟬の聲麥秋を送れば夏と思ひ、雪の積るを冬と知る。白月・黑月の變り行くを見ては三十日を辨へ、指を折りて數ふれば、今年は六つになると覺ゆる稚き者も、はや先立ちけるござんなれ。西八條へ出でし時、此の子が我も行かうと慕ひしを、やがて還らうずるぞと拵へ置きしが、今のやうに覺ゆるぞや。それを限りと思はましかば、今暫しもなどか見ざらむ。親となり、子となり、夫婦の緣を結ぶも、皆此の世一つに限らぬ契ぞかし。などさらば、それらがさや

うに先立ちけるを、今迄夢幻にも知らせざりけるぞ。人目も愧ぢず、如何にもして命生かうと思ひしも、是等を今一度見ばやと思ふ爲なり。姫が事ばかりこそ心苦しけれども、それも生身なれば、嘆きながらも過さんずらん。さのみながらへて、おのれに憂き目を見せんも、我が身ながらもつれなかるべし。」とて、自らの食事を止め、偏に彌陀の名號を唱へて、臨終正念をぞ祈られける。有王渡りて二十三日と云ふに、その庵の内にて遂に終り給ひぬ。年三十七とぞ聞えし。

有王、空しき姿に取りつき、天に仰ぎ、地に俯し、泣き悲しめどもかひぞなき。心の行く程泣きあきて、「やがて後世の御供仕るべう候へども、この世には姫御前ばかりこそ御渡り候へ。後世弔ひ參らすべき人も候はず。しばしながらへて弔ひ參らせ候はん。」とて、臥戸を改めず、庵をきりかけ、松の枯枝、蘆の枯葉を取掩ひ、

法華寺
奈良市法華寺町にある眞言宗西大寺派所屬の尼寺

高野
和歌山縣伊都郡高野山　金剛峯寺のある所

奥の院
弘法大師靈廟の附近一帶の地

蓮華谷
金剛峯寺伽藍の東二粁餘支院末寺等あり

藻鹽の煙と爲し奉り、荼毗ことをへにければ、白骨を拾ひ首にかけ、又商人船の便に、九國の地へぞ着きにける。

僧都の御女のおはしける處に參りて、ありし樣初より細々と語り申す。「なかなか文を御覽じてこそ、いとゞ御思はまさらせ給ひて候ひしか。硯も紙も候はねば、御返事にも及ばず。思召され候ひし御心の中、さながら空しうて止み候ひにき。今は生生世々を送り、他生曠劫を隔つとも、いかでか御聲をも聞き、御姿をも見參らせ給ふべき。」と申しければ、伏しまろび聲も惜しまず泣かれけり。やがて十二の歳尼になり、奈良の法華寺に行ひすまして、父母の後世を弔ひ給ふぞあはれなる。有王は俊寛僧都の遺骨を首にかけ、高野へのぼり、奥の院に納めつゝ、蓮華谷にて法師になり、諸國七道修行して、主の後世をぞ弔ひける。かやうに人の思ひ歎きのつもりぬる平家の末こそ怖しけれ。（平家物語）

俊基朝臣　藤原氏、後醍醐天皇の寵眷を得、日野資朝と共に興復の謀に參し、元弘二年（一九九二）鎌倉にて斬らる。

土岐十郎頼貞　北條氏の討滅を計り、敗れて自殺す

七月　元弘元年（一九九一）

今度の白狀　共に事に與りて捕へられし僧文觀の陳述

落花の雪　またや見む交野のみのの櫻狩花の雪ちる春の曙（新古今和歌集）

七　落花の雪

俊基朝臣は、先年土岐十郎頼貞が討たれし後、召捕られて鎌倉まで下り給ひしかども、樣々に陳じ申されし趣、げにもとて赦免せられたりけるが、又今度の白狀どもに、專ら陰謀の企、彼の朝臣にありと載せたりければ、七月十一日に、又六波羅へ召捕られて、關東へ送られ給ふ。　再犯赦さざるは法令の定むる所なれば、何と陳ずるとも許されじ、路次にて失はるるか、鎌倉にて斬らるるか、二つの間をば離れじと思ひ設けてぞ出でられける。

落花の雪に踏迷ふ、交野の春の櫻狩、紅葉の錦を着て歸る、嵐の山の秋の暮、一夜をあかす程だにも、旅寢となればものうきに、恩愛の契淺からぬ、わが故郷の妻子をば、行方も知らず思ひ置き、年久しくも住馴れし、九重の帝都をば、今を限りと顧みて、思はぬ旅

交野　河内國、今の北河内郡交野村

紅葉の錦　朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦きぬ人ぞなき（拾遺和歌集）

關の清水　逢阪の關の清水にかげみえて今やひくらむ望月の駒（拾遺和歌集）

鹽ならぬ海　琵琶湖

うねの野　近江より朝たちくればうねの野にたづぞなくなるあけぬこの夜は（古今和歌集）

時雨も

に出でたまふ、心の中ぞあはれなる。

憂きをばとめぬ逢阪の、關の清水に袖濡れて、末は山路を打出の濱、沖を遙かに見渡せば、鹽ならぬ海にこがれ行く、身をうき船の浮き沈み、駒もとゞろと踏みならす、勢多の長橋打渡り、行きかふ人にあふみ路や、世をうねの野に鳴く鶴も、子を思ふかとあはれなり。　時雨もいたく守山の、木の下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠分くる道を過ぎゆけば、鏡の山はありとても、涙に曇りて見えわかず。　物を思へば夜の間にも、老蘇の森の下草に、駒を駐めて顧みる、故郷を雲や隔つらん。　番場・醒ケ井・柏原、不破の關屋は荒れはてて、猶もるものは秋の雨の、いつか我がみの尾張なる、熱田の八劍伏し拜み、汐干に今や鳴海潟、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末は何處ととほたふみ、濱名の橋の夕汐に、引く人もなき捨小舟、沈みはてぬる身にしあれば、誰かあはれ

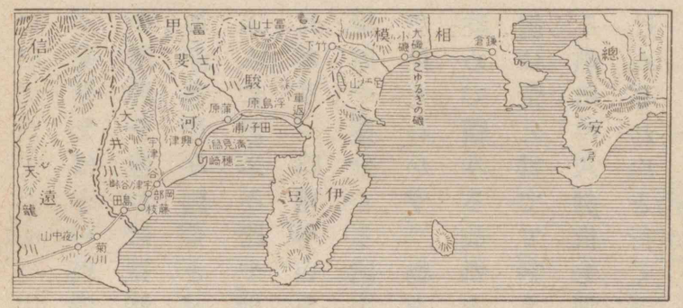
白露も時雨もいたくもる山は下葉殘らず色づきにけり（古今和歌集）

逢阪・打出の濱・勢多・うねの野・守山・篠原・鏡の山・老蘇の森・番場・醒ケ井・柏原近江にあり

不破の關屋
人住まぬ不破の關屋の板庇荒れにし後は只秋の風（新古今和歌集）

不破の關は美濃の國にあり

鳴海潟
小夜千鳥聲こそ近くなるみがたかたむく月にしほや滿つらむ（新古今和歌集）



舊東海道地圖（一）

とゆふぐれの、晩鐘鳴れば今はとて、池田の宿に着き給ふ。

旅館の燈幽かにして、雞鳴曉を催せば、匹馬風に嘶えて、天龍川を打渡り、小夜の中山越えゆけば、白雲路を埋み來て、そことも知らぬ夕暮に、家鄉の天を望みても、昔西行法師が「命なりけり」と詠じつゝ、二度越えし跡までも羨ましくぞ思はれける。隙行く駒の足早み、日已に亭午にのぼれば、餉進らする程とて、輿を庭前に舁き止む。轅を叩きて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、「菊川と申すなり。」と答へければ、承久の合戰の時、院宣書きたりし咎に

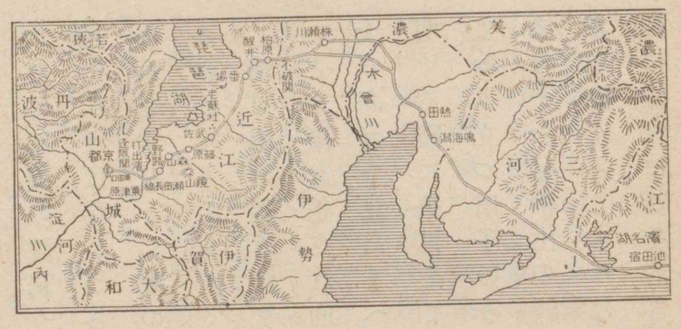
熱田・鳴海潟
尾張にあり

命なりけり
年たけてまたこゆべしと思ひきや命なりけりさやの中山（新古今和歌集）

濱名・池田宿・小夜の中山・菊川
遠江にあり

宗行卿
中御門中納言藤原宗行

南陽縣
南陽縣有二甘谷一、谷中水甘美、上有二大菊一…谷中人家飲二此水一、上壽百二三十、其中百餘歲、七八十者即爲レ夭（風俗通）



舊東海道地圖（二）

花ざかり、龍頭鷁首の船に乘り、詩歌・管絃の宴に侍りしことも、今因りて、宗行卿關東へ召下されしが、此の宿にて誅せられし時、

昔南陽縣菊水
今東海道菊川

汲二下流一而延レ齡
宿二西岸一而終レ命

と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今はわが身の上になり、あはれやいとゞまさりけん、一首の歌を詠みて、宿の柱にぞ書かれける。

いにしへもかかるためしをきく川のおなじ流に身をやしづめむ

大井川を過ぎたまへば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の、嵐の山の

大井川
近江と駿河の境
夢にも人の駿河なるうつの山べのうつつにも夢にも人のあはぬなりけり（伊勢物語）
上なき思
富士のねの煙はなほぞ立ちのぼる上なきものはおもひなりけり（新古今和歌集）
太平記
四十巻　作者不詳　花園天皇の文保二年より後村上天皇の正平二十二年まで五十餘年間の戰記

は二度見ぬ夜の夢となりぬと思ひつゞけ給ふ。島田・藤枝にかかりて、岡邊の眞葛うら枯れて、物の悲しき夕暮に、宇都の山邊を越えゆけば、蔦・かづらいと茂りて道もなし。昔業平の中將の、すみかを求むとて、東の方に下るとき、「夢にも人の逢はぬなりけり」と詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。

清見潟を過ぎたまへば、都に歸る夢をさへ、通さぬ波の關守に、いとゞ涙を催され、向ひはいづこ三保が崎、興津・蒲原打過ぎて、富士の高嶺を見たまへば、雪の中より立つ煙、上なき思に比べつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過ぎゆけば、汐干や淺き船浮きて、おり立つ田子のみづからも、浮世をめぐる車返し、竹の下道行きなやむ、足柄山の峠より、大磯・小磯見下して、袖にも波はこゆるぎの、急ぐとしもはなけれども、日數つもれば、七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそ着きたまひけれ。（太平記）

鴨長明
俗稱菊太夫
加茂社司の子
後鳥羽上皇の時御歌所寄人となり、後出家して蓮胤と號す　建保四年（一八七六）歿、年六十四と傳ふ
日野山
京都市伏見區
往生要集
六卷　源信僧都の著　淨土念佛に歸依すべきことを勸めしもの

八　日野の閑居

鴨　長明

いま日野山の奥に跡を隱して後、南に假の日がくしをさし出して、竹の簀子を敷き、その西に閼伽棚をつくり、中には、西の垣にそへて阿彌陀の畫像を安置し奉り、落日をうけて眉間の光とす。かの帳の扉に、普賢竝びに不動の像を懸けたり。北の障子の上に小さき棚を構へて、黑き皮籠三四合を置く。すなはち和歌・管絃・往生要集ごときの鈔物を入れたり。傍に箏・琵琶各一張をたつ。いはゆる折箏・つぎ琵琶これなり。東にそへて蕨のほどろを敷き、つかなみを敷きて夜の床とす。東の垣に窓をあけて、ここに文机を出せり。枕の方に炭櫃あり。これを柴折りくすぶるよすがとす。庵の北に少地をしめ、あばらなる姫垣を圍ひて園とす。すなはちもろもろの藥草を植ゑたり。假の庵の有樣

外山
日野山の山中に今に存す

かくの如し。

その處のさまをいはば、南に筧あり、岩をたゝみて水をためたり。林、軒近ければ、爪木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木のかづら跡を埋めり。谷しげけれど、西は晴れたり。觀念の便りなきにしもあらず。春は藤波を見る。紫雲の如くにして西の方に匂ふ。夏は時鳥を聞く。語らふごとに死出の山路をちぎる。秋は蜩の聲耳に充てり。空蟬の世を悲しむかと聞ゆ。冬は雪を憐む。積り消ゆるさま、罪障に譬へつべし。

鴨長明

もし念佛ものうく、讀經まめならざる時は、みづから休み、みづ

跡の白波
世の中を何にたとへむ朝ぼらけ漕行く船のあとの白波（拾遺和歌集、滿誓沙彌）

岡の屋
宇治川の東岸

滿沙彌
滿誓沙彌　左大辨笠麻呂　養老五年（一三八一）出家

潯陽の江
支那江西省

白樂天の「琵琶行」に「潯陽江頭夜送客、楓葉荻花秋瑟瑟」

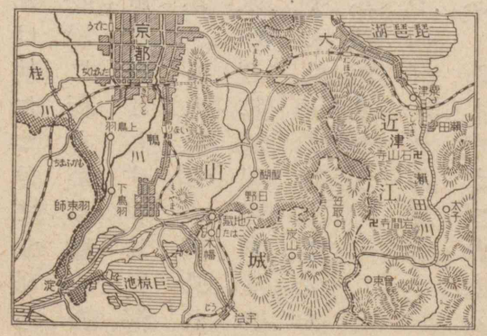
源都督
桂大納言源經信　琵琶の名手　その流を桂流といふ　承德元年（一

から怠るに、妨ぐる人もなく、又恥づべき友もなし。ことさらに無言をせざれども、ひとり居れば口業ををさめつべし。必ず禁戒を守るとしもなけれども、境界なければ何につけてか破らむ。もし跡の白浪に身をよする朝には、岡の屋に行きかふ船をながめて、滿沙彌が風情をぬすみ、もし桂の風、葉をならす夕には、潯陽の江を思ひやりて、源都督の流をならふ。もし餘りの興あれば、しばしば松の響に秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙けれども、人の耳を悅ばしめむとにもあらず、獨り調べ、獨り詠じて、みづから心を養ふばかりなり。

又麓に一つの柴の庵あり。すなはち山守が居る處なり。彼處に小童あり。時々來りて相とぶらふ。もしつれづれなる時は、これを友として遊びありく。彼は十六歳、我は六十、その齡ことの外なれど、心を慰むることはこれ同じ。あるは茅花を拔き、

七五七）歿、年八十二
秋風の樂　盤渉調の琵琶の曲名
流泉の曲　一名菩提樂　琵琶の祕曲
木幡山　京都府宇治郡
伏見・鳥羽　京都市伏見區
羽束師　京都府乙訓郡の村
勝地は主なければ　勝地本來無主ナレバ定主ナシ、大都山ハ屬ニ愛レ山人一（白樂天）
炭山・笠取　京都府宇治郡にある山

岩梨を採る。また零餘子をもり、芹をつむ。あるはすそわの田居に到りて、落穗を拾ひて穗ぐみをつくる。もし日うらゝかなれば、嶺に攀ぢのぼりて遙かに故郷の空を望み、木幡山・伏見の里・鳥羽・羽束師を見る。勝地は主なければ、心を慰むるに障なし。あゆみ煩なく、志遠く到る時は、これより峯つゞき、炭山を越え笠取を過ぎて、あるは岩間に詣で、あるは石山を拜む。もしは又粟津の原を分けて蟬丸の翁が跡を弔ひ、田上川を渡りて猿丸大夫が墓をたづぬ。歸るさには、折につけつゝ、櫻を狩り、紅葉を求め、蕨を折り、木の實を拾ひて、且は佛に奉り、且は家苞にす。



日野附近地圖

岩間　大津市正法寺一名岩間寺
石山　大津市石山寺
粟津の原　滋賀縣大津市
蟬丸　逢坂山に庵を結びし盲目の琵琶の名手
田上川　宇治川の上流　滋賀縣粟太郡
猿丸大夫　平安朝初期の歌人
眞木の島　京都府久世郡
網代を設け、魚を捕りし所
山鳥の　山鳥のほろほろと鳴く聲聞けば父かとぞ

もし夜靜かなれば、窓の月に故人をしのび、猿の聲に袖をうるほす。草むらの螢は遠く眞木の島の篝火にまがひ、曉の雨はおのづから木の葉吹く嵐に似たり。山鳥のほろほろと鳴くを聞きても、父か母かと疑ひ、峯のかせぎの近く馴れたるにつけても、世に遠ざかる程を知る。あるは埋火をかき起して、老の寢覺の友とす。恐しき山ならねど、梟の聲をあはれむにつけても、山中の景色折につけて盡くることなし。況や深く思ひ、深く知れらむ人のためには、これにしも限るべからず。

大かたこのところに住みそめし時は、あからさまと思ひしかど、今すでに五とせを經たり。假の庵もやゝ古屋となりて、軒には朽葉ふかく、土居に苔蒸せり。おのづから事のたよりに都を聞けば、この山に籠りゐて後、やむごとなき人のかくれ給へるもあまた聞ゆ。ましてその數ならぬたぐひ、つくしてこれを知る

思ふ母かとぞ思ふ（行基）
世に遠ざかる程
山深み馴るるかせぎのけぢかきに世に遠ざかる程ぞ知らるる（西行）
埋火をかき起して
いふこともなき埋火をおこすかな冬のねざめの友しなければ（堀河百首）
恐しき山ならねど
山ふかみけぢかき鳥の音はせで物おそろしきふくろふの聲（西行）

べからず。たびたびの炎上に滅びたる家、またいくそばくぞたゞ假の庵のみ、のどけくして恐なし。程せばしと雖も、夜臥す床あり、晝居る座あり、一身を宿すに不足なし。がうなは小さき貝を好む。これよく身を知るによりてなり。みさごは荒磯にゐる。すなはち人を恐るるが故なり。我亦かくの如し。身を知り、世を知れば、願はず、まじらはず、たゞ靜かなるを望とし、愁なきをたのしみとす。

すべて世の人の住家を造るならひ、必ずしも身のためにはせず。あるは妻子・眷屬のために造り、あるは親昵・朋友のために造る。あるは主君・師匠および財寶・馬牛のためにさへこれを造る。われ今身のために結べり。人のために造らず。故いかんとなれば、今の世のならひ、この身のありさま、伴なふべき人もなく、頼むべき奴もなし。たとひ廣く造れりとも、誰をか宿し、誰をか据

ゑむ。

それ人の友たる者は、富めるを貴み、懇なるを先とす。必ずしも情あると直なるとをば愛せず。たゞ絲竹・花月を友とせむには如かじ。人の奴たる者は、賞罰の甚だしきを顧み、恩の厚きを重くす。更にはごくみ憐ぶといへども、やすく靜かなるをば願はず。たゞ我が身を奴とするには如かず。若しなすべき事あれば、すなはち自ら身を使ふ。たゆからずしもあらねど、人を從へ、人を顧みるよりは安し。もし歩くべき事あれば、自ら歩む。苦しといへども、馬鞍・牛車と心をなやますには似ず。今一身を分ちて二つの用をなす。手の奴、足の乘物、よく我が心に適へり。心また身の苦しみを知れれば、苦しむ時は休めつ、まめなる時はつかふ。つかふとても、たびたびすぐさず。ものうしとても、心を動かすことなし。いかに況や常にありき、常に動くはこれ養

たゞ心一つ
三界唯一心
心外無別法
（華厳經）

生なるべし。何ぞ徒らに休み居らむ。人を苦しめ、人を惱ますは、また罪業なり。いかが他の力をかるべき。

衣食のたぐひまた同じ。藤の衣・麻の衾、得るに隨ひて肌をかくし、野邊のつばな・峯の木の實、わづかに命をつなぐばかりなり。人にまじはらざれば、委を恥づる悔もなし。糧乏しければ、おろそかなれどもなほ味を甘くす。すべてかやうのこと、樂しく富める人に對していふにはあらず。たゞ我が身一つにとりて、昔と今とをたくらぶるばかりなり。

大かた世を遁れ、身を捨てしより、怨もなく、恐もなし。命は天運に任せて、惜しまず、厭はず。身をば浮雲になずらへて、頼まず、まだしとせず。一期のたのしびはうたゝねの枕の上にきはまり、生涯の望はをりをりの美景に殘れり。

それ三界はたゞ心一つなり。心もし安からずば、牛馬・七珍も

魚にあらざれ
ば、ハ、メ子非レ魚、安知ニ魚之樂ヲ一
（莊子秋水篇）
方丈記
一卷　鴨長明
の隨筆集

由なく、宮殿・樓閣も望なし。今淋しきすまひ・一間の庵、みづからこれを愛す。おのづから都に出でては、乞食となれることを恥づといへども、歸りてこゝに居るときは、他の俗塵に着することをあはれぶ。もし人、このいへることを疑はば、魚・鳥のありさまを見よ。魚は水に飽かず。魚にあらざればその心を知らず。鳥は林を願ふ。鳥にあらざればその心を知らず。閑居の氣味も亦かくの如し。住まずして誰か悟らむ。（方丈記）

ながめてもあはれと思へ大かたの空だに悲し
秋の夕ぐれ
草も木もなびきし秋の霜きえてむなしき苔を
はらふ山かぜ

鴨　長明

吉田兼好
本姓卜部　歌人　正平五年（一三〇一）寂年六十八（或云六十九）

九　家居

吉田兼好

家居のつきづきしくあらまほしきこそ、かりのやどりとは思へど、興あるものなれ。

よき人ののどやかに住みなしたる所は、さし入りたる月の色もひときはしみじみと見ゆるぞかし。今めかしくきらゝかならねど、木立ものふりて、わざとならぬ庭の草も心あるさまに、簀子・透垣のたよりをかしく、うちある調度もむかしおぼえてやすらかなるこそ、心にくしと見ゆれ。おほくのたくみの心をつくしてみがきたて、唐の、大和の、めづらしくえならぬ調度どもならべおき、前栽の草木まで心のまゝならずつくりなせるは、見る目もくるしく、いとわびし。さてもやはながらへ住むべき。又時のまの煙ともなりなむとぞ、うち見るよりもおもはるる。おほ

後德大寺大臣
藤原實定　歌人　晩年薙髪して如圓といふ　建久二年（一八五一）歿年五十三

西行
俗名佐藤義清　山家集の著者　建久元年寂、年七十三

綾小路宮
龜山天皇第十三皇子　性惠法親王

栗栖野
中古朝家の牧場をいひ、同名の地所々にあり　これは

かたは家居にこそ、ことざまはおしはからるれ。

後德大寺大臣の、寢殿に鳶ゐさせじとて繩をはられたりけるを、西行が見て、「鳶のゐたらむ、何かはくるしかるべき。この殿の御心、さばかりにこそ。」とて、その後はまゐらざりけると聞侍るに、綾小路宮のおはします小坂どのの棟に、いつぞや繩をひかれたりしかば、かのためし思ひ出でられ侍りしに、まことや「烏のむれゐて池のかへるをとりければ、御覽じかなしませ給ひてなむ。」と人のかたりしこそ、さてはいみじくこそとおぼえしか。德大寺にも、いかなるゆゑか侍りけむ。

神無月の頃、栗栖野といふ所を過ぎてある山里にたづね入ること侍りしに、遙かなる苔のほそ道をふみわけて、心ぼそく住みなしたる庵あり。木の葉にうづもるるかけひのしづくならで

は、つゆおとなふものなし。閼伽棚に菊・紅葉など折りちらしたる、さすがに住む人のあればなるべし。かくてもあられけるよとあはれに見るほどに、かなたの庭に、おほきなる柑子の木の、枝もたわゝになりたるがまはりをきびしくかこひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかばとおぼえしか。

家の造りやうは、夏をむねとすべし。冬はいかなる所にも住まる。あつき頃わろき住居はたへがたきことなり。ふかき水は涼しげなし。淺くてながれたる、遙かに涼し。こまかなる物を見るに、遣戸は蔀の間よりも明し。天井の高きは、冬さむく、燈くらし。「造作は用なき所をつくりたる、見るも面白く、萬づの用にもたちてよし。」とぞ人の定めあひ侍りし。

屏風・障子などの繪も文字も、かたくななる筆やうして書きたるが見にくきよりも、宿のあるじのつたなく覺ゆるなり。大方もてる調度にても心おとりせらるる事はありぬべし。さのみよき物を持つべしとにもあらず。損ぜざらんためとて、しなゝく、見にくきさまにしなし、めづらしからんとて、用なき事どもしそへ、わづらはしく好みなせるをいふなり。古めかしきやうにて、いたくことごとしからず、費もなくて、物がらのよきがよきなり。（徒然草）

峠

夏目漱石
名は金之助
文學者　大正五年歿、年五十

10 山路

夏目漱石

山路を登りながら、かう考へた。

智に働けば角が立つ。情に棹（サ）させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。住みにくさが亢（コウ）じると、心安い處へ引越したくなる。何處へ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生れ、畫が出來る。

越すことのならぬ世が住みにくければ、住みにくい處をどれ程か寛（クツロ）げて、束の間の命を、束の間でも住みよくせねばならぬ。こゝに詩人といふ天職が出來て、こゝに畫家といふ使命が降る。あらゆる藝術の士は人の世を長閑（ノドカ）にし、人の心を豊かにするが故に貴い。

住みにくき世から住みにくき煩ひを引拔いて、有難い世界を

靈臺
不レ可レ内ニ於
靈臺一（莊子、
庚桑楚篇）
方寸
今已失ニ老母一、
方寸亂矣（通
鑑漢獻帝記）

まのあたりに寫すのが詩である、畫である。或は音樂と彫刻である。細かにいへば、寫さないでもよい。たゞまのあたりに見れば、そこに詩も生き、歌も湧く。着想を紙に落さずとも、瑠璃の音は胸裡に起る。丹青を畫架に向つて塗抹せずとも、五彩の絢爛は自ら心眼に映る。たゞおのが住む世をかく觀じ得て、靈臺方寸のカメラに、澆季溷濁の俗界を清くうらゝかに收め得れば足る。此の故に、無聲の詩人には一句無く、無色の畫家には尺縑無きも、かく人生を觀じ得る點に於て、かく煩惱を解脱し得る點に於て、かく清淨界に出入し得る點に於て、我利私慾の羈絆を掃蕩し得る點に於て、あらゆる俗界の寵兒よりも幸福である。

忽ち足の下で雲雀の聲がし出した。谷を見下したが、何處で鳴いてゐるか、影も形も見えぬ。たゞ聲だけが明かに聞える。せつせと忙しく、絶間なく鳴いてゐる。方幾里の空氣が、一面に

蚤に刺されて居たたまらないやうな氣がする。あの鳥の鳴く音には、瞬間の餘裕も無い。長閑な春の日を、鳴き盡くし、鳴きあかし、又鳴き暮さなければ氣が濟まぬとみえる。其の上、何處までも登つて行く、いつまでも登つて行く。雲雀はきつと雲の中で死ぬに相違ない。登りつめた揚句は、流れて雲に入つて、漂うてゐるうちに、形は消えてなくなつて、たゞ聲だけが空の裡に殘るのかも知れない。

忽ちシェレーの雲雀の詩を思ひ出して、口のうちで覺えた所だけ諳誦してみたが、覺えてゐる所は二三句しかなかつた。

前を見ては、後へを見ては、
物ほしとあこがるるかな、われ。
腹よりの笑といへど、
くるしみのそこにあるべし

シェレー（1792-1822）イギリスの詩人

うつくしき極みの歌に、
悲しさの極みの想、こもるとぞ知れ。

なるほどいくら詩人が幸福でも、あの雲雀のやうに思ひ切つて、一心不亂に、前後を忘却して、我が喜を歌ふ譯には行くまい。西洋の詩は無論のこと、支那の詩にも、能く萬斛の愁などといふ字がある。詩人だから萬斛で、素人なら一合で濟むかも知れぬ。して見ると、詩人は常の人よりも苦勞性で、凡骨の倍以上に神經が鋭敏なのかも知れぬ。超俗の喜もあらうが、無量の悲しみも多からう。そんならば詩人になるのも考へものだ。

詩人に憂はつきものかも知れないが、あの雲雀の聲を聞く心持になれば微塵の苦もない。菜の花を見ても、只うれしくて胸が躍るばかりだ。斯う山の中へ來て自然の景物に接すれば、見るものも聞くものも面白い。面白いだけで別段の苦しみも起

らぬ。

併し、苦しみのないのは何故だらう。只この景色を一幅の畫として見、一卷の詩として讀むからである。自然の力は是に於て尊い。吾人の性情を瞬刻に陶冶して、醇乎として醇なる詩境に入らしめるのは自然である。

苦しんだり、怒つたり、騷いだり、泣いたりは人の世につきものだ。余も三十年の間それをしとほして、飽き飽きした。余が欲する詩は、俗念を放棄して、暫くでも塵界を離れた心持になれる詩である。いくら傑作でも人情を離れた芝居はない。理非を絶した小説はすくなからう。どこまでも世間を出ることが出來ぬのが、彼等の特色である。ことに西洋の詩になると、人事が根本になるから、所謂詩歌の純粹なるものも、此の境を解脱することを知らぬ。どこまでも、同情だとか、愛だとか、正義だとか、自

採菊
結レ廬在ニ人境一而無ニ車馬喧一問レ君何能爾心遠地自偏採レ菊東籬下悠然見ニ南山一山氣日夕佳飛鳥相與還此中有ニ眞意一欲レ辯已忘レ言

獨坐
竹里館の詩
王維の作

由だとか、さういふものを材料としてゐる。いくら詩的になつても、地面の上を駈けあるいて、錢の勘定を忘れるひまがない。シェレーが雲雀を聞いて嘆息したのも無理はない。

うれしい事に、東洋の詩歌にはそこを解脱したのがある。

採レ菊東籬下　悠然見ニ南山一

たゞそれぎりの裏に、暑苦しい世の中をまるで忘れた光景が出てくる。垣の向ふに隣の人が覗いてゐる譯でもなければ、南山に親友が奉職してゐる次第でもない。超然と、出世間的に、利害損得の汗を流し去つた心持になれる。

獨坐幽篁裏　彈レ琴復長嘯
深林人不レ知　明月來相照

たゞ二十字の中に優に別乾坤を建立してゐる。此の乾坤の功德は小説や脚本の功德ではない。權利・義務・道德・禮儀で疲れは

桃源　武陵桃源の略
一種の仙境　陶淵明の「桃花源記」に出づ
王維　字は摩詰　唐代の詩人　畫をよくす
淵明　陶淵明　名は潛　東晉の詩人
ファウスト　ゲーテの傑作
ハムレット　シェークスピアの傑作

てた後、總べてを忘却してぐつすりと寢込むやうな功德である

二十世紀に睡眠が必要ならば、二十世紀に此の出世間的の詩味は大切である。惜しいことに、今の詩を作る人も、詩を讀む人も、みんな西洋人にかぶれてゐるから、わざわざ暢氣な扁舟を浮かべて此の桃源に遡るものは無いやうだ。

余はもとより詩人を職業にしてゐないから、王維や淵明の境界を、今の世に布教して廣げようといふ心掛も何もない。たゞ自分には、斯ういふ感興が演說會よりも舞蹈會よりも藥になるやうに思はれる。ファウストよりも、ハムレットよりも、有難く考へられる。かうやつて、たゞ一人、繪の具箱と三脚几とを擔いで春の山路をのそのそあるくのも、全くこれが爲である。淵明・王維の詩境を直接に自然から吸收して、少しの間でも非人情の天地に逍遙したいからの願。一つの醉興である。（草枕）

大西　祝
號は操山　文學博士　明治三十二年歿、年三十六

二　俚諺論

大西　祝

一國民の言ひ慣れたる俚諺の內容を深く研究すれば、其の國民の歷史・氣質・風俗・人情・學術・宗教・社會制度等、其の一切の生活と、其の生活の理想とに就いて發見するところ多々あるべし。此の點において、諸國民の俚諺を比較するはいと興味あることなり。

我が俚諺の中、今卽座に思ひ出づるもの三四を揭げんに、「花は櫻木、人は武士。」といふ美はしき諺は言ふも更なり、「武士は食はねど高楊枝。」「武士は相見互。」といふが如きは、我が國の歷史に大光彩を放てる武士といふ階級の理想を窺ふに足るべく、又これによりて、かゝる理想を愛重したりし全國民の氣風を察し得べし。「泣く子と地頭には勝たれぬ。」といふにいたりては、千萬言の歷史

的の敍述に劣らず。我が國の歴史の或時代に於ける地頭といふものの勢力の如何なりしかを察知し得べく、「女に家なし。」「貞女兩夫に見えず。」などは、我が國に固有なる諺とは言ふべからざるも、以て婦女子に關する我が社會制度の一面を窺ふに足るべく、「よめが姑になる。」「老いては子に從へ。」といへば、我が家族制度を示す處あり。「さはらぬ神に祟なし。」「棄てる神あれば助ける神あり。」「神は正直の頭にやどる。」「鬼神に横道なし。」「苦しい時の神だのみ。」などは宗教思想を示すべく、「袖ふり合ふも他生の縁。」といへば、以て佛教によりて注入せられたる因果思想を見るに足るべし。是等は唯念頭に浮かびたるまゝ數種の例を掲げたるに過ぎず。

歐洲諸國の諺には夫婦の關係をいへるもの甚だ多く、我が國にては寧ろ親子の關係をいへるもの多きが如し。「親の心子知らず。」「子を知るもの親にしくはなし。」「子ゆゑの闇に迷ふ。」「孝行をしたい時分に親はなし。」「可愛い子には旅をさせよ。」「子は三界の首枷。」「子が思ふよりは親は百倍も思ふ。」といふなど親の慈をいふや至れり盡くせり。その上に「子よりも孫は可愛い。」といへる、何の言かよくこれにまさりて子孫の愛のこまやかなることを發表するものぞ。かく親の慈愛を稱ふるものから、俚諺は又能く人情の他面をいふ。「子棄つる藪あれども、身棄つる藪なし。」とは、何ぞよく吾人の主我心を言ひ穿てる。

一般の人情に、自利の念ほど強きはなかるべし。俚諺の如何に多くが損得の念を主とせるものなるかを見よ。而して、其の中に如何に能く普通の人情を穿てるものあるかを見よ。「くださるものは夏も御小袖。」「かたきの家にても口をぬらせ。」「轉んでも唯は起きぬ。」「泣く子も目を見る。」誠に然り、泣く子すら自身を護るには油斷せざるなり。「油斷大敵。」「小を棄てて大に就け。」「長いも

のには卷かれよ。「ふときには呑まれよ。「曲らねば世に立たれず。」などといふ、何れか利益の念を主とせざる。聖人は「知らざるを知らずとせよ。」といひ、俚諺は「知つて知らざれ。」といふ。「鷹は死ぬとも穗をつまず。」など、氣慨を稱揚するもあれど、俚諺の大體の教訓は「かしこかれ、損をすな。」といふにあり。故に「立つてゐるものは親でも使へ。」といふ。

俚諺は事の一面を見て、これを誇張して言ふ傾あるものから、其の他面をいふに躊躇せざるが故に、一見其の判斷の相反するが如く思はるるものあれど、かく兩面よりいふところ、能く世態人情の實相にかなひて、其の判斷概ね公平なり。「好きこそ物の上手なれ。」といへば、「下手の横ずき。」といふを忘れず。「親に似ぬは鬼子。」といへば、「形生めども心は生まず。」といふ。かく事の兩面を叩いて世相の内祕、人情の裏面を穿たんと力むる、これ卽ち俚諺

が警戒と諷刺とに富める所以にして、中には一言よく人情の裏面を訐きて、巧みに罵倒し了するものあり。

同樣なる意味の俚諺を集むるも、亦一興ならんか。「猿も木から落ちる。」「弘法も筆のあやまり。」「智者も千慮に一失あり。」「龍馬のつまづき。」「上手の手から水がもる。」などの類多くあり。同一の俚諺を言ひかへたるの多き、「針の穴から天のぞく。」といふに越えたるはなからん。「管の穴から天のぞく。」「竹の管から天のぞく。」「鑰の穴から天のぞく。」「よしのずゐから天のぞく。」など、其の何れか一が原始のものならんか。

我が國の俚諺は、他國の俚諺と比して其の性質及び價値は如何。これらの問題を考ふる前には、先づ我が國の俚諺を採集せざるべからず。余輩は早く適當の準備を具へたる人が、此の事に手を着けんことを切望せざるを得ず。（大西博士全集）

金子元臣
國文學者　歌人　宮内省御歌所寄人　明治元年生

川柳點
もと、川柳が點をつけたる句の意
川柳は本名柄井正通　前句附の選者　寛政二年（一四五〇）歿、年七十三

三　川柳點

金子元臣

川柳點は實に剃刀の如きか。觸るるもの皆斷たれ、近づくもの皆傷つく。語句簡勁にして、直ちに人の肺腑に入り、諷刺骨に徹り、滑稽頤を解き、或は痛快に、或は輕妙に、或は突梯に、或は奇怪に、千變萬化、人をして應接に遑あらざらしむ。時に輕薄鄙俚なる調なきにしもあらねど、要するに寸にして珍なるものなり。いで左に其の二三を擧げて、いひ試みん。

あがるなといはぬばかりの帳を出し

無筆者年賀に來て、御慶帳の記名に困り、「さらば來ぬ分にして下され。」といひしこと、昔の笑話に見えたり。今は帳の代りに名刺受を玄關に出す。これもあがるなといはぬばかりなり。

竹の子は盜まれてから番がつき

蘇東坡
名は軾　宋代の文豪

道灌
太田持資　足利末期の武將　文明十八年（一四八六）歿　年五十五

いそがずば云云
いそがずばぬれざらましを旅人のあとより晴るる野路のむらさめ

塙檢校
名は保己一　國學者　文政四年（一八二一）歿、年七十六

よくあることなり。後の祭にもあれ何にもあれ、番を附くるは附けざるに勝れり。聞きやうによりては、諷刺ともなり、訓誡ともなる。

おさへれば薄はなせばきりぎりす

形容の妙を曲盡せり。蘇東坡が「餓蛟渴虎ヲ取ル。」と書きしを、いみじき手がらの樣に驚ける人、もし此の句を見ば何とかいはん。

本降になつて出てゆく雨やどり

道灌の「いそがずば濡れざらましを」の歌と一對の巧語。急ぎてもわろし、急がでもわろし。とにかく考へ物なり。

提燈が消えて座頭に手を引かれ

その矛盾がをかしきなり。塙檢校が「さてさて目あきは不自由な。」と、いひしに似たり。

片假名に四角な文字は手を引かれ

漢文に捨假名・反点の左右にうるさく附纏へるさま、譬へ得て妙。昔のヲコト點ならんには「四角な文字に灸をすゑ」ともいはばいふべし。

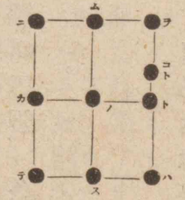
手紙には狸臺には鯉を載せ

手紙を見て肝を潰し、臺を見て胸撫でおろすらんをかしさよ。近來は、中等教育を終へたる者の文章にも、この類多し。あながちに此の狸をのみ笑ひ難くや。

名物を食ふが無筆の旅日記

腹のふくるる旅日記かな。食ふより外に能なき人間を罵倒し得て痛快。

泣く泣くもよい方を取る形見わけ



ヲコトト點

小野九太夫
假名手本忠臣藏に出づ鹽谷判官の老臣

戸隱
長野縣戸隱山なる戸隱明神手力雄命を祀る

能因
歌僧　俗名橘永愷　一條天皇頃の人

人情の弱點を穿ち過ぎて、餘りに酷なる心地す。しかし、事實なるをいかにせん。かの赤穗の城渡しにお金配分に高割を唱へし小野九太夫は、この露骨なるものか。

かくの如く、川柳點は尋常茶飯の出來事を捉へて、よく滑稽化するのみならず、又最も眞面目なるべき故事・傳說・史實等を題目として、その縱横自在なる口吻を弄せり。

戸隱も神樂のあひだ髭をぬき

岩戸の細目に開くまでは、用のなき戸隱明神なるを思ふべし。

鑷に髭ぬくひま人の所作を、神代に附會したる、働あり。

御紀行拜見に能因は當惑し

なまじひに名歌を詠みて、苦勞をまうけたりしは能因なり。天日に焦がして、顏だけは黑めたれど、紀行までは手がとゞかずやありけん、物に其の沙汰なし。作者のつけ目は此處なり。但

し袋草紙に、「一度においては實か。何時も室内旅行家にはあらざりけらし。」とあり。

袋草紙　四卷　歌學書　藤原清輔著

八十島　宮城縣の松島

忠盛　平忠盛　仁平三年（一八一三）歿、年五十八

油坊主云々　平家物語卷六「祇園の女御の事」の條にあり

隼太　猪の隼太

盛衰記　源平盛衰記　四十八卷　平家一門の興亡を記せる戰記物語

頼政　晩年剃髪して世に源三位入道と稱す　治承四年（一八四〇）歿、年七十七

頼政鵺を射る　盛衰記卷十六にあり

時致　曾我五郎　河津祐泰の子　建久四年（一八五三）兄祐成と共に父の仇工藤祐經を斬る　同年歿　年二十

祐成　曾我十郎　時致の兄　父の仇を報じ、仁田忠常に殺さる　年二十二

大磯　神奈川縣中郡の町

曾我物語

油坊主（劇）

ヤソジマ

八十島の記を書けり。」とあり。

忠盛の高名の場を犬がなめ抱きとめしは油坊主なるを思ふべし。わざと聯想の一階を飛越して、高名の場を嘗めたりといへる、滑稽・突梯、容易に及ぶべからず。

その暗さ隼太櫻に衝きあたり

盛衰記、頼政鵺を射る條に、「黒雲とは見たれども、天は實に暗し。いづこを射るべしと、矢所さだかならず。」とあり。乃ち、郎等隼太が、左近の櫻に鼻衝きあててまごまごする一場の喜劇を案出し

來れるなり。作者はいかなるへうきん者ぞ。

時致は鞭をかじつて息をつぎ兄祐成が急を救はんとて、途に百姓の駄馬を奪ひて大磯に驅けつくるは、曾我の物語中出色の快譚なり。これを圖にして、大根の鞭を添へたるは畫工の氣轉なり。せきにせいたる息やすめに、その大根を嚙らせたるはこの作者の氣轉なり。

佐野の馬戸塚の阪で二度ころび

戸塚の阪は鎌倉入の一難處。元來、乘力なき源左が瘦馬、さぞや越えなづみしならん。さるを、二度まで轉びたりと誇張した

佐野常世（小堀鞆音筆）

戰記物語十二卷

佐野源左衞門尉常世、謠曲「鉢の木」の主人公

戸塚神奈川縣鎌倉郡の町

芭蕉松尾氏、俳諧正風の祖（元禄七年（一六九四）歿、年五十一）

道風小野氏、書家（三蹟の一、貞元元年（一六三六）歿、年八十一）

文王支那周の人、名は昌、西伯と號す

太公望呂尙といふ、文王・武王を輔け天下を統一せしむ

るに、大いなる可笑味を生ず。

芭蕉は飛びこみ道風は飛びあがり

湊合の妙を見る。主題の蛙を言はで、突然に仕立てたるところに一種の面白味あるなり。

釣れますかなどと文王そばに寄り

流石の聖人文王と奇傑太公望との邂逅も、話の口火を切るには極めて平凡ならざるを得ず。たゞ「などと」の語、胸に一物ある趣を髣髴し來りて、幾多の波瀾あるを覺ゆ。

無力蝦　催馬樂

ちからなきかへる　力なきかへる
骨なき蚯蚓　ほねなきみゝず

穗積重遠
法學博士　男爵　東京帝國大學教授　明治十六年生

三　法律閑話

穗積重遠

江戸時代の笑話を材料として法律談を試みる。先づ法律論の代用として役立ちさうな笑話を、少しばかり拾つて見よう。

契約の申込をしたが、相手方が返事をしない場合には承諾があつたものと見るべきだらうか。「默する者は承諾と看做さる」といふ法律格言があり、實際我々の所へも入會の勸誘狀が來たり、書物を送り附けて來たりして、「御返事無之節は御承諾と看做可申」云々と云つて來るのがある。しかし、それは原則としてはどうも無理な樣だ。かういふ話がある。

友達のところから初鰹を貰ひ料理しようとおもふに、ふつとおもひ出した精進日。折角芥子までかいたのに食はれぬも業腹と、鰹を持つて佛壇の前へゆき、「もしおやぢ樣、この鰹を

貰ひましたが、けふは御命日だから食ひやせん。それとも又食べても大事ごぜへせんけりや、必ず御返事におよびやせん。」

我が國今後の法律問題中、重要且困難なものの一つは、長子相續制問題である。

引越して來た隣家の親父、大病もさし重りて、三人の子供へ讓金の噂を聞くに、「惣領息子に金百兩、次男に二百兩、三男に三百兩」とのこと。「はて變つた讓金ぢや。惣領こそ三百兩で、二男三男は順に少なさうなものぢやが、どうした譯ぢや。」と、よくよく聞けば、「借金を讓るの。」

この話によると、三人の子供にそれぞれ遺產を讓つたことは不思議とされてゐないので、唯其の割合が問題になつてゐる。なほ、相續といふのはプラスの財產の相續のみでなく、マイナス財產卽ち債務の相續があり得るといふことが、この話の中にあ

らはれてゐる。

尤も、右の話の場合は遺言相續であつて、親が遺言無しに死んだ場合の法定相續がどうだつたかはこれでは分らないが、長子獨占が必然でなかつたこと、及び遺言が重きをなしたことは、この話で推測される。この遺言が重んじられたといふことについては、も一つかういふ話がある。

天邪鬼（あまのじやく）のやうな息子故、遺言は反けて言ふが好いと、息子を呼寄せ、「もはや暇乞ぢや。死んでも必ず物入すな。菰に包み川へ捨てよ。」というて死ぬ。息子思ふやう、「さてさて是まで親の仰に背いたが、一代一度の事、是ばかりは用ひずばなるまい。」

さて、法律學の問題として、何といつても最も根本的なものは「法律とは何ぞや」、卽ち法律の定義である。從來、普通に行はれた法律の定義は、所謂國家命令說で、それが今日なほ隱然勢力があ

る様である。即ち「法律は國家の命令なり。」といふのだが、これは所謂問を以て問に答へるもので、一向定義になつてゐないのみならず、國際法を包含しない不都合がある。しかし、それ等理論上の缺點はともかくも、私が右の定義を好まない最大の理由は、「國家は何事でも法律を以て命令し得ざるものなし。」といふ法律萬能思想に導きはしないかといふことである。これについてかういふ話がある。

さる國の殿様、お屋敷近く火もえ出で御居間へうつる騒ぎ、殿様うまれてから初めての類焼に大うろたへにて、やうやう御下館へ御立退なされ、翌日みなみなを召集められ、仰せ出されるやうは、「この後、火事法度。」

類焼を防ぐ最良の策は、家屋を耐火建築にすることである。又法律を防火の一助としようとならば、合理的・具體的な火の用

心の規則を設くべきだ。「火事法度」といふ抽象的命令では、自火も防げず、類焼も免れ得ない。

法律家の今一つの弊は、不必要にむづかしい所謂法律語を用ひることだ。そして、訓で讀んだらよささうな所を音で讀む。譲渡といへばよいのに譲渡といひ、立木と讀まずに立木といふ。音でいふと素人にわからぬといふ笑話をあげる。

「伊勢屋の親方が眼病とかでござる。」と聞いて臺所まで行き、「承れば、旦那様が御眼病ぢやげにござりますが、如何でござります。」と言へば、奥より旦那が紅のきれにて目を押へて出られ、「おゝ助七か、よう來やつた。」「へい、御眼病の御見舞にめいりやした。やあ旦那、あなたのお目はどうなされやした。」

法律家は好んで分類をする。ところで、次の話を讀むと、我々法律家もどうも往々かういふ分類をする様で、誠に汗顔の至で

ある。

父子して天神樣へ參詣なしけるに、息子親父にむかひ「この門の兩脇にある矢大臣・左大臣といふは、何方が矢大臣で何方が左大臣だ。」と聞くに、親父眞面目になり、「よく覺えて置け。それ矢大臣でない方が左大臣で、左大臣でない方が矢大臣だ。」

氣長に、併し骨折つて法律の研究を進めて行きたいと思ふが、その際常に人類共同生活圓滿の爲といふ法律の根本目的を忘れたくない。法規の一部分に熱中して全局の大目的を忘れるのが、從來の法律學の陷り易かつた誤であつて、我々法律家は次の話の目的忘却の馬鹿馬鹿しさを笑ふ資格がないかも知れぬ。

貸店の札を子どもが惡戯にはがす。度々に及べば、大屋どの案じを附けて、厚板に「貸店」と書いて釘にて丈夫に打附け、「是なら二三年はこらへる。」（有閑法學）

土田杏村
名は茂。評論家。昭和九年歿、年四十四

一四　不安の救濟

土田杏村

不幸を前にするものは、どうかしてその不幸を避けようと工夫するであらうし、既に不幸に遭遇したものは、その不幸の程度に應じ、彼の力をあげてこの不幸を救濟しようと計るであらう。併し、まさに來らうとする不幸は、容易に避けられないし、また既にその中に捕へられた不幸からは、容易に救濟せられない。一つの不幸が起るためには、人生に於ける雜多の事項がそれに結び合つてゐるから、そのすべての結びつきを解きほぐさなければ、不幸はこれを避けたり救濟したりすることは出來ないものである。我々が不幸を怖れるのは、專らこの救濟の困難のためだ。もしもその救濟が容易のものであるならば、我々はよしその不幸の中に陷つたとしても、やがてそれより救濟せられ、隨つ

て不幸は我々をさほど長く且大きくは苦しめないであらう。この不幸に長く堪へ、それを救濟するために甚だ大いなる努力をしなければならないことを考へればこそ、人はその不幸の來る豫感におびえ、不安焦躁の生活を送るのである。

併し、不幸の救濟について、人は次のやうに考へなければならない。それは、不幸を救濟するものは、その不幸を蒙つた部分の生活自身だけではないといふことである。我々は身體の何れかの部分に外傷を被つた。それはこの外傷を受けた部分の大いなる不幸であつた。しかし、他の部分がその外傷を癒すことの上に働きかけてゐることを忘れてはならない。そして、よしこの外傷を受けた部分の細胞の生活力は微弱であるとしても、他の部分の生活力が旺盛であるならば、外傷はかなりに早く癒えるであらう。我々は不幸を受けた場合、たゞその部分の生活

が努力してこの不幸を救濟しなければならぬものだと考へるとすれば、不幸は餘りにも怖しく、且これを救濟する努力に堪へ難い。併し、世界と生活とのすべての部分が、その不幸に受難し、それの救濟にあたつてゐるのであるから、我々は、それが必ず救濟せられるものであり、全く救濟せられない不幸は、この人生には存在しないものだといふ、斷乎たる確信を以てそれにあたらなければならない。

見よ、我々は現にかく生存してゐて過去の生活を回想するに、その途上に遭遇した多くの不幸は殘りなく救濟せられ、とにかく現在の我々の生活をこれだけ幸福のものにしてゐるではないか。そして、かつては我々があれほど深刻に苦しめられ、泣かせられた過去のその大いなる不幸でさへも、今では美しい追憶となり、我々の生活を鍛へ、人生を見る我々の目を豐かなものに

するに、與つて力ある原因となつてゐるではないか。全く救濟し難いものが不幸であるならば、我々は極力不幸を避けなければなるまいが、不幸は必ずこれを救濟することが出來、且我々が一度不幸を救濟する毎に、その生活を豐かならしめ鍛錬するものであるとすれば、我々は不幸を必ずしも全然的に回避すべきものでない。そして、不幸は却つて我々の生活を深刻ならしめ、我々の生命に彈力を與へる所以のものだとして、我々はむしろ不幸のある人生に感謝しなければなるまい。部分的抽象的に見るが故に、それは生活の不幸であるが、全體的具體的に見れば、不幸は必ず救濟せられるものであつて、人生にはその前途に絶對の憂慮を置かなければならないといふ何ものもない。徒らに明日のことを以て煩はされてはならない。今日は今日のことを考へて、今日の生活を實感し、今日の生き甲斐を感じなけれ

ばならない。花は笑ひ、鳥は鳴いてゐる。我々は何をか憂慮し、何をか畏怖しよう。世界のすべてのものが、私と力を合はせて、私の未來の不幸を救濟し、必ず私の生活を安からしめるのだ。

我々の人生に於けるまことの不幸の苦惱は、實際に遭遇した不幸の苦しみではなく、その不幸を豫感してゐる間に我々の經驗する不安の苦しみである。また、實際に不幸に遭遇してゐる時でさへも、その不幸に堪へ忍んでゐる苦しみよりも、なほ長くその不幸に堪へ忍ばなければならないと豫想する失望と不安との苦しみは、なほそれよりも大いなるものであらう。人は多くの不幸に遭遇して、幾度となくこれを救濟して進めば、次第に鞏固にこのことの確信を得よう。隨つて、人は生活の幸福を得るために、不幸を避けることに努力するよりは、寧ろ不幸を豫感してゐる不安をなくし、生活を安らかな、慰めのあるものにする

ことの工夫を積まなければなるまい。

不幸は必ず救濟せられるものだ。我々はその確信によつて、人生の不安を解消して行かなければならない。たゞ不安に充たされ、徒らに畏怖焦躁の生活をなすならば、我々の生活の具體性は失はれ、萎靡頓挫したものになつて、その將來の生活を愈萎縮せしめ、不幸を招く機會を多からしめる。これに反して、不安を一掃し、たゞ在りの儘に安んじ慰められながら生きるならば、我々の生活の環境は損はれず、生命は具體的の活動をなして、我我の生活の凡ゆる部分は絶對的に實在するものの實感によつて充たされるが故に、おのづから多くの不幸が避けられ、生活は幸福に充ちたものになるであらう。慰めを持つものの生活は凝滯せず、また凝滯せぬ生活は慰めを與へる。（土田杏村全集）

綱島梁川
名は榮一郎
倫理學者　明治四十年歿、年三十五

神、光あれと
舊約聖書創世記第一章第三節

天何をか言ふ、子曰、天何言ふ哉　四時行はれ百物生ず　天何言ふ哉（論語）

吾が父は
新譯全書ヨハネ傳第五章第十七節にあるキリストの言葉

一五　勞働と人生

綱島梁川

「神、光あれと言ひ給ひければ、卽ち光ありき。」天地森然、之を貫ぬくものたゞ一箇の働なり。宇宙の開闢史は、此の偉大なる働を以て、其の開卷第一の頁を飾られたり。働は天地の歷史の始にして終なり。古聖は言ひき、「天何をか言ふ、四時行はれ百物生ず。」と。又言ひき、「吾が父は今に至るまで働き給ふ。」と。吾人が天地に對して、虛心先づ觀じ來るは、其の一息不斷の氣化流行なり、卽ち働なり。萬物は働によりて常に富み、常に完く、常に充ち滿つるなり。働ある、卽ち萬有の「在り」と謂はるる所以なり。神は卽ち働なり、働は卽ち神なり。かの寂靜涅槃といふも、働の極、活動の極、充實の極にはあらざるか。

天地の實相を働と觀じ、活動と觀じて、便ち人則の極は立ち、道

天行の云々
天行健、君子以自彊不息
（易乾卦）

義の門は啓かるべし。かるが故に、「易」の作者は天行の健動に君子自彊の範を置き、「猶太の神人は「天の父は今に至るまで働き給ふ、われも亦働くなり。」と喝破せり。身を田塍の間に起したるわが二宮尊徳が、一挺の鍬を以て幾多の廢田を興し、窮村を濟へる祕訣は、心を密にして天地健動の不息の流行に乘託したるが故なりと謂ふにあらずや。

働くは現在を働くなり、今の一念を働くなり。今の一念を働かざる働といふものあることなし。働とは現在を充たすことにあらずや。過去は追ふべからず、未來は雲霧に墜つ。眞に吾人に對して在りと謂ひ得べきは、唯現在のみ。過去を想ひ未來を測ることも、亦これ現在の働なり。現在を充たす働の中より光輝ある理想も湧き、偉大なる希望も華さくなり。爾の現在を

貧賤に素して
君子素二其位ニ一而行、不レ願二乎其外一
素二富貴ニ一行二乎富貴一
素二貧賤ニ一行二乎貧賤一
素二夷狄ニ一行二乎夷狄一
素二患難ニ一行二乎患難一
君子無二入而不ニ自得一焉
（中庸）

カーライル
（1795—1881）
イギリスの思想家・文學者

充たせ、現在は爾が全宇宙なり、否、爾自身なり。眞に働くものは最も切實に現在に立ち、現在を充たさんことを希ふ。彼は當面の一事一念に全心魂を打込んで、復其の他を顧みざるなり。彼にとりては、現在が唯一の事實なり。彼は貧賤に素して貧賤を行ひ、富貴に素して富貴を行ひ、病痾に素して病痾を行ひ、健康に素して健康を行ふ。彼に於ては、健康・病痾・富貴・貧賤等は必ずしも關心の事ならず。唯、是等樣々なる現在の事件・境遇に處して、自家が全人格の一念を充實せしむること、これ其の唯一の願なり。自己現在の一念を充實せしむる、これを外にして、また働といふものの眞正合理の形式的解釋はあらざるなり。カーライルが、其の謂ふ所の「最も手近き義務」に重大なる意義を附したる、やがておのづから吾人の意と相參するものにあらずや。

若し勞働の義をかくの如く解せんか、こゝに忽ち二箇の心靈

上の貴き賜は與へらるるなり。第一、吾人は一生の間、如何なる位置・境遇をも通じて一貫の平安を得べし。第二、如何に異なる位置・境遇の人をも通じて、萬人皆平等なる尊嚴の自覺を得べし。吾、昨は貧しくして病み、今日は富みて而して健かなり。されど、現在の一念を充たせる「働」の人として、吾は昨も今も同じ平安の態度を持續し來れるにあらずや。彼は天下の廣居に立ち、吾は草茅無聞の人たり。されど、現在の一念を充たせる「働」の人として、彼我駢び立つ同じ尊嚴の自覺を有し得るならずや。蕾は蕾の現在の一念を充たし、花は花の現在の一念を充たせり。蕾は蕾の一念に住して開花の想を作さず、花は花の一念に住して結實の想を作さず、其の現在の一念を充たす働に於ては、彼此相軒輊すべきいはれあらず。思ふに、眞に勞働に忠なるものはかくならざるを得ざるなり。彼も此も、同じくこれ天地の働といふ

事實なり。

勞働は神聖なり、人をして自己の手腕に立つて獨立の生活を營ましむ。それ勞働せずして報酬を得んとするほど、世に奇怪にして不自然なる矛盾はなきが如く、勞働して而して報酬を得るほど、自然にして順正なる事相はあらざるなり。働なくして吾等に生存の理由はあらず。吾等は最後の一息まで、何等かの形に於て勞作せざるべからず。勞作せずして報酬を得んとする思想は人類の恥辱なり。そはやがて個人の墮落なり、國家の滅亡なり。吾等は「働かずんば食はず」といふ覺悟に立たざるべからず。この覺悟、この精神ほど、人をして剛毅・勇敢ならしむるものあらず。或は働いてなほ食を得ずといふものあらんか。思ふにかくの如きは未だ眞に働かざる者、即ち現在の一念を充實せしむる底の勞作を經驗せざるものの言草たるべし。「自然」

の組織は働くものに衣食を給せざるほど、しかく不自然に、貧寒に、慳吝ならず。如何なる種類の働にもあれ、働にはそれに伴なふ自然の報償あり。織るものは卷き、耕すものは穫る。あるは人に勞を藉して一定の工賃を得る、亦おのづからなる報酬の一種ならずや。

凡そ自家が正直なる額に汗し、清き良心もて獲得せる報酬は、皆以て天與の報酬と稱すべし。わが清き良心を以て獲たる天與の報酬、げに是こそは公明にして純淨、また一點俗世の薫染を帶びざるなり。此の正直なる勞作と、此の純潔なる報酬と、世にこれほど快美底のものあるべしとも思はれず。「中夜の音樂」とは、かゝる快美底の實驗を描きたる言葉なるべし。（綱島梁川集）

森鷗外
名は林太郎
文學博士・醫學博士　大正十一年歿、年六十一
己
「鎚一下」の主人公五條秀麿貴族の出なる洋行歸りの學者　著述家
新橋
東京市芝區新橋停車場　當時東海道線の起點

二六　鎚一下

森　鷗　外

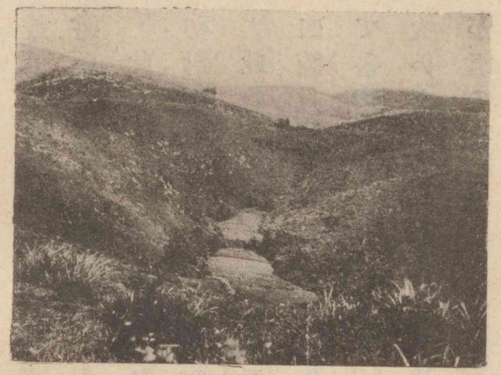
己は今日珍しい人を見送りに新橋へ往つたので、その記念を書いて置かうと思ふ。

此の人は己のためには未見の人であつた。己は今日新橋で初對面をして、その儘別れたのである。

此の人といふのは日君である。己が日君の名を聞いたのは、四箇月程前の事であつた。己は心安い牛込の男爵の家を訪ねて、書齋で話をしてゐた。すると、執事の老人が男爵に電話を取次いだ。それが日君の掛けた電話であつたか、それとも誰やらが君の事を傳へた電話であつたか、己には分らずにしまつたが、とにかく執事は日君の名を口にした。男爵は執事に何事か命じて置いて、己に日君の事を話した。

秋吉臺　山口縣美禰郡の村　大理石・石灰岩を產す

話はかうである。長門國に秋吉といふ處がある。そこから大理石が出る。併しその採掘は利益が少いので、企業家が手を着けても持續してゆくことが出來ない。Hは現にそれを採掘してゐる。そしてそれを採掘するのに、尋常の企業家のやうに勞働者を使つてゐるのではない。Hは多くの不遇の青年を諸方から集めて、基督教の精神を以て、同胞として彼等を待遇して、自分も一しよになつて勞働してゐる。ある年Aといふ人がその仲間にはいつた。Aは非常な癇癪持で、それがために官を失ひ獄に下つたことがある。その後どこにゐても折合が悪かつ



秋吉臺

たのを、Hがとうとう引受けた。二年程一しよにゐるうちに、Aは新しく仲間にはいつた青年と爭論をして、そしてHにその青年を放逐することを要求した。Hの細君が傍からAを諫めて、「こゝは世間の人が悪いといふ青年を入れる處だから、悪いからといつてこゝから出すことは出來ない。どうぞ人を責めずに己を責めて下さい。」と言つた。Aは持前の癇癪を起した。そしてHが默つて細君に詞を盡くさせたのを責めて、出刃庖丁で斬つて掛つた。庖丁はHにはあたらないで、Hの細君の腕にあたつた。その時細君は死を決して、讃美歌を誦した。Aは驚いて、夢の醒めたやうになつて、自殺しようとした。周圍のものがそれを止めた。それからはAもHの眞の同胞のやうになつて、現にある慈善事業に盡瘁してゐるといふのである。

己は男爵の話を聞いて、ひどく感動した。それには昔の獻身

者の物語に似た事を、現に生存し活動してゐる人の上として聞いた、好奇心の滿足も加つてゐるに相違ない。又その獻身者のやうな夫婦が大理石を掘つてゐるといふことが、一種の象徴のやうに己の感受性の上に作用したところもあるに相違ない。なんとかいふドイツの女の詩にこんな句があつた。

「われは鍛匠を羨む。鎚の一下を以て日々の業を始む。」

己は此の句を昔一度誦んで、今に忘れずにゐる。H君夫婦はその鎚の一下を以て日々の業を始めてゐるのである。基督教嫌ひのニイチェは、既に人に片頰を打たれて、更に今一方の頰をも打たせようとする道徳は、奴隷の道徳だと言つた。その奴隷の道徳を奉じてゐる人達が、鎚の一下を以て日々の業を始めてゐるのである。

併し、おもに己を感動させたのは、其の事ではなく其の人であ

ニイチェ（1844-1900）ドイツの哲學者

る。己の男爵に聞いた物語めいた事實は、譬へば絶えず流れてゐる水が偶石に遮られて沫を飛ばし、斷えず燃えてゐる火が偶風に煽られて焰を閃かしたに過ぎない。假に社會から虐待されつゝ育つてきた青年の一人と交る人があるとする。其の人の生活は決して平穏ではあるまい。さういふ青年が寄合つて出來た集團の中央に幾年の久しい間身を置いて、その一人一人に人間としての覺醒を與へようとしてゐるH君の生活は、實に驚くべきものではないか。己の感動したのは、H君の此の日常生活を思つたからである。

己はすぐにかういふ事を思ひ立つた。それは、己も著述家にならうと思つてゐてみれば、いつかこんな人の生活を書いてみたいといふのである。己は此の心持を男爵に話した。そして、間もなくHと手紙を取交す間柄になつた。多分男爵も己の名

を先方に傳へてくれた事であらう。

それから己はH君の上に就いてなるべく多くの事を知らうと努めた。己は今も猶それを努めてゐる。己は種々の事を問ひに遣つて、H君の回答を煩はした。H君の書いた物、話した事の筆記などを借りて讀んだ。H君は己に寫眞を贈つてくれた。

さて己が今日書齋で本を讀んでゐると、葉書が二枚屆いた。二枚とも署名者はH君で、一枚には「火急の用事があつて上京したから、暇を得次第會はう。」と書いてある。今一枚には「秋吉からの電報に接して、午後三時五十分に新橋を發する。遺憾ながら會はれない。」と書いてある。後の葉書は速達にして出したもので、丁度午前頃の葉書と同時に己の手に屆いたのである。

己は非常に嬉しかつた。讀みさした本を措いて邸を出て、發車時間の十五分前に新橋停車場に往つてゐた。

己はこれまでの通信の結果として、君が財産を作つてゐない事を推察してゐる。H君は十一年前に大理石を採掘し始めた。七年前に工場の大擴張をする機會があつたのに、H君はそれが爲に秋吉が淫靡な土地になることを恐れて、わざとその機會を逸してゐる。六年前にH君は一旦破産して、五年前に漸くその負債を償却してゐる。四年前に外國へ積出した石が碎けて、H君は再び破産し、工場を人手に渡して、又やうやうそれを取返してゐる。さうしてみると、H君は財産を作つてゐる筈がないのである。併し、己は考へた。H君はとにかく全國の官業・民業の大會社と取引をして、外國へも石材を輸出してゐる大工場の主人であるから、たとひ苦痛を忍んでも體面を取繕つて、一等客として旅行しはしまいか。いやいや、H君の人物を思へば、どうもさうでないかも知れない。平氣で三等客として旅行するかも

知れない。己はかう思つて先づ三等の待合室を物色した。H君はゐない。それから一二等の待合室に往つてみた。そこにもゐない。

ふとプラットフォームの方を見ると、もう三時五十分發の汽車に人を乘せてゐる。己は急いで埒の外へ出た。急行列車の長い連鎖が、石疊の左側を殆ど全く占領してゐて、そこにもこゝにも見送りの人が群をなしてゐる。勳章を佩びた將校の群に送られる人もある。社會の上層に位する紳士・淑女の群に送られる人もある。學校生徒らしい青年の群に送られる人もある。己は一つ一つ客車の窓を覗いて見ながら、H君らしい人を探した。寫眞をもらつてゐるので、風采を想像することが出來たのである。

食堂車の繋いである邊の窓の前に、看護婦らしい女子の大勢

に見送られてゐる人がある。己は若しやと思つて其の窓を覗いた。それは救世軍の帽を被つた人であつた。

己は遂にあらゆる群を背にして進んで、もう前には機關車に接續した三等車が二箱ばかりしか無くなつた。此の邊は石疊の上が殆ど空虛になつてゐる。己はそこに僅かに徘徊してゐる二三の人を仔細に見た。

一番目立つたのは、ずつと前の機關車の側に、白髮白髯の老人が羽織・袴に紺足袋・日和下駄といふ老書生じみた風をして屹立してゐるのであつた。これは名高いM君で、草鞋掛で全國の產業を見て廻る人である。

それから少し離れて手前の方に、背廣を着て折鞄を脇挾んだ人が、身なりの質素な圓髷の婦人と話してゐる。その背廣の人が寫眞のH君らしい。

己は側へ歩み寄つた。「H君ではありませんか。」H君は己を誰とも判斷しかねた樣子で、暫く顏を見てゐた。己は自分の名を言つた。

H君は己の逢ひに來たのを丁寧に謝した後、圓髷の婦人を顧みて己に言つた。「濱夫人です。」その婦人が己に會釋した。己はH君に言つた。

「大そう急な用事で御上京になつたのださうですね。」

「えゝ。一人の青年の事で。」

「片附きましたか。」

「此の汽車に乘せて一しよに連れて歸るのです。」

話はこゝに盡きた。

暫くしてH君は己に問うた。「M君を御存じですか。」

「えゝ。」と己は答へた。これはM君がどんな人だといふことを

知つてゐるといふ意味であつて、交際があるといふ意味ではなかつた。後に氣が附いてみれば、H君は己をM君に紹介してくれようと思つたのだから、己は肯定するより否定した方が好かつたのである。

H君は濱夫人をM君に紹介した。己はM君に自分の名を言つた。M君は己に、「秋吉に往つて御覽でしたか。」と問うた。「まだ往きません。併し、いつか往つてみたいものです。」

己の背後にはやはりH君を送りに來た人がいま一人ゐた。背の低い、白頭の老人である。H君はそれを己に紹介した。丁度己が其の人に挨拶してゐると、埒の方から日傘を持つた婆さんが一人駈けて來て、發車前に間に合つたのを喜ぶらしく、H君の耳のそばで何事かを囁いた。H君を送るものは、濱夫人、M君、背の低い老人、日傘を持つたお婆さん、それに己、合はせて五人で

ある。

發車の信號が響いた。H君は凝立して何か深く考へてゐるらしく、車に乘らうともしない。「H君、早く乘り給へ。」と、己が催促した。H君が乘つた時には、車はもう徐かに動き出してゐた。

M君が先づ此の場を立去つた。濱夫人は汽車の出て行く方に向いて立つて首を垂れてゐる。祈禱をしてゐるのではあるまいかと思つて、己は暫く猶豫してゐたが、餘り久しくなるので、暇乞をして歸つた。

己が新橋の停車場で送つた人の數は多い。併し、今日H君に會つて、すぐにそれを送つたやうに、己のために意義のある出來事として記憶すべき場合は、これまで少かつたのである。

H君の生活を書かうと思ひ立つた己の望は何時遂げられる

か分らない。事によつたら、昔ギョオテがグレエトヘン悲壯劇の筋を話すのを聞いて、それを先に書いた人があるやうに、此の記事を見て、先にH君の事を書く人が出て來るかも知れない。若し今日文壇で老耄者を以て遇せられてゐる己よりも、それを先に書く人が巧かつたら、ギョオテの先例とは反對に、己は安んじて、初め書かうと思つた事を終に書かずにしまふかも知れない。（鷗外全集）

ギョオテ（1749—1832）ドイツの詩人

グレエトヘン悲壯劇ギョオテの傑作「ファウスト」の骨子をなすもの

正倉院　　森鷗外

勅封の笋（たかんな）の皮切りほどく剪刀（はさみ）の音の寒きあかつき

國木田獨歩
名は哲夫、文學者、明治四十一年歿、年三十八

空知川
石狩川の支流

九月二十六日
明治二十八年
作者二十五歳の時

一七　空知川の岸邊

國木田獨歩

宿の子のまめまめしきが先に立つて、明くれば九月二十六日朝の九時、愈空知川の岸へと出發した。

陰晴定めなき天氣、薄き日影が洩れるかと思ふと、忽ち峯から林から霧が起つてあたりを包んでしまふ。山路は思つたよりも樂で、余は宿の子とさまざまの物語をしながら、身も心も輕く歩いた。

林は全く黃ばみ、蔦紅葉は眞紅に染まり、霧が起る時は霞を隔てて花を見るが如く、日光の直射する時は露を帶びた葉每に幾千萬の眞珠・碧玉を連ねて、全山が燃えるかと思はれた。宿の子は空知川沿岸の熊の話を爲し、續いて彼が子供心に聞集めた熊物語の幾種かを熱心に語つた。坂を下りて熊笹の繁つた所に

歌志内
石狩炭田中の有名なる炭山

來ると、彼は一寸立どまり、

「聞えるだらう、川の音が。」と耳を傾けた。「そら……聞えるだらう。あれが空知川。もう直ぐ其處だ。」

「見えさうなものだ。」

「どうして見えるものか、森の中に流れてゐるのだ。」

二人は頭を沒する熊笹の間を纔かに通ふ帶ほどの徑を暫く行くと、一人の百姓らしき老人に出遇つたので、余は道廳の出張員が居る小屋を訊ねたら、

「此の徑を三町ばかり行くと幅の廣い新開の道路に出る。その右側の最初に見えるのが居なさる小屋だ。」

と言捨てて老人は去つて了つた。

歌志内を立つてから此處までの間に、人に出遇つたのはこの老人ばかりで、途中又小屋らしい物を見なかつたのである。余

はこの老人を見て、空知川の沿岸に既にいくらかの開墾者が入込んでゐることを、事實の上に知つた。

熊笹の徑を通りぬけると、果して思ひがけない大道が、深林を穿つて一直線に作られてゐる。その幅は五間以上もあらうか。しかも、兩側に密茂してゐる林には、二丈を越え三丈に達する大木が多いのだ。この幅廣き大道も、掘割を通ずる鐵道線路のやうであつた。しかし、余はこの道路を見て、拓殖に熱心な道廳の經營が如何に困難が多いかを知つたのである。

見ればこの道路の右側に、內地では見ることの出來ない異樣な掘立小屋がある。小屋の左右及び背後は、林を倒して二三段歩の平地が開かれてゐる。余は首尾よくこの小屋で、道廳の屬官井田及び他の一人に會ふことが出來た。

植民課長の懇切な紹介は、彼等をして親切な余の相談相手たらしめたのである。更に驚くべきは、彼等が余の名を聞いて、既に余を知つてゐたことで、余の蕪雜なる文章も、何時しか北海道の思ひもかけぬ地に、その讀者を得てゐたのであつた。

二人は余の目的を聞終つた後、空知川沿岸の地圖を披き、その經驗多き鑑識を以て、彼處此處と、移民者のために區劃せる一區一萬五千坪の地の中から、六箇所ほどを選定してくれた。

小屋は三間に四間を出でず、屋根も周圍の壁も大木の皮を幅廣く剝いで組合はせたもので、板を用ひてあるのは床だけ。床には莚を敷き、出入口にはこれまた樹皮を組んで戸にしたのが一枚立ててあるばかり。これが開墾者の巢であり、家であり、否、城郭である。一隅に長方形の大きな爐が切つてあつて、これを火鉢に、竈に、煙草盆に、冬ならば煖爐にも使用するのである。

「冬になつたら堪らんでせうね。こんな小屋に居ては。」

札幌
石狩國にあり
北海道廳のある所

「だつて開墾者は皆こんな小屋に住んでゐるのですよ。どうです辛抱が出來ますか。」と井田は笑ひながら言つた。

「覺悟はしてゐますが、いざとなつたら隨分困るでせう。」

「しかし、思つた程でもないものです。若し冬になつてどうしても辛抱が出來さうもなかつたら、あなた方のことだから、札幌へ逃げて來ればいゝですよ。どうせ冬籠りは何處でしても同じことだから。」

「はつはつ……それなら初めから小作人任せにして御自分は札幌に居る方がよからう。」

と他の屬官が言つた。

「さうですとも、さうですとも。冬になつて札幌に逃げて行くほどなら、いつそ初めから東京に居て開墾した方がいゝんです。なあに僕は辛抱しますよ。」と余は覺悟を見せた。井田は、

「さうですな、先づ雪でも降つて來たら、この爐にどんどん焚火をするんですな。薪ならお手のものだから。それであなた方だから、うんと書物を仕込んで置いて勉強なさるんですな。」

「雪が解ける時分には大學者になつて現れるといふ趣向ですか。」と余は思はず笑つた。

話してゐると、突然ばらばらと音がして來たので、余は外に出て見た。日は薄く光り、雲は靜かに流れ、寂たる深林を越えて時雨が過ぎゆくのであつた。

余は宿の子を殘して、一人この邊を散歩すべく小屋を出た。げに怪しき道路よ。これ千年の深林を滅ぼし、人力を以て自然に打克たんがために、殊更に無人の境を選んで作られたのである。見渡す限り、兩側の森林がこれを覆ふのみで、一個の人影すらなく、一縷の輕煙すら起らず、一の人語すら聞えず、寂々寥々

として横たはつてゐる。

余は時雨の音の淋しさを知つてゐる。然し、未だ曾て、原始の大深林を忍びやかに過ぎゆく時雨ほど淋しさを感じたことはない。これ實に自然の幽寂なる私語である。深林の底に居て此の音を聞く者、何人か生物を冷笑する自然の無限の威力を感ぜざらん。怒濤・暴風・疾雷・閃電は自然の虚喝である。彼の威力の最も人に迫るのは、彼の最も靜かなる時である。高遠なる蒼天の、何の聲もなくたゞ默して下界を視下す時、曾て人跡を許さざりし深林の奥深き處、一片の木の葉の朽ちて風なきに落つる時、自然は欠呻して曰く、「あゝ我が一日も暮れんとす。」と。而して人間の一千年はこの刹那に飛びゆくのである。

余は兩側の林を覘きつゝ行くと、左側に林のやゝ薄くなつてゐる處を見出した。下草を分けて進み、ふと顧みると、この身は

何時しか深林の底に居たのである。とある大木の朽ちて倒れたのに腰をかけた。

林が暗くなつたかと思ふと、高い枝の上に時雨がさらさらと降つて來た。來たかと思ふと間もなく止んで、森として林は靜まりかへつた。

余は暫くじつとして、林の奥の暗くなつてゐる處を見てゐた。

社會が何處にある。人間の誇り顔に傳唱する「歴史」が何處にある。この場所に於て、この時に於て、人はたゞ「生存」そのものの、自然の一呼吸の中に託されてゐることを感ずるばかりである。露國の詩人は曾て深林の中に坐して、死の影の我に迫るのを覺えたと言つたが、實にさうである。また曰く、「人類の最後の一人がこの地球上より消滅する時、木の葉の一片もその爲にそよがざるなり。」と。

死の如く靜かなる、冷やかなる、暗き、深き深林の中に坐して、この如き威迫を受けないものは誰も無からう。我を忘れて恐しい空想に沈んでゐると、

「旦那！旦那！」と呼ぶ聲が森の外でした。急いで出て見ると宿の子が立つてゐる。

「最早御用が濟んだら歸りませう。」

そこで二人は一先づ小屋に歸つた。井田は、

「どうです、今夜は試驗のために一晩此處に泊つて御覽になつては。」と言ふ。

余は遂に再び北海道の地を踏まないで今日に到つた。たとひ一家の事情は余の開墾の目的を中止せしめたにせよ、余は今もなほ空知川の沿岸を思ふと、あの冷嚴なる自然が、余を惹きつけるやうに感ずる。（獨歩全集）

宮城道雄
箏曲生田流の名手　東京音樂學校教授
明治二十七年生

一八　音の世界

宮城道雄

私が光の世界から斷たれたのは、私の七歳の頃からで、九歳頃までではほんの少しではあるが目が見えてゐた。箏の稽古を始めた時は、手でさぐりながらも、絃を見て彈いてゐたやうに、私は記憶してゐる。

光を失つた私の前に、複雜極まりない音の世界が展開されて來てから、色に觸れぬ淋しさは、十分償はれるやうになつて來た。そして、これが私の住む世界だと思つてゐるので、光の世界を懷かしいと思ふこともあつたけれども、今ではもう慣れてしまつて、何とも思はなくなつた。

私は目で見る力を失つたかはりに、耳できくことが、殊更鋭敏になつたのであらう。音についてはいろいろと深く考へるこ

とが多い。それで、音について私の感じてゐることを話して見たいと思ふのである。

音には白い音、黑い音、赤い音、黃色い音といふやうに、いろいろな音が感じられる。白い音をきくと、單純さや聖人や僧侶などを思ひ浮かべるし、黑い音をきくと、暗黑や惡人などを想像するのである。このやうに、一つ一つの音には、やはり性格や色彩があるのだと、私は思つてゐる。

私は作曲する時には、メロディーに重きをおいてゐるが、ハーモニーに關しては、この音の色といふことを考へて、效果をあげるやうに心がけてゐるのである。湖を現さうと思ふ時には、私はメロディーとそのハーモニーとによつて、あの透き通るやうに碧い色を思ひ浮かべるやうな音をつくり出すことを考へて

ゐるのである。又秋の氣分を出すためには淋しいメロディーと共に、枯葉の散る秋の色を決して忘れない。

八卦見が手相・人相・骨相などを見て、人の性格や吉凶や運命を判斷するが、聲もその通りである。世界中に同じ人相がないのと同樣に、聲もまた人によつて皆違つてゐる。强弱・清濁・高低、ひからびた聲、潤ひのある聲、甘つたるい聲、粗野な聲など、千差萬別である。

その聲の調子によつて、その人の性質なり顏つきなりがわかるのである。殊に性格はよく聲に現れる。そして、その時の表情なども大かたは聲で想像出來るのである。肥つた人と瘠せた人の聲は非常に違ふし、頭の善し惡しも聲をきけば、大抵わかるやうである。又、同じ人でも、心に惱みがある場合は、どんなに

快活な聲を作つてゐても、すぐわかるものである。よく「お顏の色が惡いが、どうかなさいましたか。」と云ふが、私なら「お聲の色が惡いが、どうかなさいましたか。」と聞きたいところである。

またよくあることであるが、大勢人の集る會などで、誰それが來たとか、未だ見えないとか騷いでゐる場合に、遠くにその人の聲をきゝつけて、私は來てゐるなと思ふのである。そのうちに、他の人たちも漸く人混みの中にその人を見附けて來てゐることを知るのである。

子供などが稽古に來た時、行儀を惡くしてゐるのはすぐわかる。私が「ちやんと坐つて。」と云ふと、びつくりして坐り直す。

それで思ひ出したが、或夏の暑い日のことであつた。尺八の合奏に來た書生が、私にわからぬやうに、そうつと着物を脱いで吹かうとした。その時私が、「裸で涼しいでせうな。」と云つたら、そ

呂昇
豐竹呂昇　女
義大夫の名手
昭和五年歿、
年五十七

の書生は驚いて着物を着たことがあつた。

人にあつて話をする時も、相手の人の近くに寄つてゐれば、その人の態度や物腰も手にとるやうにわかる。その人が話の最中に、ふと外の事を考へたり、目を外らせたりすれば、直ぐ聲の調子に變化が來るので、私にはそれがわかるのである。

いつであつたか、呂昇を聞いたことがあるが、女が箪笥の中から着物を出しながらものを言ふくだりで、呂昇の顏は明かに聽衆の方へ向いてゐるに違ひないのであるが、その聲色や語り口が、如何にも、その女が後ろ向きになつて、箪笥をあけたてしながら、ものを言ふやうにきこえたので、私はひどく感心したことがある。

私の住んでゐるところは、省線までよほど離れてゐるけれど

も、雨が降る前とか、天氣の惡い時などには、戸外の物音がはつきりきこえて來る。遠くを走つてゐる省線電車の音がきこえる時は、雨だなと思ふのである。

それぱかりではなく、三味線の絃や、箏の絃でもわかる。絃がしめつて來るし、それに音も冴えなくなる。今日は天氣がよいが、二三日のうちには雨になるといふことも、大抵豫想が出來る。

朝の氣持、晝の氣持、夜の氣持は、目に見えなくとも、色々の物音や周圍の空氣で、私にはそれと感じられるのである。

自然の音は、自分が音樂をやつてゐるだけに、最も親しいものである。同じ風でも松風の音、木枯の音、又、撫でるやうな柳の風、さらさらと音のする笹の葉など、一つ一つに趣のあるものである。

私は雨の音が好きである。取りわけ春の雨はよいもので、軒

から落ちる雨だれの音などきいてゐると、身も心も引入れられてしまふやうな感じがする。

海の遠く鳴る音、瀧の音、小川の流、谷川のせゝらぎ、水車の靜かに軋る音などは何れも趣のあるものである。

私は又小鳥が好きで、都の中に住んでゐると、自然の森や林で自由に囀る鳥の音をきかれぬことは淋しい。私は作曲に感興が湧いて、自然の音にひたりたいと思ふ時などは、居ても立つてもゐられない程、懷かしい思がする。

自然の音は全く、どれもこれも音樂でないものはない。月並な詩や音樂に現すよりも、じつとそれに耳をかたむける方が、ど

春雨

れだけ勝れた感興を覺えるか知れない。私たちがどんなに努力しても、あの一つにも勝れたものは出來ないであらう。

私に恐しい音は、何といつても雷の音である。これ位恐しいものはない。遠くで鳴り始めると、もう不安な感じになる。ひどいのが鳴り出すと、非常に氣持が惡くなつて、何も手につかない。そんな時には却つて側に誰もゐてくれない方がよいのである。あの威壓的な強い音がだんだん襲つて來る時は、どうなることかと思ふ。命が惜しいといふことでなしに、兎に角私はあの音が嫌ひなのである。

雷の次に恐しいのは、電車の交叉點の響である。私は交叉點に立つことは命がけの仕事である。四方八方からうなりを立てて走つて來る電車、警笛を鳴らしながら、走つて來る自動車、そ

の外、貨物自動車やオートバイなどが、皆私を目がけて突進して來るやうに思はれて、誰に手をひかれてゐても、不安な氣がして、思はず身を避けるやうな姿勢になる。

私は夜寢られぬ性で、作曲も多くは夜中、人が靜まつてからする。徹夜を續けることも珍しいことではないので、私には夜の物音は特に親しみが多いわけである。殊に私は雨の夜が好きで、雨の夜は作曲もおちついてよく出來るやうに思ふ。

夜になると、あたりが靜かになるにつれて、晝間聞えなかつた物音がはつきりと聞えて來る。小さな蟲の翅ずりする微かな音、戸棚の奥で鼠のごとごとと物を引く音、臺所の水桶に水道の水が滴る音、又、遠くに聞える汽笛などは、一層夜の靜けさを思はせるものである。「どうせ見えないのだから、夜も晝も同じことで、怖くはないであらう。」と聞く人もあるけれど、私にもやはり怖

いのである。

身に迫つて來る夜の氣は、皮膚に觸れた感じでわかる。そんな時、よく樂器が空鳴りをするのをきくことがあるが、實に無氣味なものである。夜更けて作曲をしてゐる際に、色々の樂器の調子を整へて身のまはりに立掛けて、その中に一人で坐つてゐると、丁度自分が今思ひ浮かべてゐる音調にぴつたりと合つた音のする時がある。

それは、羽蟲などが絃にさはつたり、空氣の乾濕などの具合から、絃に緩みが出來たりしたために鳴るのであると思ふが、兎に角思はず身を竦めることがある。又、この澤山の樂器が一時に鳴り出したらどうであらうと考へたりして、ぞつとすることもある。そんな時には、思はず部屋から逃出したいやうにさへなるのである。

よく盲人が一人で歩くのを不思議に思ふ人があるが、傍で見る程不自由なものでなく、慣れると案外平氣なものである。

廣い道や狹い道、曲り角、四辻、又、小さな建物や大きな建物など、空氣の壓力や風の吹き具合によつてわかるものである。角から何軒目は洋食屋で、次が蓄音機屋、その次が風呂屋といつたやうに、自分の歩く道はちやんとわかる。

私はよく手をひかれながら、道を教へて行くことがある。自動車の運轉手にもよく教へてやるのである。一遍覺えておいたら、却つて目明きの人よりも確である。殊に家の近くになると、何となく自分の家に近づいたことを感じる。近所の子供の聲や犬の聲がしてゐると、親しみのあるせゐか一層よくわかるのである。

その他、旅行をしても、汽車の進行するにつれて變る景色も私は想像することが出來る。富士山が見えるといはれると、自分の目の前に富士山の姿を思ひ浮かべるのである。私が一番樂しみなのは、汽車が停車する度に、入れかはり立ちかはりするお客のお國言葉をきくことである。

文明の音が段々ふえて來ることも樂しいものである。近頃はラヂオが盛になつて來てゐるので、我々盲人にとつては、眞に都合がよい。晴れた日に、飛行機がプロペラの音勇ましく空を飛んでゐるのは、何ともいへぬのんびりとした感じがするものである。

かうしたやうに、いちいち耳をかたむけて味はつて行けば、音についての感興はなかなか盡きるものではない。（騷音）

伊藤左千夫
本名幸次郎
歌人　大正二年歿、年五十

良寛
俗名山本繁藏
禪僧　歌人
又書を能くす
天保二年（一八四九）寂、年七十五

一九　良寛禪師の歌

伊藤左千夫

明治十二年三月刊行の、僧良寛歌集でふ小册子に依つて、禪師の歌を見るを得たり。良寛禪師は越後の人、其の性行の高潔なるとその書の靈筆なるとを以て、夙に世に聞えたる人なり。禪師又歌を好み、隨時に作詠を試みられたるもの、或は失し、或は存し、僅かに其の歌集一本を止めしのみ。禪師固より歌人を以て居らず、只自ら好めるまゝに、隨所隨時の懷をやれるに過ぎざるものの如し。しかも、其の僅かに存せるものについて見るも、江戸時代幾百人の專門歌人等が至らんとして至り得ざりし所に至れるの佳什たり。

山ささに　あられたばしる　おとはさらさら
さらりさらり　さらさらとせし　こころこそよけれ

良寛禪師は其の人卽ち總べて詩なり。其の心卽ち詩なり、其の詞卽ち詩なり。されば、目に見えたる物におのづから動ける心を、口に出で來るまゝの詞にて直ちに歌とせり。詩の心動きて、詩の調、影の物に從ふ如く出で來れるもの、卽ち此の歌なり。

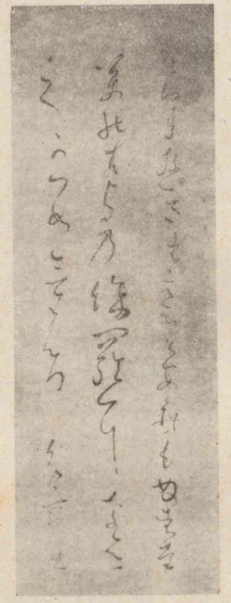
こは心の響をさながらにひゞかしめしものにして、一首の構成上に些かも作爲の跡を見ず。作者其の人の心は、何等の障りにも逢はず、何等の隔てにも逢はずして、如實に流露せるが故に、一首の意義にも詞にも、何等の澁滯を見ず。美と眞との一致せる歌ありとせば、此の歌の如き卽ちそれなるべし。

このゆふべ秋は來ぬらし我が宿の草のまがきに蟲ぞ鳴くなる

わがまちし秋は來にけりたかさごの尾のへにとよむ日ぐらしの聲

良寛筆蹟
つきゆきはい
つあれともぬ
はたまのこよ
ひのようにな
をしかすける
良寛

良寛の生活は所謂雲水の生活なり。一切浮世の榮華を顧みず、生を人界に受くと雖も、身は天地の囘轉に委して些かの執着なし。淡々たること水の如き生活、時に詞章の感懷を催し來るもの、卽ち歌となれるなりけり。禪師の生活と禪師の心事とありて始めて此の如き詞章を得べし。想は平凡なり、材料は陳腐なり。しかも、詞章の平凡ならず、陳腐ならざる所以のものは、作者の生活卽ち歌なるが故のみ。世を捨て、家を捨て、纔かに體軀を存する禪師にも、猶秋を待ち秋を悅ぶの情懷は殘れり。歌の淡然たるは淡然たるべき理由あるなり。



良寛筆蹟

以上の二首、一見甚だ模し易く見えて、しかも遂に模し得べか

らざるものあるは、作者の生活やがて歌の生命なるが故なり。此の如き歌を、只無造作なる歌、淺薄なる歌と思ふが如くば、到底共に詩を語るに足らざるを知るべし。

あはれさはいつはあれども葛の葉の裏吹きかへす秋

の初風

例に依つて詞は平凡、材料は陳腐、然も一片の清淡、目に禪師の精神を見る思あらしむ。超然として時俗を脱し、毫末の塵氣を心に留めざるの高風、おのづから詞句の上に溢れたり。作歌の上にも自己が平生の陋を隠し得ずして、詞句の上に、思想の上に、常に虚飾をこれ事とする俗歌人と到底是等の歌を談ずべからず。

風は涼し月はさやけしいざともに踊りあかさむ老のなごりに

いざうたへわれ立ち舞はむぬば玉の今宵の月にいねらるべしや

弊衣菜食、一切人間の執念を絶ちたる禪師も、折にふれての詩的感興は決して淡如たりしもののみにあらざるを察すべし。前首「老のなごりに」と云ひ、後首「いねらるべしや」と云へる結句、最も力あり。此の力あり、以て感興の強きを見るべし。此の兩首の如き、例の如く趣向も着想も最も陳腐にして猶能く歌に生氣ある所以は、作者の強き感興が詞調の上に活躍せるが故なることを知らざるべからず。

秋の夜は長しといへどさす竹のきみと語ればおもほえなくに

月讀の光をまちてかへりませ山路は栗のいがの多きに

事實なるが故に、趣向も詞も自然なり。趣向も詞も自然なるが故に、作者當時の感興をさながら讀者に傳ふるを得るなり。山路には栗のいが多し、月の出づるを待ちて歸り給へと云ふ、何等の自然ぞや、眞實ぞや。

いまよりは古里人のおともあらじみねにも尾にもつもる白雪

白雪はいくへもつもれ諸越の牟漏の高峯をうつさむ

と思ふ

一は寂寥を抒し、一は興會を抒す。平易の中に新しきところあるは禪師の歌の常なり。全く世を捨てたる人にも猶人をなつかしむ心はあり。いままでは時折人も訪ひ來り、おのづから故郷人の便りも聞きたりしが、最早それも協ふまじ、如何にも雪深くなりぬとの意なり。「峯にも尾にも」の「にも」にも寂しき情緒

は動き、「つもる白雪」にも寂しき心宿る。寂しき意義を敍せずしてしかも寂しみを感ぜしむるは、一に調子の上に存す。「峯にも尾にも」の句は固より平凡なり。然も此の句が此の歌の中にありては決して平凡ならざるは何ぞや。これ此の句が此の歌にありて普通の意義以外に、一種の感覺をふくみゐるが故なり。そはいふまでもなく、この語句を裏附けゐる一首の調べに外ならず。歌の價値は一句一語が有する意義と一首に渡れる調子との關聯如何に依つてその歌の價値に大なる影響あることを知らざるべからず。歌を作らんとするものは必ず此の間の消息を會得し、無意味の語句に能く意味を附與し、更に其の語句の有する意味以外の働を起さしめ、其の語句を活し用ふるの工夫なかるべからず。

柴の戸の冬のゆふべのさびしさをうき世の人にいか

でかたらむ

これまた着想の面白味にあらず、趣向の面白味にあらず。「うき世の人に」などいへるは能く禪師の境遇を顯しをれども、とりたてて稱揚する程の事もあらず。只一首の調子が如何にもよく作者の情趣を顯し得て遺憾なきによるものなるを注意すべきなり。

去歳の春折りて見せつる梅の花いまはたむけとなり
にけるかも

人の子の遊ぶを見ればにはたづみ流るるなみだとど
めかねつも

子供を失へる親の心を詠める歌なり。禪師はおのれ以外に世に歌作る人のあることを心にとめざりしなり。おのれの歌が人の歌に類することあらんとも、又あらじとも、それらの事に

は一切頓着せずして歌を作れるに似たり。或は新し、ふるしなどいふ事だも念頭に置かざりしものの如し。故に、其の歌多くは平凡に類す。以上二首の如き、その尤なるものならん。然れども、禪師の歌は悉く自己の感興の產物なるが故に、平凡に精神あり、生氣あり。これ卽ち多くの歌人の作と其の選を異にせる所にして、形骸の他に類すると否との如きは考慮の外に置きし禪師の作意は、誠に其の根本を誤らざりしものなるを察せざるべからず。

われありとおもふ人こそはかなけれ夢のうき世にま
ぼろしの身を

禪師が平生の信仰を窺ふに足れり。所謂人生無常なる觀念に住し、一身を投じて佛陀に奉仕したるは禪師の生涯なり。由來悟道者の詠み傳へたる道歌、卽ち教理的の歌には、露骨なる理

窟にあらざれば、謎の如きもの多し。文學卽ち詩としての價値を認め得べきもの殆どあることなし。良寛歌集中此の類の歌を載すること僅かに九首、その多くは主觀的趣味と見るべき歌にして、しかも決して彼の道歌なるものの如く埒もなきものにあらず。

いにしへの人のふみけむふる道はあれにけるかもゆく人なしに

これ又九首中の一首なり。以上二首とも理性の產物に相違なきも、理義は明白簡短、少しもくどくどしからず。而して、調子の上に嗟嘆の響多く、一誦して直ちに作者其の人の嘆聲を聞くの感あり。是等の作が能く詩たり得る所以の茲に存するを思はざるべからず。

以上禪師の歌に就きては、猶言ひ盡くさざるの憾あり。然れ

ども前にも云へる如く、禪師の歌は、卽ち禪師その人なり。禪師以外の趣味を禪師に望むは、固より無理なり。禪師の淡泊・清高・自然なる長所は、一面に豪健熱烈・莊嚴等の趣味を缺けり。これ禪師の短とする所なりと雖も、作者と作品との關係を重んずる上よりすれば、禪師の作歌中、禪師の柄になき歌なりと思はるるものの一首もなきは、却りて禪師の高きことを實證するものと言はざるべからず。(左千夫全集)

里べには笛や太鼓の音すなりみやまはさはに松のおとしつ

草のいほに足さしのべて小山田の山田の蛙聞くがたのしさ

良寛

西行
歌僧　俗名佐藤義清　建久元年（一八五〇）寂、年七十三

三〇　短歌鈔

西　行

押なべて花の盛になりにけり山の端ごとにかゝるしらくも

青葉さへ見れば心のとまるかな散りにし花の名殘とおもへば

今日もまた松の風吹く岡へゆかむ昨日涼みし友にあふやと

くまもなき月の光にさそはれていく雲居までゆく心ぞも

山里は秋の末にぞ思ひ知るかなしかりけり木枯のかぜ

寂しさに堪へたる人のまたもあれな庵ならべん冬の山里

源　實　朝

代將軍　歌人
承久元年（一八七九）歿、年二十八

さ蕨のもえいづる春になりぬれば野邊の霞もたなびきにけり

吹く風の涼しくもあるかおのづから山の蟬鳴きて秋は來にけり

天の原ふりさけ見れば月きよみ秋の夜いたく更けにけるかな

笹の葉に霰さやぎてみ山べの嶺の木がらししきりて吹きぬ

沖の小島　今の初島　靜岡縣熱海市に屬し、その東南約十粁にあり

箱根路をわが越え來れば伊豆の海や沖の小島に波の寄る見ゆ

大海の磯もとどろに寄する波われてくだけてさけて散るかも

ものいはぬ四方のけだものすらだにもあはれなるかなや親の子をおもふ

戸川秋骨
名は明三　文學者　慶應義塾大學教授　明治三年生

松風
松風といふ海士乙女を主役とせる能樂の曲名

三　能樂禮讃

戸川秋骨

誰もいふ事であるが、能樂の趣は象徵（シヤウチヤウ）である。決して露骨に、若しくは明白に、また敍述的（ジヨジユツテキ）に表出する事をしない。謠（ウタヒ）はちやうど楷書の一の字のやうなもので、極めて簡單であるが、それだけ難しく、ごまかしの餘地もなく、同時に象徵的で暗示的であるやうに思はれるが、これは能に於ては一層適切にいひ得る。たとへば、能のそれぞれの曲を代表する面は、その背後にあらゆるものを包藏してゐるかと思はれる程に暗示的である。が、更にその面をつけた演者が、極めて僅か顏を上げるか下げるかすることによつて、多大な意義がそこに表出される。喜怒哀樂（キドアイラク）が、その面の少しばかりの動かし方によつて顯されるのである。あの「松風」の曲で、シテが舞臺を少し前の方に進んで、前方を打眺め

シテ
能樂の主役の稱

るやうにちよつと面を左から右へと動かせば、「蘆邊（アシベ）の田鶴こそは打ちさわげ」といふやうな、水邊の靜閑な趣がありありと現出して來る。それは觀者の主觀によるので、さう思ふからさう見えるのだといふ人があるかも知れない。それは如何にもその通りである。極めて主觀的である。しかし、主觀的にさう感じさせるものはやはり演出そのものに象徵的な處があるからである。八方にらみなるものは眞正面を向いてゐる。眞正面を向いてゐるから、左に居るものも、右に居るものも、それが自分を見てゐるやうに思ふのだ。ちやうど

テシの「風松」

それと同じ理由で、暗示的に象徴的に色々なものを包藏してゐるから、それが觀者の思ふ通りに見えるのである。

なほ、謠曲の文字は、實に雜多（ザッタ）な文句を集めたやうなものである。その曲と何の緣故もないやうな句が澤山に羅列されてある。しかも、それ等の句が集り集つて、いつとはなしに曲そのものの心持を出すやうになる。これも主觀的なことではあるが、また一種の象徴たる事實であらう。いづれにしても、自然的寫實的ではない。もつともそれはその作成された當時にあつては、やはり寫實的分子を多分にもつてゐたのださうであるが、今日では、殊にそれが能として演じられる場合、全く象徴的になつてゐると言はざるを得ない。

私は又、自分の狹い見聞を以てすれば、古今の藝術でこの能樂ほど緊張したものはないと思ふ。能樂の演出には極めて微細

と思はれる點にまで注意しなければならない。それはたゞ緊張によつてのみ得られる。一寸面を動かして喜を表し、面を下げて悲しみを示す藝術であるから――その面の動かし方に非常な意義が附隨するのであるから、それは緊張しなくてはならない譯である。能樂の曲は、第一神事、第二修羅もの、第三かつらもの、第四現在もの、第五天狗・般若類の五種類から成るので、正式にいへば、必ず一度にこの五番を演ずるのであるが、私はよく普通の人が五番を觀るに堪へられたものだと、それを異樣に感ずるものである。それを觀るには、六七時間の緊張をつゞけなければならないからである。一曲だけ觀るにも宜い加減な疲勞を感ずる次第である。能樂は私にとつては宗教のやうなものであるが、その理由の一は、この緊張味にあるのであらう。

緊張味に次いで能樂に缺くべからざるものは、その力である。

謠曲が力を主とする聲樂である事は誰でも承知してゐることと思ふが、能樂もあくまでこの力を主としてゐる。前に言つた緊張味も、この力から來るのであらう。素より力といつて、たゞ無闇に力むのではない。力んだ聲で謠つた處で、それが立派な謠となるわけのものではないと同様に、たゞ眞面目腐つて力こぶを入れた處で、立派な能が演じられるものではない。その力なるものが、自然に演者の身に體現し、演者の普通に靜かに身體を動かすのが、觀者に非常な力として感じられるやうにならなければ、完全とはいへない。立派な演者なら、たゞ直立してゐても、それが磐石のやうな感を與へる。これは始めて能を見たある人のことであるが、さる演者の能を見て、「あの人の立つてゐるのは、まるで樹が地から生えてゐるやうな感を與へますね。」と言つた。全くそれ程の力を以て演者は立つてゐるのである。立

光悅
本阿彌光悅
刀劍鑑定家・畫家・書家
寛永十四年（一二九七）歿、年八十一（一說八十）

宗達
本名野々村以悅（或云野村）表屋と稱す
畫家　寛永二十年歿

派な演者の踏む拍子は、そこから火炎が飛立つかと思はれるほどである。

しかし、これは力といふよりも別の能力かも知れない。何か自然の間に、その根柢をもつてゐるある働であるかも知れない。何となれば、武勇を現すもの、怪異を現すものに於ては力といつても差支へないが、その同じ力なるものは、柔かいもの、優しいものにも顯れてゐるからである。しかし、これは能樂に限つたものではなく、光悅や宗達の畫などにも特に目立つ處であるが、能樂にはそれが際立つて顯れてゐるやうである。強いものは勿論のことであるが、弱いものもおのづから有してゐる自然の力とでも云ふより外に、私は說明の能力をもつてゐない。とにかくこの力こそ、能樂のもつとも緊要な條件の一つである。

（能樂禮讚）

能樂の美（羽衣）

三羽衣

風早の風早の三保の浦曲をこぐ舟の舟人さわぐ波立つらしも（萬葉集）

三保の松原
靜岡縣清水市三保

人物

ワキ　漁夫白龍
ワキヅレ　漁夫二人
シテ　天女

所

駿河國三保松原

時

春（三月）

ワキ　『風早の三保の浦わをこぐ舟の、浦人騒ぐ波路かな。
ワキヅレ
ワキ　『これは三保の松原に、白龍と申す漁夫にて候。
ワキヅレ　『萬里の好山に雲忽ちに起り、一樓の明月に雨始めて晴

萬里の好山千里好山雲乍歛、一樓名月雨初晴（詩人玉屑）

忘れめや忘れずよ清見が關の波間より霞みて見えし三保の松原（續古今和歌集、中務卿）

清見潟
靜岡縣庵原郡にある灣。古來三保浦と混同し、その別名の如く用ひらる。

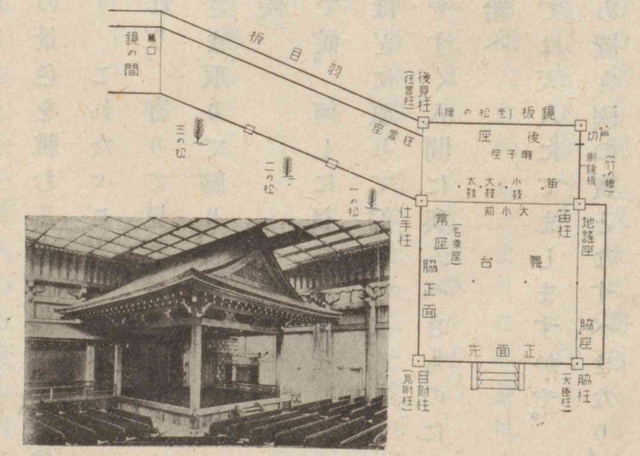
風向ふ風向ふ雲の浮波立つと見て釣せぬ先に歸る舟人（藤原爲相）

れり。げにのどかなる時しもや。春のけしき松原の、波立ちつゞく朝霞、月も殘りの天の原、及びなき身の眺にも、心空なる景色かな。

『忘れめや、山路をわけて清見潟、遙かに三保の松原に、立連れいざや通はん。

『風向ふ雲の浮波立つと見て、釣せで人や歸るらん。

待て暫し、春ならば、吹くものどけき朝風の、松は常磐



能舞臺と平面圖

末世　釋迦入滅後五百年を正法時

の聲ぞかし。波は音なき朝凪に、釣人多き小舟かな。

ワキ「われ三保の松原に上り、浦の景色を眺むる處に、虚空に花降り、音樂聞え、靈香四方に薫ず。これたゞごとと思はぬ處に、これなる松に、美しき衣懸れり。寄りて見れば、色香妙にして、常の衣にあらず。いかさま取りて歸り、古き人にも見せ、家の寶となさばやと存じ候。

シテ「なう、その衣はこなたのにて候。何しに召され候ぞ。

ワキ「これは拾ひたる衣にて候ほどに、取りて歸り候よ。

シテ「それは天人の羽衣とて、たやすく人間に與ふべきものにあらず。もとの如くに置き給へ。

ワキ「そもこの衣の御主とは、さては天人にてましますかや。さもあらば、末世の奇特に留め置き、國の寶となすべきなり。衣を返す事あるまじ。

とし、次の一千年を像法時とし、後の一萬年を末法時卽ち末世とす

下界　天上界に對して人間界をいふ

天人の五衰　天人が死せんとする時、五

シテ「悲しやな、羽衣なくては飛行の道も絶え、天上に歸らんことも叶ふまじ。さりとては返したび給へ。

ワキ『この御詞を聞くよりも、愈白龍力を得、「もとよりこの身は心なき、天の羽衣とりかくし、『叶ふまじとて立ちのけば、

シテ『今はさながら天人も、羽なき鳥の如くにて、上らんとすれば衣なし。

ワキ『地に又住めば下界なり。

シテ『とやあらん、かくやあらんと悲しめど、

ワキ『白龍衣を返さねば、

シテ『力及ばず、

ワキ『せん方も

地『涙の雨の玉鬘、かざしの花もしをしをと、天人の五衰も、目の前に見えてあさましや。

種の衰相を現するをいふ
一者衣裳垢膩、二者頭上華萎、三者身體臭穢、四者腋下汗出、五者不レ樂二本座一（涅槃經）
天の原
天の原ふりさけ見れば霞立ち家路まどひて行方知らずも（丹後風土記）
迦陵頻伽
梵語、「妙音鳥」と譯す極樂淨土に住み美音にて鳴くといふ鳥

シテ『天の原、ふりさけ見れば霞立つ、雲路惑ひて行方知らずも。

地『住み馴れし空にいつしか行く雲の、うらやましきけしきかな。

『迦陵頻伽の馴れ馴れし、聲今更に僅かなる、雁がねの歸りゆく、天路を聞けばなつかしや。千鳥・鷗の沖つ波、行くか歸るか春風の、空に吹くまでなつかしや。

ワキ「いかに申し候。御姿を見奉れば、餘りに御痛はしく候程に、衣を返し申さうずるにて候。

シテ「あら嬉しや、此方へ賜はり候へ。

ワキ「暫く。承り及びたる天人の舞樂、唯今こゝにて奏し給はば、衣を返し申すべし。

シテ「嬉しや、さては天上に歸らんことを得たり。この悅にとてもさらば、人間の御遊のかたみの舞、月宮を廻らす舞曲あり。

霓裳羽衣の曲
唐樂　玉樹後庭花の別名
東遊

唯今こゝにて奏しつゝ、世の憂き人に傳ふべし。さりながら、衣なくては叶ふまじ。さりとてはまづ返し給へ。

ワキ「いや、この衣を返しなば、舞曲をなさでそのまゝに、天にや上り給ふべき。

シテ「いや、疑は人間にあり。天に僞なきものを。

ワキ『あら恥づかしや。さらばとて、羽衣を返し與ふれば、

シテ『少女は衣を着しつゝ、霓裳羽衣の曲をなし、

ワキ『天の羽衣風に和し、

シテ『雨に潤ふ花の袖、

ワキ『一曲を奏で、

シテ『舞ふとかや。

地『東遊の駿河舞、この時や始なるらん。

神事等に奏する舞曲の名
駿河舞
駿河國の風俗歌に合はせて舞ふ舞
二神
伊弉諾、伊弉册二神
十方世界
四方・四維・上下の十方に存する無邊の世界
白衣黒衣の天人
月宮殿内三十天子、十五人青衣天子、十五人白衣天子云々（三界義の註）
春霞

春霞たなびきにけり久方の月の桂の花や咲くらむ（後撰和歌集）
天つ風
天つ風雲のかよひぢ吹きとぢよ少女の姿しばしとどめむ（古今和歌集）
君が代は
君が代は天の羽衣まれにきて撫づともつきぬ巖なるらむ（拾遺和歌集）
蘇命路
又須彌　梵語「妙高」と譯す佛教にて一小世界の中心を

春霞。たなびきにけり久方の。月の桂の花や咲く。げに花かづら色めくは春のしるしかや。面白や天ならでこそ妙なり。天つ風。雲の通ひ路吹きとぢよ。少女の姿。暫し留まりて。この松原の。春の色を三保が崎。月清見潟富士の雪いづれや春のあけぼの。類ひなみも松風ものどかなる浦の有樣。その上天地は。何を隔てん玉垣の。内外の神の

へにして、

『白衣・黒衣の天人の、數を三五に分つて、一月夜々の天少女、奉仕を定め、役をなす。

『われも數ある天少女、

地

『月の桂の身を分けて、假に東の駿河舞、世に傳へたる曲とかや。

『春霞たなびきにけり、久方の、月の桂の花や咲く。げに花かづら色めくは、春のしるしかや。面白や天ならでこそ妙なり天つ風、雲の通ひ路吹きとぢよ。少女の姿暫し留りて、この松原の春の色を三保が崎。月清見潟、富士の雪、いづれや春の曙。たぐひ浪も松風も、のどかなる浦の有樣。その上天地は、何を隔てん玉垣の、内外の神の御末にて、月も曇らぬ日の本や。

シテ『君が代は、天の羽衣まれにきて、

地「撫づとも盡きぬ巖ぞと、聞くも妙なり東歌。聲添へて數々の、簫・笛・琴・箜篌、孤雲の外に充ち滿ちて、落日の紅は蘇命路の山をうつして、綠は波に浮島が、拂ふ嵐に花降りて、げに雪を廻らす白雲の袖ぞ妙なる。

なすといふ山
月天子　月宮殿に住する天王
本地大勢至　本地は化身に對し本體をいふ　大勢至は阿彌陀佛の脇士にて智慧を司る菩薩
七寶　金・銀・瑠璃・硨磲・瑪瑙・眞珠・玫瑰（法華經授記品の說）

シテ『南無歸命月天子。本地大勢至。

地『東遊の舞の曲、

シテ『或は天つ御空の綠の衣、

地『又は春立つ霞の衣、

シテ『色香も妙なり少女の裳裾、

地『左右左、さいう颯々の、花をかざしの天の羽袖、靡くも返すも舞の袖。

『東遊の數々に、その名も月の色人は、三五夜中の空に又、滿願眞如の影となり、御願圓滿國土成就、七寶充滿の寶を降らし、國土にこれを施し給ふ。さる程に時移つて、天の羽衣、浦風に靡き靡く三保の松原、浮島が雲の愛鷹山や富士の高嶺、幽かになりて、天つみ空の霞に紛れて失せにけり。（觀世謠本）

松尾芭蕉
名は宗房　俳諧正風の祖
元祿七年（一三五四）歿、年五十一

三　俳句鈔

松尾芭蕉

春の夜や籠り人ゆかし堂の隅

春雨や蜂の巣つたふ屋根の漏り

くたびれて宿かる頃や藤の花

さみだれの雲吹きおとせ大井川

このあたり目に見ゆるもの皆すゞし

羽黒山　山形縣東田川郡にあり　海拔四一九米

涼しさやほの三日月の羽黒山

能なしのねむたし我を行々子

閑さや岩に沁み入る蟬の聲

朝露によごれて涼し瓜の泥

牛部屋に蚊の聲闇き殘暑かな

稻づまや海の面をひらめかす

秋風の吹けども靑し栗のいが

石山　滋賀縣大津市內

石山の石より白し秋のかぜ

明月に麓の霧や田のくもり

年暮れぬ笠着て草鞋はきながら

與謝蕪村

草霞み水に聲なき日ぐれかな

海手より日は照りつけて山ざくら

甲斐が嶺に雲こそかゝれ梨の花

與謝蕪村　姓は谷口　與謝は別姓　名は長庚　後に寅　字は春星　俳人　又畫を能くす　天明三年（二四四三）歿、年六十八

うきくさも沈むばかりよ五月雨

石工の鑿冷やしたる清水かな

蓮池の田風にしらむ葉うらかな

ゆふがほや竹焼く寺のうすけぶり

月天心貧しき町を通りけり

小鳥來る音うれしさよ板びさし

楠の根を靜かにぬらす時雨かな

落穗拾ひ日あたる方へあゆみ行く

葱買ひて枯木の中を歸りけり

鵜のこぼし去りぬる實のあかき

てらてらと石に日の照る枯野かな

木枯や島の小石目に見ゆる

奥田正造
教育家　成蹊高等女學校長
明治十七年生

宗久
今井氏　名は久秀　茶道を武野紹鷗に學ぶ

利休
千氏　名は宗易　千家流茶道の祖　天正十九年（一二五一）歿、年七十一
醒ヶ井
今の京都市下京區醒井通にありしといふ

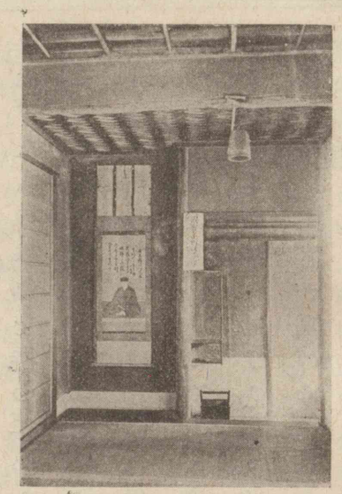
二四　茶境

奥田正造

主客ともに世塵のけがれを洗ひ去つて、靜寂の中、相和し相敬し、油然として樂しみの心に叶ふとき、之を茶境といふ。

降りつみし雪の面白さに、天王寺屋宗久、不時に利休の庵をおとづれた。いまだ曉を催さざるに、門の戸は既に細目にあけられてゐた。案内を乞うて腰掛に至れば、庵をもるる名香、靜かな路地に薫つて、その趣一入である。迎へられて席に入れば、已に松風の音さわやかである。閑談暫く時をうつす間に、勝手の戸を開く音がして、人のけはひがした。利休は「かゝる晨こそ醒ヶ井の水をと思ひ、汲みに遣はせしもののはや歸り候ひつらん。」とてもの事に釜を改めて一服參らせ候べし。」と云ひつゝ、釜をあげて水屋へ立つた。宗久は爐邊にうちより、炭のながれの見事

さにしばし見とれてゐたが、心づいて道幸の内を見ると、仕込んだ炭斗があつた。取出し、炭二つ三つさしくべて利休を待つた。やがて水を改め、濡釜として運び出した利休にむかひ「灰のながれ誠に見事には候ひしかど、いづれ火相を御改めのことと思ひより候まゝ、炭二つ三つさしくべ候。」と挨拶した。


茶室

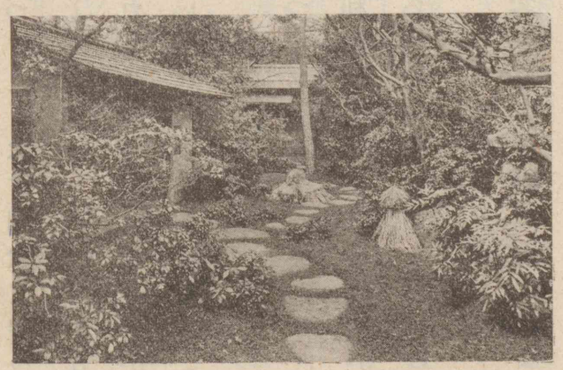
利休はその心入を感じ「かゝる人と茶をしてこそ、雪の晨の味も一入なれ。」と喜んだ。

相和相敬の境なれば、勿論客にも客としての働が大切ではあるが、主人の心づくしが主であるだけに、主人の一擧一動には能敬能清の眞がこもつて、茶境をして俗事雜境に陷らしめぬ樣に

柳生但馬守
名は宗矩　新陰流劍法の名家　正保三年（一六三〇）歿年七十六

片桐石見守
名は貞昌　石州流茶道の祖　延寶元年（一三三三）歿、年六十九

心がけ、手前に一點のゆるみのない樣につとめねばならない。柳生但馬守が片桐石見守の手前を見て、「尙この境に入り得るか。」と驚かれたといふ事である。身心をねるといふ上から見れば、そのねり上げたものは、劍を持つ手から始めても、茶杓を清むる手から始めても、別に變りのある筈はない。併し、このゆるみのないとは、自らも窮屈になり、客も窮屈にせよといふ意味ではない。主客一點のゆるみのない姿の裡に、共に煩思雜慮の走作を拂つて、主人は客の心となり、客は主人の心となり、主客一如に歸する事をいふのである。煩思雜慮



露地

紹鷗
武野氏　名は仲村　茶人
弘治元年（二二一五）歿、年五十三

は手前を亂す源である。それを除くためには練習がいる。その練習の結果純一無雜の境に悟入し得るのである。茶道で手前の習熟といふのは、運び・扱ひ等が機械のやうに出來るといふことではない。心の働を加へて工夫した結果、和敬清寂に一如たる心身を作り上げることである。主客ともに相和相敬し、能清能寂となるのである。

利休の朝顏が見事だといふ評判を聞いて、紹鷗は拜見を所望した。利休はこの仰を喜び、日を約して師をその庵に請じた。定日となり、紹鷗その庵に至れば、路地には朝顏の影も形もない。意外の感に打たれつゝ席に入れば、床の花入に咲いた一輪の朝顏が、色も一入あざやかに師を迎へた。紹鷗は床前に坐し、膝を打つて之を賞歎した。利休は凡ての朝顏を刈りつくし、只一輪に、迎ふる人と迎へらるる人との心づくしを集中して、主客一如

の歸結を作り出だしたのである。紹鷗が「この心入とても及ぶ處にあらず。」と云うたのも無理はない。

かく時刻を擇び、形式を異にして工夫せらるる茶會で開かれる茶境を、器物の飾り附けや案排で事すみたりと思ふのは、主客ともに至らぬが故である。一期一會の思をやどして、萬事麁末なきやう實意をつくす主人のすゝめに、客も何一つおろそかならぬを感じ、自ら難値難遇の喜を味はふ時、主客歴然として、而も主客一如たる境が開かれる。これを眞の茶境といふ。（茶味）

法に從へば、從容一絲亂れず、法を破れば、突嗟の働によつて更に一境を開く。無碍自在「白雲の長空を飛ぶ」が如くである。

（奥田正造）

岡倉覺三
東京美術學校長、後、米國ボストン博物館東洋部長
大正二年歿、年五十三

三五　生花の美

岡倉覺三

春の東雲のふるへる薄明に小鳥が木の間でほがらかな調子で私語いてゐる時、諸君は彼等が其の仲間に花のことを語つてゐるのだと感じたことはないだらうか。人間について見れば、花を觀賞することは、どうも詩と時を同じくして起つてゐるやうである。無意識の故に麗しく、沈默の爲に芳しい花の姿によつて、原始人は粗野な自然の必要を超越して人間らしくなつた。彼が不必要な物の微妙な用途を認めた時、彼は藝術の國に入つたのである。

喜にも悲しみにも、花は我等の不斷の友である。花と共に飲み、共に食ひ、共に歌ひ、共に踊り、共に戯れる。花を飾つて結婚の式を擧げ、花を以て命名の式を行ふ。花がなくては死んでも行

の歸結を作り出だしたのである。紹鷗が「この心入とても及ぶ處にあらず。」と云うたのも無理はない。

かく時刻を擇び、形式を異にして工夫せらるる茶會で開かれる茶境を、器物の飾り附けや案排で事すみたりと思ふのは、主客ともに至らぬが故である。一期一會の思をやどして、萬事麁末なきやう實意をつくす主人のすゝめに、客も何一つおろそかならぬを感じ、自ら難値難遇の喜を味はふ時、主客歴然として、而も主客一如たる境が開かれる。これを眞の茶境といふ。（茶味）

法に從へば、從容一絲亂れず、法を破れば、突嗟の働によつて更に一境を開く。無碍自在「白雲の長空を飛ぶ」が如くである。

（奥田正造）

岡倉覺三
東京美術學校長、後、米國ボストン博物館東洋部長
大正二年歿、年五十三

三五　生花の美

岡倉覺三

春の東雲のふるへる薄明に小鳥が木の間でほがらかな調子で私語いてゐる時、諸君は彼等が其の仲間に花のことを語つてゐるのだと感じたことはないだらうか。人間について見れば、花を觀賞することは、どうも詩と時を同じくして起つてゐるやうである。無意識の故に麗しく、沈默の爲に芳しい花の姿によつて、原始人は粗野な自然の必要を超越して人間らしくなつた。彼が不必要な物の微妙な用途を認めた時、彼は藝術の國に入つたのである。

喜にも悲しみにも、花は我等の不斷の友である。花と共に飲み、共に食ひ、共に歌ひ、共に踊り、共に戯れる。花を飾つて結婚の式を擧げ、花を以て命名の式を行ふ。花がなくては死んでも行

けぬ。百合の花を以て禮拜し、蓮の花を以て冥想に入り、薔薇をつけ菊花をつけて戰列を作り、そして突擊した。我々は花なくてどうして生きて行かれよう。花を奪はれた世界は考へてみても恐しい。花は病める人の枕邊に異常な慰安を齎し、疲れた人々の闇の世界に喜悅の光を齎す。又その澄みきつた和かい色は、丁度美しい子供を熟眺めてゐると、失はれた希望が思ひ起されるやうに、失はれようとしてゐる自信を回復してくれる。

西洋の社會に於て、花を無駄にすることは、驚き入つた事である。舞踏室や宴會の席を飾る爲に日々伐取られ、翌日は投捨てられる花の數は莫大なものに違ひない。此等の花は皆、その騷の濟んだ後はどこへ行くのであらう。萎れた花が無情にも糞土の上に捨てられてゐるのを見る程、世にも哀れなものはない。

どうして花はかくも美しく生れて、しかもかくまで薄命なの

であらう。蟲は刺すことが出來る。最も溫順な動物でも追ひつめられると戰ふものである。又ボンネットを飾るために羽毛を狙はれてゐる鳥は、その追手から飛去ることが出來る。人が上衣にしたいと貪る毛皮のある獸は、人が近づけば隱れることが出來る。悲しい哉！翼ある唯一の花は蝶のみで、他の花は皆、殺戮者に會つてはどうすることも出來ない。彼等が斷末魔の苦しみに叫んだとても、その聲は我等の無情の耳へは達しない。我々は、默々として我等に仕へ我等を愛するものに對して、絕えず殘忍であるが、これが爲に、これ等の最もよき友から我々が見捨てられる時が來るかも知れない。諸君は野生の花が年年少くなつてゆくのに氣はつかないだらうか。それは彼等の中の賢人共が、人がもつと人情のあるやうになるまでこの世から去れと、彼等に言つてきかせたのかも知れない。多分彼等は

唐　支那の國號の一　我が推古天皇の二十六年（一二七八）より醍醐天皇の延喜七年（一五六七）まで

宋　支那の國號の一　我が村上天皇の天德四年（一六二〇）より後宇多天皇の弘安二年（一九三九）まで

玄宗皇帝　唐の第六代の天子

天へ移住してしまつたのであらう。

草花を作る人の爲には大いに肩を持つてやつてもよい。植木鉢をいぢる人は、花鋏の人よりも遙かに人情がある。彼が水や日光について心配したり、寄生蟲を相手に爭つたり、霜を恐れたり、芽の出やうがおそい時は心配し、葉に光澤が出て來ると有頂天になつて喜ぶ樣子を窺つてゐるのは、樂しいものである。東洋では花卉栽培の道は非常に古いものであつて、詩人の嗜好とその愛好する花卉は、屢、物語や歌にしるされてゐる。唐・宋の時代には、陶器術の發達に伴なつて、花卉を入れる驚くべき器が作られたといふことである。といつても植木鉢ではなく、寶石を嵌めた御殿であつた。花毎に、事へる特使が派遣せられ、兎の毛で作つた軟かい刷毛でその葉を洗ふのであつた。牡丹は正裝した美しい侍女が水を與ふべきもの、寒梅は青い顏をしてほ

つそりとした修道僧が水をやるべきものと書いた本がある。

由來東洋では、か弱い花を保護するためには非常な警戒をしたものであつた。唐の玄宗皇帝は、鳥を近づけないために花園の樹枝に小さい金の鈴をかけておいた。春の日に宮廷の樂人を率ゐて出で、美しい音樂で花を喜ばせたのも彼であつた。義經の書いたものだといふ傳說のある奇妙な高札が、或寺院に現存してゐる。それはある不思議な梅の樹を保護するために掲げられた掲示であつて、尙武時代の凄いをかし味を以て我等の心に訴へる。梅花の美しさを述べた後「一枝を伐らば一指を剪るべし。」といふ文が書いてある。花を無闇に伐捨てたり、美術品をば臺無しにする者共に對しては、今日に於ても願くはかういふ法律が實施せられよかしと思ふ。

しかし、鉢植の花の場合でさへ、人間の勝手氣儘な事が感ぜら

れる氣がする。何故に花をその故里から連れ出して、知らぬ他郷に咲かせようとするのであるか。それは小鳥を籠に閉ぢこめて、歌はせようとするのも同じではないか。蘭類が溫室で、人工の熱によつて息づまる思をしながら、懷かしい南國の空を一目見たいとあてもなく憧憬れてゐると、誰が知つてゐよう。

花を理想的に愛する人は、破れた籬の前に坐して野菊と語つた陶淵明や、黄昏に西湖の梅花の間を逍遙しながら、暗香浮動の趣に我を忘れた林和靖の如く、花の生れ故郷に花を訪ねる人々である。周茂叔は、彼の夢が蓮の花の夢と混ずる樣に、舟中に眠つたと傳へられてゐる。

しかし、餘りに感傷的になる事はやめよう。花を徒費することはいましめつゝ、もつと壯大な氣持にならうではないか。老子曰く「天地不仁。」と。弘法大師曰く「生生生生暗生、始死死死死冥

陶淵明 名は潛 東晉の詩人
林和靖 名は逋 宋代の隱君子
周茂叔 周濂溪 宋代道學の大家
老子 漢司馬遷の「史記」に、楚の苦縣屬鄉曲仁里の人で、名は耳、字は聃、姓は李氏とあり
弘法大師 僧空海の諡號 我が國眞言宗の祖 承和二年(一四九五)寂、年六十二

死終」と。我々はいづれに向つても「破壞」に面するのである。變化こそは唯一の永遠である。古きものの崩壞によつてのみ、改造が可能となる。拜火教徒が火中に迎へたものは、「總べてを呑噬するもの」の影であつた。今日でも、神道の日本人がその前にひれふす所のものは、「劍魂」の氷のやうな純潔である。神祕の火は我等の弱點を燒きつくし、神聖な劍は慾情の絆を斷つ。我等の屍灰の中から天上の望といふ「不死の鳥」が現れ、慾情を脫した一層高い人格が生れ出て來る。

花をちぎる事によつて新な形を生み出して、人の心を高尙にする事が出來るならば、さうしてもよいではないか。我々が花に求むる所は、たゞ美に對する奉納を共にせん事にある。我々は「純潔」と「淸楚」に身を捧げる事によつて、その罪亡しをしよう。かういふ原理で、茶人達は生花の法を定めたのである。

我が茶や花の宗匠のやり口を知つてゐる人は、誰でも彼等が宗教的の尊敬をもつて花を見る事に氣がついたに違ひない。彼等は一枝一條もみだりに伐取る事をしないで、己が心に描く美的配合を目的に、注意深く選擇する。彼等は、若し萬一絶對に必要の度を越えて伐取るやうな事があると、これを恥とした。これに關聯して言つてもよいと思はれる事は、彼等はいつも、多少でも葉があればこれを花に添へておくといふ事である。といふのは、彼等の目的は花の生活の全美を表すにあるから。此の點については、その他の多くの點に於けると同樣、彼等の方法は西洋諸國に行はれるものと異なつてゐる。かの國では、いはば胴のない花梗と頭だけが亂雜に花瓶にさしこんであるのをよく見受ける。

茶の宗匠が花を滿足に生けると、彼はそれを床の間に置く。

その效果を妨げる樣な物は一切その近くにはおかれない。たとへ一幅の畫でも、その配合に何か特殊の審美的理由がなければならぬ。花はそこに王位についた皇子の樣に坐つてゐる。そして客やお弟子達は、その室に入るや、先づこれに丁寧な御辭儀をしてから始めて主人に挨拶をする。花が色褪せると、宗匠は懇ろにそれを川に流し、又は丁寧に地中に埋める。その靈を弔うて墓碑を建てる事さへもある。

花道の生れたのは十五世紀で、茶の湯の起つたと同時らしく思はれる。我が國の傳說によると、始めて花を生けたのは昔の佛教徒であるといふ。彼等は生物に對する限りなき心遣りのあまり、暴風に散らされた花を集めて、それを水桶に入れたといふことである。然し、茶人達の花の尊崇は、唯彼等の審美的儀式の一部をなしたに過ぎないのであつて、それだけが獨立して別

石州片桐石州前課參照

の儀式をなしてゐなかつたといふ事を忘れてはならぬ。生花は茶室にある他の美術品と同樣に、裝飾の全配合に從屬的なものであつた。故に石州は「雪が庭に積んでゐる時は白い梅花を用ひてはならぬ。」といふ規定をした。「騷々しい」花は無情にも茶室から遠ざけられた。茶人の生けた生花は、その場所から取去れば本來の趣旨を失ふものである。といふのは、その線や釣合は特にその周圍のものとの配合を考へて工夫してあるのであるから。

花を花の爲に崇拜する事は、十七世紀の中葉、花の宗匠が出る樣になつて起つたのである。さうなると、茶室には關係なく、唯花瓶が課する法則の他には全く法則がなくなつた。新しい考案、新しい方法が出來る樣になつて、これ等から生れ出た原則や流派が澤山あつた。

しかし、我等は花の宗匠の生花よりも、茶人の生花に對してひそかに同情を持つ。茶人の花は、適當に生けると藝術であつて、人生と眞に密接な關係を持つてゐるから、我々の心に訴へるのである。茶人達は、花を選擇することで彼等の爲すべきことは終つたと考へて、その他のことは花自らの身の上話にまかせた。晩冬の頃茶室に入れば、野櫻の小枝に蕾の椿の取りあはせてあるのを見る。それは、去らんとする冬の名殘と、來らんとする春の豫告を配合したものである。又いらいらするやうな暑い夏の日に、晝の御茶に行つて見れば、床の間の薄暗い、涼しい所にかかつてゐる花瓶には、一輪の百合を見るであらう。露の滴るその姿は、人生の愚さを笑つてゐるやうに思はれる。

花の獨奏は面白いものであるが、繪畫・彫刻の司伴樂となれば、その取りあはせには人を恍惚とさせるものがある。石州は嘗

て、湖沼の草木を思はせるやうに水盤に水草を生けて、上の壁には相阿彌の描いた、鴨の空飛ぶ繪をかけた。紹巴といふ茶人は、海邊の野花と漁家の形をした青銅の香爐に配するに、海岸の淋しさを歌つた和歌を以てした。その客人の一人は、その全配合の中に晩秋の微風を感じたと記してゐる。

かうして見ると、「花御供」の意味が充分に分る。彼等は人間のやうな卑怯者ではない。花によつては死を誇とするものもある。たしかに日本の櫻花は、風に身を委せて片々と落ちる時、これを誇るものであらう。吉野や嵐山の、薫る雪崩の前に立つたことのある人は、誰でもきつとさう感じたであらう。寶石をちりばめた雲の如く飛ぶことしばし、やがて水晶の流の上に舞ひ、笑ふ波の上に浮かびながら、「いざさらば春よ、我等は永遠の旅に行く。」といふやうである。（茶の本）

相阿彌　中尾氏　室町時代の畫家・花道家　大永五年（一一八五）歿

紹巴　里村紹巴　連歌の大家　又茶道を千利休に學ぶ　慶長七年（一二二六二）歿、年七十九

谷川徹三
法政大學教授
明治二十八年生

三六　月と日本人

谷川徹三

一般に晝は活動の時であり、夜は休息の時である。晝は悟性と有限と實際と經驗との世界であり、夜は心情と無限と靜觀と體驗との世界である。晝に於て、われわれはものの明かな輪廓と限界とを認識する。が、夜に於ては、輪廓はぼやけ融け、限界は失はれ、われわれはさながら無限の中にある。もとより、日中に於てもわれわれは（たとへば、大空に對して）無限を感ずることがある。しかし、それは夜空に對する場合の如く切實な感情としてではない。

闇黑は、小兒と原始の人とにとつて無限であるばかりでなく、またわれわれの中に住む小兒と原始の人とにとつても、否われわれにとつても、常に無限であるが、月夜にあつては、その無限の

感が闇夜に於けるとはいさゝか異なつてゐる。闇夜の無限はわれわれに虚無をのぞかせる。が、月夜にはほのかに物象を浮かべて、いはば永遠の時間のうちに、空間の漂ふ様を端的にわれわれの直觀に示現するのである。それは恐しい虚無ではなくて、たゞ存在のはかなさである。物象の明かな輪廓と限界とを示す安らかに確な日中の存在感とは、いづれも異なつてゐるにしても、恐しい虚無感と存在のはかなさの思との間には、大きな徑庭がある。それゆゑ、闇夜に人は恐怖を抱くのに對して、月の夜に人は多くやさしい感傷に捉へられる。闇黑は感性と靈性との分裂である。そして、その一が他を支配し易いに對して、月夜は感性と靈性とのひそかな融和である。

しかし、月夜はなほ薄明と對照される。さうされることによつて、その性質を一層明かにするであらう。月夜も薄明も、晝の

如くにものの明確な輪廓と限界とを示さない。と共に、闇の如くに、底知れぬ無限・虚無・絶望を示しもしない。ほのかな光に輪廓が鋭さを失ふことによつて、やさしさと漂ひとをもち、限界が消えることによつて、人は遙かな思にさそはれる。存在のはかなさ、やさしい物悲しさ、靜かな感傷に誘はれる。しかし、そこにはなほおのづからの相違がある。あかつきの薄明には、期待と熱とがある、生氣と新鮮な感覺とがある。夕暮の薄明には、それに反して、滿足と疲勞とが相半ばしてゐる。

さて、曉の薄明にも夕暮の薄明にも共通なものは、それが晝と夜との間の過ぎゆく短いひと時として、常に或あわたゞしい雰圍氣をもつてゐることである。すべての時間が不斷の流動ではあるが、晝と夜とは類似の狀態の一定の持續として、曉や夕暮ほどうつりゆく時の流を感ぜしめない。後の反省にその流の

速さを感じ驚いても、一つの直感のうちに、刻々と變化する外景のうちに、時の歩みを見るのではない。それゆゑ、月夜には、薄明に感ぜられぬ、或靜けさと安らかさと落着とがある。夕暮の薄明の中に人の感ずる哀感は、多く今日一日のことにかゝはるが、月夜に感ずる哀感は、むしろ遠い昔のことにかゝはる。曉の薄明にもつ希望は、多く今日一日のことにかゝはるが、月夜にもつ望は、むしろ遠い未來にかゝはる。曉に胸を躍らせるのは實行への期待であるが、月夜に心ときめかすのは捉へがたい憧れである。

かういふ月夜の感情が一般に浪漫的と呼ばれる感情に近いことは、以上によつてもほゞ明かであると思ふが、しかしまた、所謂浪漫的なものの概念と甚だ異なつたものをも、そこに見なけ

シュトゥルムーウントードゥラング
十八世紀末ドイツ文學界にあらはれた如き激越な革新的情熱

ればならないであらう。第一に、われわれはそこに沈靜を見出す。冷たい落着と青白い靜けさ。それは浪漫的なものの力强い半面である熱をもつてはゐない。また、その重要な母胎である「シュトゥルム-ウントードゥラング」をもつてはゐない。われわれは中天にかゝる滿月に、極めて自然に「靜かな偉大」と「氣高い單純」とをさへ感ずる。われわれは古典的彫刻にしばしば月光の美と相通ずる美しさを感ずる。

では、月は古典的であるか。否、月の光は決して快朗と明確な輪廓とを示さない。ものの限界を示さない。月はこの世ならぬ神祕をもつ。月はあらぬものへのあこがれに誘ふ。月は悲哀と感傷との母である。その美しさは全くの古典的ではない。

われわれの月に感ずるかゝる感情は、日本の文化を特質づける、殊にその詩歌に鮮かにあらはれてゐる、古典的と浪漫的との

中間をその樣式とする精神に通つてゐる。――月は日本文化の或意味での象徴である。

若し、しばしば人のするやうに、日本人の氣質をその風土と關聯させて考へれば、第一に、この國の溫暖な氣候は一般に人々の魂に中和を與へる。それは南方に於けるが如く、人間を懶惰にし、また文化的努力を不必要とするほど恩惠的でないと共に、北方に於ける如く、人間を嚴肅にし自然に打勝たんとさせるほど無慈悲でもない。それは適度に調和的である。第二に、海にかこまれた細長い國土は、その山水平野に特殊の相貌を與へる。總じて風景は、大陸的に對して、島國的と呼ばるべき特徴・變化と女性的性質とを有する。第三に、濕潤の氣は心の隅々にうるほひとこまやかさとを與へる。それは、熱烈と冷靜との中間にあつて、やさしい同感と反省とを生む。

サンタヤナ（1863―　）アメリカの詩人・哲學者

日本の文化は各の分野へこれらの性質を鮮かに反映してゐるが、月の與へるところもまた、あたかもこれらの性質に對應する。月は太陽の如くに、烈しく男性的でない。底知れぬ闇と、連なる星座との如くに、嚴肅で奥深くもない。月はやさしく照り、靜かな感傷に「もののあはれ」に誘ふ。月夜には色彩の華やかさはない。色はおぼろに暗く燻されてゐる。もの皆に「床しさ」がある。感性と靈性との融和がある。

月はこの心に於て見られる。それは常に單純なものの美しさをもち、餘韻と餘情とをもつてゐる。サンタヤナは星夜の美しさを分析して、それを主として多樣の統一、或は一に於ける多樣に見出してゐるが、もし西人が一般にかゝる立場から星の美しさを見るのであり、また美の原理の少くとも有力な一つをかかる點に置くとすれば、月の美しさの理解せられぬことは怪し

ソロー（1817-1862）アメリカの作家・隱者

むに足りない。わたしはかつてソローを讀んで、彼の如く自然と親しく生活した人でさへ「時々鎧戸の隙間から覗くほどしか月を見たことがなかつた。なぜ月光の中を僅かの道でも歩かなかつたらう。」と告白してゐるのを見て、奇異の感に打たれたのを記憶してゐる。かの國では、あらゆる星座の位置と運行と傳說とを知つてゐるものも、月については知るところ甚だ少いのである。それに反してこの國では、星座の運行についてはもとより、その最も著名なものの名さへ知らぬ人達も、十五夜に月を眺め「月に濡れて」歩くことを忘れない。この國の人達の自然享受は花鳥風月といひ、雪月花といひ、月をもつて常に自然の最も美しいものとしてゐる。しかも、恐らく人は、花に於てよりも雪に於てよりも、月に於て一層親しく自然に冥合する。月は日本人の氣質に最もかなつた自然の美である。

思ふに、かゝる月の賞美はすでに一つの傳統となつてゐる。それは年中行事の一つをつくつてゐる。從つて、おのづから自然の美を感ずる自然享受といはんより、人間の社會の一つの習俗・約束として、生き生きした內面の心をもつものでないとも考へられる。しかし、また飜つて思ふに、さほどまでになるには、兎に角、月の美しさが廣く人々の心に觸れねばならなかつたであらう。そして、單に「古風」を愛する人のみならず、また古風の中に新しい意味と價値とを見出さうとする人のみならず、最も新鮮な感覺を求めようとする人達の胸にさへも、その心は今もなほ全くは失はれてゐない。（生活・哲學・藝術）

北原白秋
本名隆吉　詩人・歌人　明治十八年生

雪に立つ竹

北原白秋

聖らかな白い一面の雪、その雪にも
平らな幅のかげりがある。
幽かな、緑ともまた紫ともつかぬ、
なんたるつめたい明りか。
竹はその雪の面に立ち、
ひとつひとつ立つ。

まつすぐなそれらの幹、
露はな間隔の透かし書。
實にこまかな枯葉であるが、
それにも明日の芽立がある。
影する雲の藍ねずみにも
ああ、豆ほどの白金の太陽。
かうした午後にこそ閑けさはあれ、

光と影とのいい調和が、
濕つて、さうして安らかな慰めが、
おのづからな早春の息づかひが。

聖らかな白い一面の雪、その雪にも
平らな幅のかげりがある。
雪に立つひとつひとつの竹、
それにも綠の反射がある。

（水墨集）

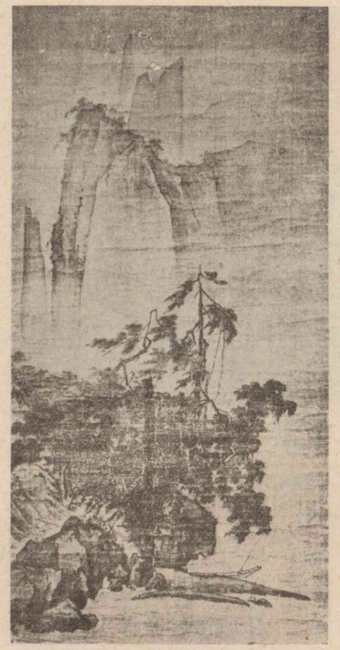
平福百穗
名は貞藏　畫家　昭和八年歿、年五十七

雪舟
本名小田等楊　畫僧　永正三年（一一六六）寂、年八十七
馬遠・夏珪
共に支那南宋中期の畫家

二八　日本畫の傳統

平福百穗

雪舟が畫の注意を書いて人にやつたものに「山水の趣は木立物古り、遙かに幽微なるがよく候。筆がるに馬遠・夏珪などの筆の跡をもととして御學び候が、第一の御稽古にて候。唯別物に似るを畫とせずと古人も申し置かれ候へども、皆目前の景色畫の師にて候。」といふ書き物があつて、

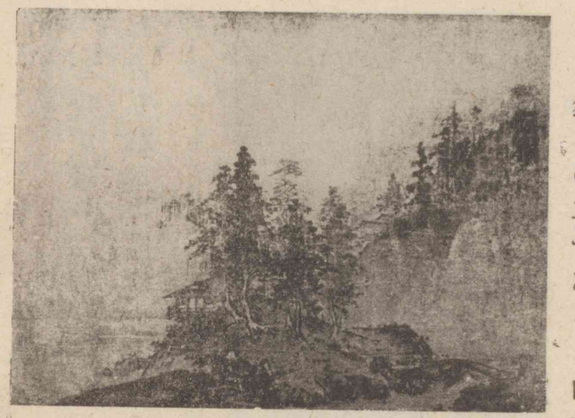


山水圖（馬遠筆）

残つてゐる。

この雪舟の注意は二つの要點にわかれる。一つは古に學ぶ

ことである。他は自然に學ぶことである。即ち畫の師は先進と自然との二である。山水の趣は幽微なるがよく、それには馬遠・夏珪などを師としたがよい。また畫は形似を主とせずと古人も言つてゐるが、目前の景色は皆師とすべきであるといふのである。そして、この古に學ぶことは即ち傳統に就くことである。自然に學ぶことは寫生である。この二つは別々の如くであつて、しかも別々ではない。のみならず、この二つは分離しては相互に意味が完結しない。



山水圖（夏珪筆）

なぜ畫では傳統に就く必要があるか、最も獨自性の貴ばれる繪畫に、どうしてこの傳統を必要とするか。これは確に一つの疑問である。しかし、それは繪畫といふ藝術の本質を吟味すれば、容易に解決される。科學は前人のなし終つた所からなし始め、前人のなした效果に效果を積んでその成績を增大してゆくが、藝術は全人格に立つが故に、前人のなし始めた所からなし始めねばならない。前人のなし始めた所から始めるといふことは、純眞な心の精進に立ちかへることに外ならない。

かくすぐれた前人の藝術を學びさへすれば自己が完成するかといへば、さうはゆかない。藝術に重要な獨自の創造は、たゞ古人の傳統に學ぶのみでは成立し得ない。自分を原因として動くものがなければならぬ。それには自然に觀入することが深くなければならぬ。こゝに自然を學ぶとは、單に自然の皮相

大和繪　我が國在來の畫風の畫　巨勢派はその嚆矢、土佐繪もこの名を稱す

狩野　狩野正信の創めし日本畫の一派

圓山　圓山應擧の創めし日本畫の一派

南畫　南宗畫　支那唐の王摩詰を祖とする繪畫又文人畫ともいふ

を模寫することではない。自然を人格の上に移して、全人格の所有とすることである。そこに獨自の創造が生れる。

傳統はそのまゝでは空虛である。それは單なる筆墨の末技のみに陷り易い。大和繪・狩野・圓山は固より、南畫に至るまで、末流に於てその弊が著しい。偉大な作家は、前人の出發點と自然觀入とに、目覺めたものといつてよい。たまたま單に傳統の末技の上のみに立つて何等かの工夫を加へて、一寸人の注意を惹くものもあるが、如上の二つの自覺を缺いたものの仕事は、極めて卑俗な眼を喜ばせるに過ぎない。その例は敢へて遠きに求めるま

山水人物圖　（狩野元信筆）

でもなく、現今東西の所謂大家の作によつても、明かに吾々の眼前に提示されてゐる。

然るに、近來青年日本畫家の行き方は、自ら之と異なつてゐる。この人達の多くは、先づ西洋畫に基づく寫生から入つてゐる。その態度・手法その他の上には何の傳統もない。これは自分達が繪を習ひはじめた時代の方法とは全く異なつてゐる。この差異は蓋し時代の變化に基づくものであらうと考へる。今の青年がその少年時代に於て先づ繪畫に接するのは、少年雜誌の口繪である。そして、その口繪は何れも皆西洋畫或はその教養に依るものである。また教室や家庭に於て描くものも西洋畫の系統である。日本畫系統の口繪を有するものは、比較的少年及び青年に緣遠い講談雜誌や婦人雜誌に多い。隨つて彼等は繪畫といへば先づ西洋畫を思ひ浮かべる。そして、日本畫とい

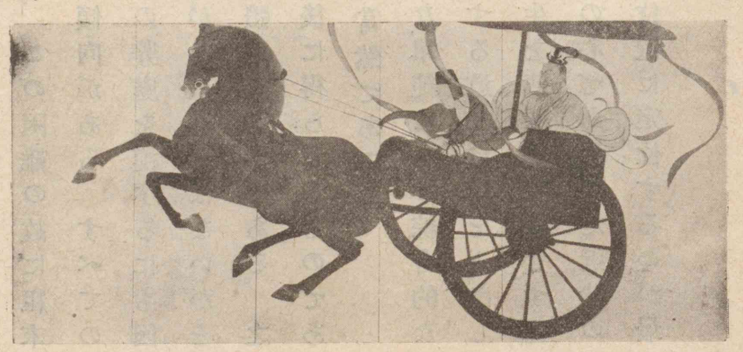
四條　松村吳春の創めし日本畫の一派　後には圓山派をも合はせいふ

へば、全く型の如く堅甲をつけた南畫・四條・狩野を思ひ浮かべる。かくしてその少年が青年となり、繪畫の道を選ぶにあたつては、西洋畫に非ずんば、在來の傳統を全く離れた日本畫である。全く傳統から自由になつて、自分の眼で自然を觀、感じようとしてゐる。隨つてその作品には、傳統を離脱した自由なものが示されてゐる。

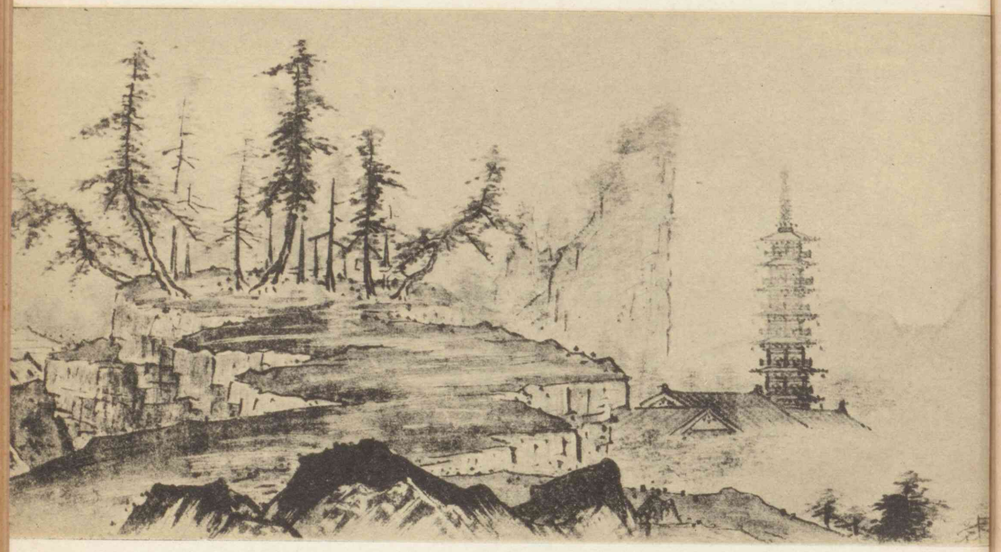
この傾向にして極まるならば、全く日本畫の傳統は消滅すべきであるのに、彼等は二三年乃至五六年にして、何時か古代の傳統を採用するやうに傾いて來る。西洋畫の影響から、一轉して古代に向ふのである。青年は自然の寫生を續けるに隨ひ、當然の歸結として傳統の眞の味を知るに至つたのである。寫生の實行は、こゝに必然に傳統の理解を要請し來つたのである。しかも、この傳統の味得は自らの理解に依つてであつて、單なる模

倣に依つてでないことは、その徑路に徵して明かである。單に傳統を傳統として保持するものではなく、理解に基づいて自由な選擇をなした結果である。

彼等は自然の寫生から入つて、やがて傳統に學ぶが故に、型から入つたものの樣に固定することがない。傳統は自由に新しく研究され學ばれる。かくして、その寫生は、深き根柢を有する藝術的教養を背景としたものとなるのである。たゞこゝに忘れてはならぬのは、骨法である。骨法は科學的



豫讓（平福百穗筆）



山水畫卷（雪舟筆）

に進歩し繼承せられるものではない。この困難の故に、粗末な研究者からは見棄てられようとする傾向がある。すべての作が一様に力弱き表現に傾くのは、先輩の弊處を模するにも因るだらうが、またこの點、用意に缺ける處がある爲ではないかと思ふ。骨法とは最も基本的な感情と形體との支持である。之は全く寫生と傳統との理解・研鑽を經て後に得らるるものであるから、青年の道が結局そこに向ふのは當然である。

自分が今望む心境は、廣くして靜かな、單純にして綜合的な心の狀態である。そして、これを可能にする道は、自然をとほしてこの古の心にかへることである。寫生を傳統と區別せず、寫生を傳統に基づけることが、正しい古人の心であり、また近代の心である。日本畫の傳統は、かくの如き位置に定位するのが最も妥當であると信じてゐる。（竹窓小話）

平泉　澄
文學博士　東京帝國大學教授　明治二十八年生

二九　武士道の復活

平泉　澄

一言に日本精神の復活といつても、仔細に分析解説しようとすれば、多岐に亙り、多端に分れるが、予はその最も必要なるものは武士道の復活であると信ずる。もとより、武士道の精神が直ちに日本精神の全體を蓋ふものであるとするのではないけれども、日本精神の長所の最もよく發揮せられたものとして、又日本精神復活の基礎として、先づ喚び起さるべきは、武士道の精神であるとするのである。

内には物慾にとらはれる事を卑しんで魂の自由を求め、分に安んじて足るを知り、而して外には忠孝の二つを以て道德の極致とし、しかもこの二つが、究極して忠の一字に歸着する事を明確に認識し、奉公隨順の誠をいたすは、日本精神の最も根本核心

とするところ、必ずしも特に武士道といふを要しないのである。しかしながら、武士道の名に於て之を喚び起す時、特に注意すべきは、苟くも道義のさしまねくところ、喜んで死地に入り一命を致さんとする義烈の氣象の、之に伴なひ來る事である。卽ち武士は、日本人の道を命にかけて實行實踐し、その爲には潔く散つてゆかうとする氣象に於て秀でてゐるのである。昔より、花は櫻木、人は武士。といふ。我が國に咲誇る花は、色とりどりに美はしい中で、櫻を以て花の中の花とし、日本精神は各方面に樣々に發揮される中に、武士道を以てその精華とするのである。何故に櫻を以て花の中の花とたゝへるか。それは時到り風吹けば、何の未練も猶豫もなく、潔く散りゆく美はしさを喜ぶのである。何故に武士を以て日本人の最も日本人なるものとするか。それは時艱難に遭遇して君國の大事に及ぶや、一身をかへりみる

ところなくして、一途に命を致すからである。この義烈の氣象を喚び起す事なくしては、日本精神を說いて千言萬言を費すも、畢竟無用の戲論に過ぎぬ。

望楠軒若林强齋、廣木忠信を祭るの文に於て、その風格を推賞して曰く、「其の學を爲すや、名利を求めず、文辭を事とせず、惟義これ務む、所謂己の爲の學とは、蓋しかくの如きものか。若し夫れ感慨奮激、死生利害を顧みざるの氣象は、則ち實に古人義烈の風あり。」と。今人の學を爲すや、多く名利を求め、文辭を事とし、惟利これ務め、一言にして言へば、所謂人の爲にするもの、而してその根柢に於て、武士の氣象を缺くが故に、一旦大變に遭遇して、利害の差をかへりみ、死生の際に迷ひ、平生の博學を以て遂に決斷する能はず、その學畢竟無用の學、その人結局無用の人たるを思ふとき、彼の古人義烈の風格を復活する事の、愈必要必須なるを考

孟子　支那戰國時代の哲人　名は軻　字は子輿　周赧王の二十六年（前二八九）歿、年八十四

吉田松陰　諱は矩方　字は義卿　通稱寅次郎　憂國の先覺者　安政六年（一八五九）歿、年二十九

へざるを得ない。

「志士は溝壑に在るを忘れず、勇士は其の元を喪ふを忘れず。」とは孟子の語であるが、吉田松陰、曾て之を獄中に講じ、「書を讀むの要は、是等の語に於て反復熟思すべし。此の志一度立つとき、人に求むることなく、世に願ふことなく、昂然として天地古今を一視すべし。」と說いた。こゝに志士とは、志達ありて節操を守るの士をいふ。しかるに、今日有志といはるるは、概して之をいへば却つて私利私慾の爲に事大結黨するものが多く、況や溝壑の如きは、初より少しも之を考へてゐないと云つていい。今の己の爲に利を求め、古の道の爲に義を求むる態度の相違は、是等の語に考へて明瞭である。古人義烈の氣象を喚び起す事は、益、今日の急務としなければならぬ。

思ふに、明治四年の廢藩、同九年の廢刀は、一般に武士なるもの

の滅亡を意味すると考へられ、從つてまた武士道なるものは、封建時代の舊弊であつて、今日在るべからざるものと考へらるるに至り、こゝに武士道は國民生活の指導的位置を、一時町人道に讓らざるを得ざるに至つた。しかも思へ、明治五年の徵兵令は、武士と農工商の區別を廢して、全國民を以て兵とせられたるもの、卽ち國民皆兵の古にかへつて、全國民を武士とせられたのである。乃ち今や全國民悉く武士である。平時は農工商それぞれの生業に從ふものの、一朝事有れば、皆劍を執つて起つのである。武士は明治初年に廢せられたのでなくして、却つてその範圍を擴大して、全國民に推し及ぼされたのである。武士道はここに於て、全國民の道德となつたのである。勇猛敢爲、恐るるところなく、ためらふ事を知らず、苟くも道義のさしまねくところ、喜んで死地に入り一命を致さんとする古人義烈の氣象を喚び

起す事は、それ故に我等當然當爲の事、決して好奇の說ではない。之を要するに、世界を正路にかへさんが爲には、先づ亞細亞をして亞細亞たらしめねばならぬ。亞細亞を亞細亞たらしめるには、先づ日本をして日本たらしめねばならぬ。日本をして日本たらしめるには、正しき日本精神を自覺し、是に立脚しなければならない。而して、其の之を敢へてせんが爲には、死生利害を顧みず、一意、義に就く武士道の精神を、長き眠の後に再び我等の胸の中に目覺めしめなければならないのである。（武士道の復活）

正氣歌　藤田彪

天地正大氣　粹然鍾(トシテアツマル)神州(ニ)
秀爲(デテハリ)不二(ノ)嶽(ト)　巍巍聳(トシテユ)千秋(ニ)

頼襄
字は子成　通稱久太郎　山陽と號す　歷史家・詩人
天保三年（一八四九二）歿、年五十三
櫻井驛　大阪府三島郡島本村の大字
金剛山　大阪府と奈良縣の境にあり海拔一一一二米

三〇　楠氏論

頼　襄

余數、攝・播の間を往來し、所謂櫻井驛なるものを訪ひ、之を山崎路に得たり。一小村のみ。過ぐる者、或は其の驛址たるを省せず。蓋し、足利・織・豐の數氏を經、世故變移し、道里驛程、從ひて輒ち改りしのみ。余是に於て低回して去ること能はず。金剛山の雲際に嶷立するを顧望して、公の義を擧げしの秋、及び其の子孫の據りて以て王室を扞護せしを想見するなり。

公の行在に詣りて天子に對へしを觀るに、曰く、「臣にして未だ死せずんば、賊滅びざるを患へたまはざれ。」と。夫れ、一兵衞尉を以て、居然として天下の重きを以て自ら任ず。豈値遇に感激し、身を以て國に許せるにあらずや。故に、能く赤手を以て江河を障へ、天日を既墜に回す。何ぞ夫れ壯なるや。

帝
後醍醐天皇

公、北條氏の精鋭を一城の下に聚め、新田・足利の屬をして、其の空虛を擣きて、以て其の渠魁を殪さしむ。帝の復辟したまふや、爵を醻い、職に任ずる、宜しく公を以て首となすべし。而るに、纔かに能く結城・名和の輩と肩を比せしむ。其の擧措を失ふ、以て中興の成る無きを知るに足る。

足利氏の叛くに及びて、朝廷方に新田氏に倚りて重きをなす。公は特褊裨に充てられ、其の驅使に供せらる。亦其の門地の若かざるあるを以てのみ。然れども、京師の大捷、殆ど掃殄を致しものは、公の策に因るにあらずや。嚮に、帝をして其の新田氏に任ぜし所のものを以て公に任ぜしめんか、曷んぞ犬羊狐鼠の賊をして吾が朝廷を蹂踐せしむるに至らんや。

然るに、其の死に臨みて子を戒むるを觀るに、又曰く、「吾死せば、天下は悉く足利氏に歸せん。」と。夫れ、天下の爲すべからざるを

楠木正成の筆蹟

此之間何等事候乎、抑爲御祈禱、觀心寺大師御作不動可奉渡之由、被下綸旨候之間、申遣寺僧方候、明後日二十八日御京著候之樣、可被奉渡候也、御共に御上洛候へく候、心事期面候、恐々謹言

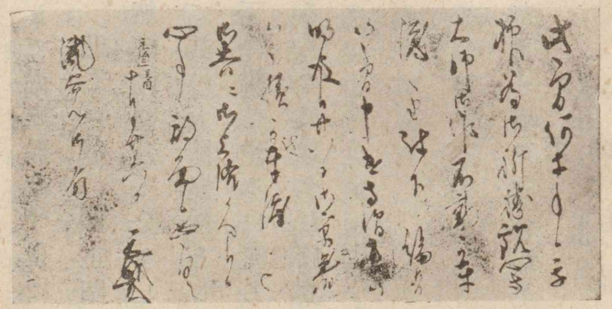
正成花押

十月二十六日

瀧覺御房

知りて而も猶其の子孫を留め、以て天子を衛らしむ。其の心を設くる、古の大臣と雖も何を以て遠く過ぎん。故に、子孫能く其の遺訓を守り、正統天子を彈丸黑子の地に護り、以て四海の寇賊を防ぎしもの、三朝五十餘年の久しきに及び、一門の肝腦を擧げて諸を國家の難に竭す。其の澌盡灰滅するに至りて、而る後足利氏始めて大いに其の志を天下に成すを得たり。蓋し、朝廷大いに楠氏に任ずる能はず、而も楠氏の自ら任ぜし所以は以て加ふるなし。

世の中興の諸將を論ずるや、尙其の資望の大小を視て、深くは其の實を揆らず。又當時の見と等しき



楠木正成の筆蹟

笠置
京都府相樂郡

のみ。楠氏あらずんば、將安くに託して、以て四方の望を繫がんや。笠置の夢兆、是に於て益、驗あり。而して、南風競はず、俱に傷き共に亡び、終古以て其の勞を恤むなし。悲しい哉。抑正閏は殊なりと雖も卒に一に歸し、能く鴻號を無窮に熙む。公をして知るあらしめば、亦以て瞑すべし。而して、其の大節巍然として山河と竝び存し、以て世道人心を萬古の下に維持するに足る。之を姦雄迭に起り、僅かに數百年に傳はるものに比すれば、其の得失果して何如ぞや。(日本外史)

島田三郎
號は沼南 政治家 評論家
大正十二年歿
年七十二
三田
東京市芝區
福澤諭吉邸及び慶應義塾の所在地

三 福澤先生を悼む

島田三郎

三田の高臺に長嘯して天下の瞻望を維ぎ、一管の筆を揮ひて泰西の文物を輸入し、三寸の舌を鼓して平民の氣焰をあげたる當代の巨人福澤先生逝けり。痛悼に勝ふべけんや。

先生は一代の師表にして、明治の社會、先生に負ふ所極めて大なり。曩に先生中風の症に惱み、一時世人を痛憂せしめたるも、其の後輕快に赴き、漸く健康に復するを傳ふ。聞く者愁眉を開きて之を祝せざるはなし。吾人謂へらく、「先生齡六旬を超えて一旦大患に罹る、其の快談健筆以て社會を鞭撻啓發せる故態に復せんこと難かるべし」と。然れども、此の大平民の社會に存するは、後進の恃んで心を強くする所なり。即ち其の悠々自適一日を永くし、以て吾人の志に酬いんを願ふこと甚だ切なりき。

天愁に天不愁遺一老（左傳）

本月 明治三十四年二月

中津 今の中津市 舊中津藩主は奥平氏十萬石

天保五年 仁孝天皇の御代（一四九四）

安政元年 孝明天皇の御代（一五一四）

然るに、天愁に此の老を遺さず、遂に本月三日午後十時を以て白玉樓に徵し去る。嗚呼先生の音容また接すべからず。豈哀惜嘆嗟に勝へんや。

先生の出處・經歷と主義・功績とは普く世人の知る所なり。其の社會に對する關係より家庭の生活に至るまで、著書と自傳とに詳かなり。然れども、其の梗概を約述し、吾人の所見を附記するは、亦敬慕追念の志を表する所以なり。

先生の嚴父は中津藩士にして、子女五人あり。先生は其の季子なり。天保五年十二月二日、大阪の中津藩邸に生る。三歲にして父を喪ひ、母子共に中津に歸る。幼時の教育は尋常の鄕學に漢籍を誦習せるに過ぎず。然れども、其の辨識の力は讀書の力に越えて、早く儕輩を凌駕したりといふ。安政元年二月、先生二十一歲、是より先、米使來航し、海内騷然たりしが、泰西兵術の講

緒方洪庵 名は章 醫師 蘭學者 文久三年（一八六三）歿、年五十四

咸臨丸 安政四年（一八五七）オランダより購入せし幕府の木造軍艦

習を必要とするに至り、先生また砲術研究の志を懷きて長崎に赴けり。是、蘭書讀習の機緣なり。明年大阪に來りて、緒方洪庵先生の塾に入る。是、先生生涯の一轉機なり。蓋し其の初、蘭書そのものに意なく、これによりて砲術を解する媒となしし、其の學漸く進むに至りて純乎たる蘭學研究者となれるなり。中ごろ病のために一旦中津に歸りしが、幾時ならずして再び緒方塾に復り、學益進み、塾頭に擧げらる。安政五年、藩の徵に遭ひ、江戸藩邸の蘭學教授となる。當時米人との交際よりして英語の用益多し。先生の烱眼早く轉學の必要を覺り、同學諸氏の說に反し、刻苦して英書を研修す。

安政六年十二月、幕府使臣を米國に派す。先生其の乘艦咸臨丸の艦長木村攝津守に乞ひ、從僕となりて米國に入り、其の文物を目睹し、明年五月を以て歸朝す。是、先生生涯の一大轉機にし

木村攝津守名は毅、號は芥舟、明治三十四年歿、年七十二

文久元年孝明天皇の御代（一二五二一）

慶應三年孝明天皇の御代（一二五二七）

て、後來の事業此の觀光の時に得たるもの多し。文久元年十二月、幕府使節を遣はして歐洲諸國を歴訪せしむ。先生飜譯方を以て隨行し、英・佛・獨・蘭・葡・露の諸都を觀て歸り、見聞益廣し。我が社會の暗黑の中に世界的光明を透したる「西洋事情」の一書は、實に此の行の產物なり。慶應三年、軍艦購入の件を以て再び米國に赴く。先生の意見はこれらの旅行毎に轉進し、開國の必要を確信し、幕府舊來の階級制と勤王に伴なふ鎖國論とは、共に先生の信仰と背馳して到底相容るること能はず、且先生は飜譯官たりしを以て、內外交涉の機事皆其の掌る所の文書によりて之を知るを得て、幕府の敗亡、國勢の變轉、早くも先生の眼底に映ぜり。而して先生は政權の推移を洞察せしのみならず、社會事物の變化を豫知せり。先生がその雙劍を鬻ぎて帶刀の風を棄てたるは、維新の際、士人長刀を佩びて殺氣天下に充てる間にあり。

既にして維新の業成り、政府大いに人材を登庸して、洋學通明の士多く徵用せられ、先生亦其の召命に遭へり。然れども、固辭して就かず。其の得る所を以て社會を啓發せんと欲し、こゝに自ら天下開導の大任を負ひ、首として慶應義塾を設けて後進を教育し、又著述・飜譯を以て世人を誘發せり。爾來三十四年、藩邸に塾を立てしより四十五年、通じて學生一萬餘を養へり。其の人、社會各般の階級に出身して一般の進步を助く。先生又明治十五年を以て時事新報を開刊し、政黨旺盛、政爭劇甚の間に、社會教育を主義として一般の知識を開き、又爭議を判するに任ぜり。

先生は教育家なり、時代思想の鼓吹者なり。學を長崎・大阪に修め、藩の教授となり、幕府の飜譯方となり、三回歐米に航せし外何の經歴あらず。其の後半の生涯は三田の高臺に逸居して三十餘年を經過す。波瀾なく、變化なし。然れども、其の言論・文章

を以て一世を鼓動し、社會を陶冶せし偉大なる勢力は、獨り當世に匹なきのみならず、古今を通じて有數なりと評せざるべからず。蓋し嘉永・安政以後、日本が海外諸國の大勢に刺戟せられ、新舊の思想相鬪ふに際し、先生は新思想誘引の先達となり、舊世界の殘壘を破りて一大勝利を博し、先登の月桂冠を戴ける者なり。

先生の學專攻なし。故に一科の長所なく、又獨創の發明あらず。然れども、思想博大、常識明敏、進歩の見解を一切の事物に應用して之を社會に弘布する能力に至りては、萬人に超絶せり。且其の識見は常に社會に先んぜり。先生幼時儒教の薫陶を受け、其の長崎に赴き、端なく蘭書を誦習するや、既に砲術の、以て志を成すに足らざるを覺れり。其の江戸に來り、横濱に遊びて、英語の招牌を讀む能はざるや、忽ち蘭學を棄てて英語を學べり。其の海外に遊んで歸るや、幕府衰滅の免るべからざるを看取し

再び米國に入るや、兵器を購はず、書籍を買うて歸り、戊辰戰亂の間、冷然書を講じて顧みず。王政復古、士皆進仕を榮とするに際し、巷間に在りて後進を誘掖し、戰餘の殺氣未だ收らざるに、兩刀を脱して市民と稱せり。漢儒が門人を食客と同視する時代に、授業料を收むる學校組織を立て、政爭喧擾の間に社會的薫陶に力を致せり。これ皆時流に先だてる見にして、當世にぬきんづる眼を有するにあらざれば能はざるなり。

先生は百代を洞察し宇宙を解釋する哲學者に非ず。天人冥合・靈魂救濟を志とする宗教家に非ず。立言の不朽を期して造化の機祕を窺ふ科學者にもあらず。詞を修め句を練る文士にも非ず。否、却つて文字のために思想を犧牲にする陋習を打破せんとせる人なり。之を要するに、一代の著述・文章は崇高宏大深邃幽玄なる思想界に觸るるに非ずして、每時眼前の程度より

テーヌ（1828–1893）フランスの歴史家・哲學者
ジョンソン（1709—1784）イギリスの文學者

一等を高めんとするにあり。而して、見解分明、信仰確實、平易大膽なる文を以てこれを宣傳す。其の多數を動かして偉大なる效果を收め、優に社會改造の目的を達せしは之が爲なり。

先生の筆述、前後五十部百五册、收めて其の全集にあり。此の他時事新報に載するものを合はせば更に多からん。佛人テーヌ、かつて英國文界の偉人ジョンソンの全集を研究して謂つて曰く、「そこに十九世紀に於て新に學ぶべき奇思・妙想を發見せずと雖も、十八世紀の需要に應じて社會を裨益せしもの多し。」と。ジョンソンの勢力が當時に盛なりし所以、其の文書が一世に功ありし所以茲に在り。後の讀者、其の奇思・妙想を發見せざるを以て其の功を小なりとするを得ず。先生の文界に於ける位置、蓋し之に近し。

先生の勢力を以て、單に其の文章・識力に歸するは、よく先生を

知る者に非ず。先生は確信・實行を大膽・明快に筆に載す。これ能く世を動かす所以に非ずや。其の獨立自尊を說くや、口舌・文章に於てするのみならず、これを其の躬行に於てし、其の歐米の文明を鼓吹するや、これを事物に應用し、其の自由・平等を宣傳するや、階級隷屬の生活を破るに汲々とし、其の官尊民卑の弊を論ずるや、自身軒冕を泥塗にする概あり。其の家庭の尊貴を說示するや、先生まづ其の實例を置かんと努めたり。是、豈確信なき者の企て得る所ならんや。

先生を以て拜金宗の大和尙となし、節義を輕んずる者と爲すは、最も先生と其の時代とを曉らざる者なり。蓋し先生が歐米の文物を輸入せんとするや、其の反面に於て、鎖國の舊夢を一掃するに努めざるべからず。自主・獨立の主義を宣べんとせば、其の反面に於て隷屬・服從の慣習を打破せざるべからず。平民自

一休　諱は宗純、室町時代の禪僧、文明十三年（一四八一）寂、年八十八

ヴォルテール（1694-1778）　フランスの文學者、本名はアルエ

活の生業を教へんとせば、武士世祿の依賴心を棄てしめざるべからず。此の過渡の時機に會し、武士の理想的人物を罵倒して以て一世を警醒せしもの、卽ち有名なる楠公論にあらずや。これ楠公其の人を擊つにあらずして、武士の舊想を擊ちたるもの、恰も一休の、俗僧を破せんが爲に釋迦を罵りたる意に髣髴たり。其の金錢を貴ぶの說法は、「武士は食はねど高楊枝。」の氣習を破したるものに過ぎず。先生これがためには世の怒嘲を冒して戰へり。吾人却つて先生の勇敢を稱せざる能はず。

先生の明治社會に於ける位置は、頗るヴォルテールが十八世紀の佛國に於けるものに似たり。先生が歐米の文物・思想を總括して輸入せんとし、博大・通達の材を以て盛に飜譯・著述に從事せし所、恰もヴォルテールが英國に博採せしに似たり。甲が儒教を說破せし所、恰も乙が羅馬加特力を破壞せんとせしものに

荀卿　周代の哲學者

李斯　秦の政治家、荀卿に學び始皇帝の客卿となる

生を知らずフルコトヲ季路問レ事ニ鬼神ニ子曰、未ダハ能ヘクフルコト事人ニ、焉ンクンソ能事レ鬼ニ曰、敢テフ問レ死ヲ曰、未ダラ知レ生、焉ンクンソ知ラントヲ死（論語、先進篇）

類す。而して、其の辯銳利、能く破壞の目的を達したれども、其の言奇矯、後進をして誤解せしめ、一は拜金宗といふ一派の信仰を形成し、他は羅馬教を擊破したるもの一轉して宗教そのものを擊破せしがごとき觀を呈せり。三田の末流に拜金の臭味あるは、荀卿の說によりて李斯の徒を出ししに類す。吾人は先生を以て此の宗派の大和尙と認むる能はざるなり。

先生は儒教を痛擊し、自活生業を唱道せしが、先生の行は却つて儒教の旨に適へり。是、一見奇なるが如くなれども、決して奇ならざるなり。先生は形而上の考案に多くの思を凝らさず、專ら實踐躬行を貴べり。是、「生を知らずして焉ぞ死を知らん。」との旨に合するにあらずや。先生の歐米の文物を輸入する、專ら制度・商業・工藝・科學の實物的傾向を有し、哲理・宗教の研究工夫を要せず。是、性と天道とを語らざる者に類するに非ずや。其の一

性と天道
子貢曰、夫子之文章、可ニ得而聞一也　夫子之言ニ性與ニ天道一、不レ可ニ得而聞一也已矣（論語、公冶長篇）

天爵
有ニ天爵者一、有ニ人爵者一　仁義忠信、樂レ善不レ倦、此天爵也　公卿大夫、此人爵也（孟子、告子上篇）

人々己に貴きものあり
欲レ貴者、人之同心也　人々有下貴ニ於己一者上、弗レ思耳（孟子、告子上篇）

方に武士的生活を攻撃するに拘らず、去就を嚴明にして處士自ら高うせる迹は、儒教の進退節義を言ふ者に類す。其の自尊といふ教訓を以て天爵を全くせんとするは、孟軻の「人々己に貴きものあり。」といふに合し、其の軒冕を泥塗にして王公に屈下せざる所は、大人を藐視し、晉楚の富と爵とに對するに德と齒とを以てしたるに似たり。先生は知識を歐米に博採せしが、其の行實は蓋し幼時の儒學に涵養せられ、唯俗儒の範圍を脱したるものの如し。これを聞く、「先生の嚴父百助君、儒學を修め、伊藤東涯の人爲を慕へり。」と。堀川の實踐學派、先生の心を養ひしものか。而して、先生少時最も春秋左氏傳を愛讀せりといへば、節義に嚴なる所、由來なしと言ふべからず。

先生晩年著す所、頗る壯年の思想と異なる。福翁百話中、往々形而上の問題に渉るものあり。然れども、科學的研究の結果に

晉楚の富
晉楚之富、不レ可レ及也　彼以ニ其富一、我以ニ吾仁一、彼以ニ其爵一、我以ニ吾義一（孟子、公孫丑下篇）

伊藤東涯
名は長胤　仁齋の長子　儒者　元文元年（一三九六）歿年六十七

あらず。先生は結局常識の人なり、實踐の人なり。博大なる思想家にして、精深なる考究家にあらず。大膽なる論辯家にして、懷疑の批評家にあらず。唯其の四十年間、一貫の行徑を辿りて世の風濤に蕩搖せられず、誠實に社會を薫陶し、諄々として倦まず、言行一致、平易の言を立てて人々行ふを得る道を宣べ、自ら善くし、兼ねて人を善くせる、其の大功誰か先生に比すべき者あらん。眞に常識の巨人、平民の典型なり。獨立自尊の四字は先生の躬行によつて社會に現示せられたり。先生の書は、以て先生を評するに足らずして、唯其の行實を研究して始めて能く其の教育を會得すべし。今や此の巨人を失へり。明治社會の損失これより大いなるはなし。吾人、公に於ては平民の典型を奪はれたるを惜しみ、私に於ては敬慕する巨人を失へるを悲しむ。

（福澤先生哀悼錄）

福住正兄
二宮尊德の門人　明治二十五年歿、年六十九

翁
二宮尊德を指す　報德教の祖　安政三年（二五一六）歿、年七十

三　天理と人道

福住正兄

翁曰く、夫れ人道は譬へば水車の如し。其の形、半分は水流に順ひ、半分は流に逆らうて輪廻す。まるに水中に入れば廻らずして流れ、又水を離るれば廻ることあるべからず。佛家に所謂知識の如く、世を離れ、欲を捨てたるが如し。又凡俗の教義も聞かず、義務も知らず、私欲一偏に着するは、水車をまるに水中に沈めたる如し。共に社會の用をなさず。

故に人道は中庸を尊む。水車の中庸は、宜しき程に水中に入りて、半分は水に順ひ、半分は流水に逆らうて運轉滯らざるにあり。人の道もその如く、天地に順ひて種を蒔き、天理に逆らうて草を取り、欲に隨つて家業を勵み、欲を制して義務を思ふべきなり。

翁曰く、夫れ人道は人造なり。されば自然に行はるるところの天理とは格別なり。天理とは、春は生じ、秋は枯れ、火は燥けるにつき、水は低きに流れ、晝夜運動して萬古易らざる、是なり。人道は日々夜々人力を盡くし、保護して成る。故に天道の自然に任すれば、忽ちに腐れて行はれず。情欲の儘にする時は立たざるなり。譬へば漫々たる海上道なきが如きも、船道を定む。若し是によらざれば、岩にふるるなり。道路も同じく、己が思ふ儘に行く時は突當り、言語も思ふ儘に發する時は忽ち爭を生ずるなり。

是に依つて、人道は欲を抑へ、情を制し、勤め勤めて成るものなり。夫れ美食・美衣を欲するは天性の自然、是をため、是を忍びて家產の分内に隨はしむ。身體の安逸・奢侈を願ふも亦同じ。好むところの酒を控へ、安逸を戒め、欲するところの美食・美服を抑

己に克ちて「一日克レ己ニ復レ禮ニ天下歸レ仁焉（顏淵十二）

へ、分限の内を省みて有餘を生じ、他に讓り、向來に讓るべし。是を人道といふなり。

翁曰く、天理と人道との差別を能く辨別する人少し。夫れ人身あれば欲あるは則ち天理なり。田畑に草の生ずるに同じ。堤は崩れ、塀は埋り、橋は朽つ。是則ち天理なり。人道は一日怠れば忽ちに廢す。されば人道は勤むるを以て尊しとし、自然に任するを尊ばず。

夫れ人道の勤むべきは、己に克つの教なり。己は私欲なり。私欲は田畑に譬ふれば草なり。克つとは此の田畑に生ずる草を取捨つるをいふ。己に克つは、我心に生ずる草をけづり捨て、とり捨て、我心の米麥を繁茂さする勤なり。是を人道といふ。論語に「己に克ちて禮に復る」とあるは此の勤なり。

二宮翁夜話 五卷 二宮尊德の訓話を福住正兄の筆記せしもの 明治十七年より二十年迄の間に分冊して五回に發行

翁曰く、松明盡きて手に火の近づく時は速に捨つべし。火事あり、危き時は荷物を捨てて逃れ出づべし。大風にて船くつがへらんとせば上荷を刎ぬべし。甚だしき時は帆柱をも伐るべし。此の理を知らざるを至愚といふ。

翁曰く、山芋掘りは、山芋の蔓を見て芋の善惡を知り、鰻つりは、泥土の樣子を見て鰻の居る居らざるを知り、良農は、草の色を見て土の肥瘠を知る、みな同じ。所謂至誠神の如しといふものにして、永年刻苦經驗して發明するものなり。技藝に此の事多し、侮るべからず。（二宮翁夜話）

高山樗牛
名は林次郎
文學者　文學博士　明治三十五年歿、年三十二

釋迦
中天竺に住せし種族の名能と譯す

伽毘羅國
中天竺ロヒュ河（恒河の支流）の畔に釋迦族の建てし國　今のウードに當る

悉達多
一切義成と譯す

佛陀
智者又は覺者の義

三　世界の四聖

高山樗牛

生れて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる、聖人に非ずんば、誰かこれを能くせん。釋迦・孔子・ソクラテス・基督の四人、世呼んで世界の四聖と稱す。宜なるかな。

釋迦は西暦紀元前凡そ六百年の頃、印度伽毘羅國の王家に生る。父は淨飯王、母は摩耶夫人。其の本名を悉達多といふ。釋迦は伽毘羅王家の族名にして、佛陀は其の出家成道後の尊號なり。その身一國の太子に生れけれども、夙に思を人生の問題に潛め、二十九の歳、其の妻子を捨てて王城を逃れ、山林に隱れて道を修むること六年、終に人生の奥義を極め、無上の正覺に徹底せり。爾來五十餘年の間、北天竺の各地に巡錫して教化を布き、八十餘歳にして跋提河の邊に歿しぬ。今の佛教は卽ち釋迦一代

跋提河
クシナ城外にあり　その西岸なる沙羅雙樹林にて釋迦入滅せしといふ

木鐸
金口木舌、施ニ政教ヲ一時、所ニ振以警ヲ衆者也（論語註）

魯國
周代諸侯の一　今の山東省兗州府の地

の教訓に基づく。蓋し釋迦の當時、印度には幾多の哲學ありき。されど徒らに思索の高遠を欽びて、人生の疑問に適切ならず。偏に幽玄なる談理と慘憺たる苦行とによりて、安心の道を求めたり。其の流派を樹てて相爭ふ所は、畢竟名目上の優劣のみ。未だ一世の元々をして歸命の大道に就かしむるに足らず。釋迦この間に生れ、其の浩大なる慈悲と無邊なる智慧とを以て一世の木鐸となり、民をして其の歸依する所を知らしめたり。

釋　迦（呉道子筆）

孔子、名は丘、孔子は其の尊稱なり。今を去る二千四百餘年の昔、支那の魯國に生る。幼にして學を好み、禮を習ふ。壯年の頃

より魯國の官吏となり、傍ら子弟を教へて、夙に令聞あり、學德愈〻進む。魯の定公の時に至り、擢でられて大司寇の職に就く。治績大いに擧り、內外其の風采を想望す。時に齊王、魯國の日に盛大に赴けるを嫉み、謀を構へ、定公をして孔子を用ひざらしむ。孔子、時運の非なるを見、五十六歲の老軀を挺し、門下の高足を率ゐて、四方の遊說を試みぬ。當時の支那は、謂はゆる春秋戰國の亂世なり。周の王室は名のみにして、君臣の大義は蕩然として地を掃へり。或は臣にして其の君を弑するものあり、子にして其の親を害するものあり。强は弱を食み、大は小

孔子の像

齊　周代諸侯の一今の山東省濟南府の地
春秋　周の王室衰へ諸侯覇をなしし時代　皇紀二百年頃迄の約三百十年間
戰國　春秋以後周の滅亡まで約二百年間　王室益〻衰へ諸侯爭覇の時代
周　武王が殷を滅して建てたる朝の名　皇紀四百五年秦に滅さるるまで八百六十七年

を併はせ、權力の外に道義あるなし。教化の陵夷、風俗の頽廢、未だ曾てこの時のごときはあらず。孔子、既に志を魯に得ず、乃ち慨然として故國を出で、大義名分を天下に唱へて、狂瀾を既倒に廻さんとす。志や高且大なりと謂ふべし。かくの如くにして四方を漂浪すること十三年、時非にして道容れられず、世また耳を名教に傾くる者なし。こゝに於て、已むを得ず老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じて曰く、「嗚呼、吾が道終に窮せり。世終に吾を知るものなきか。」と。門弟子貢なぐさめて曰く、「何ぞ夫子を知るものなからんや。」孔子曰く、「天を怨みず、人を尤めず、下學して上達す。吾を知る者はそれ天か。君子は歿して名の稱せられざるを病む。吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えん。」と。いくばくもなくして歿しぬ。時に年七十三。

ソクラテスは希臘のアテネ府に住める一彫刻師の子なり。

子貢　姓端木　名は賜　孔子の高弟
天を怨みず云云（論語、憲問第十四）
ソクラテス

西紀前三九九年死刑に處せらる　年七十餘歳

アテネ府　古代ギリシャ文化の中心たりし市　今ギリシャ共和國の首府

詭辯學派　西紀前五世紀頃アテネ府にて一時勢力ありし學派　その始祖をプロタゴラスといふ

其の生れしは凡そ紀元前四百七十年の頃にして、釋迦、孔子と年を隔つること一世紀に過ぎず。東西の聖人殆ど時を同じうして世に出でたるは奇なりと謂ふべし。希臘の當時は、所謂詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の爭に留り、道德は空文の上にのみ貴ばれたり。其の狀、なほ釋迦當時の印度のごとく、人生社會の實際に關しては、殆ど裨益するところ無かりき。ソクラテスは、慨然として時弊の救濟を以て自ら任じ、盛に道を講じ、理を談じ、諄々として倦まず。詭辯學派の輩に遇へば、則ち其の獨得の論法を以て辯難攻擊して、一歩も假借せず、侃諤の正義、其の稀代の雄辯と相伴なひて、一世を風靡せり。然るに、「喬木は風に折らる。」の喩に漏れず、群小のソク

ステラクソ

アスクレピヤスの神　醫術の保護神

ラテスに快からざるもの相謀りて、國法に背けるものとしてソクラテスを讒訴せり。其の訴狀に曰く、「ソクラテスは國教を信ぜずして、異教を創め、以て人心を惑亂せり。國法によりて死刑に處すべし。」と。ソクラテスがこの讒訴に對する抗議は實に壯快を極めたるものにして、慨世憂國の至誠を以て國民に訴ふるところ、語々百世の眞理ならざるはなし。然れども、判官はソクラテスを以て傲岸不遜なりとし、死刑を宣告せり。ソクラテス泰然として驚かず、曰く、「命のみ。」と。其の獄中にあるや、常に其の門弟子を集めて、生死・靈魂・未來の事を說き、人の脫獄を勸むるものに對しては、輙ち答へて曰く、「予は唯正義に導かれんのみ。死また何するものぞ。人生の幸福は靈魂の上にありと知らずや。」と。終に從容として毒を仰いで歿しぬ。將に歿せんとするや、弟子遺言を求む。ソクラテス曰く、「爾一雞を以てアスクレピヤ

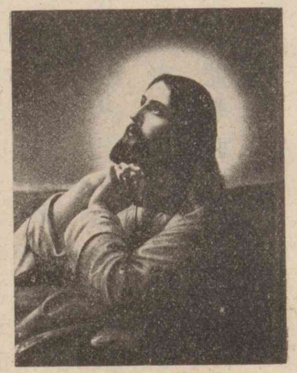
ベトレヘム　小アジアのパレスチナの一小村
ヨセフ　ユダア族ナタンの子
マリア　ヨセフの妻
ヨハネ　ヘブライの豫言者にて、キリストの先驅者

スの神に捧げよ。」と。蓋し、曾て病みし時、平癒を祈りて謝を致すことを忘れしが爲ならん。希臘の聖人ソクラテスはかくの如くにして逝きぬ。年七十。

基督は本名を耶蘇といふ。基督とは「膏灌がれたる者」といふ義にして、教徒の奉りたる尊稱なり。猶太のベトレヘムに生る。其の生後四年を以て西暦紀元第一年となす。父はヨセフと呼べる木匠にして、母をマリアといふ。長じて三十歳の頃、豫言者ヨハネの洗禮を受けて、始めて傳道の生涯に入り、爾來三年の間猶太の各地を歴遊し、諸の迫害に屈せずして其の福音を傳へたり。抑當時は、羅馬帝國の榮華已に其の極に達し、禍亂の萌芽中に胚胎し、災異荐りに至りて、天下寧日なし。殊に基督の故國たる猶太は、久しく暴君の收斂に疲れ、異邦人の侮慢を被れり。民衆は徒らに珍奇の淫祠を拜してますます放縱の俗に流れ、學者

神よ、彼等を赦せ　ルカ傳二十三章三十四節
イェルサレムの女子よ　ルカ傳二十三章二十七節以下
イェルサレム　パレスチナの首府　基督墳墓の地

は詭辯を弄びて空しく人を惑はすのみ。こゝに於て、一世の人心は觖焉として偉人の現出してこの暗黑の社會を照破せんことを渴望せり。基督この間に生れ、自ら救世の使命を負へる神の子なりと稱し、昂然として其の偉大なる新教理を宣傳せり。遠近靡然としてこれに赴く。僧侶・學者・官吏等これを喜ばず、猥りに新法・異說を唱へて民を惑はすものなりとなし、基督を捕へて磔殺の刑に處せり。基督豫め此の事あらんことを慮り、晏然として騷がず、靜かに祈りて曰く、「神よ、彼等を赦せ。彼等は其の爲すべき處を知らざればなり。」と。其の刑場に赴くや、路傍に哀哭する女子を顧みて曰く「イェルサレムの女子よ、我が爲に哭くこと勿れ。唯己と己の子との爲に哭け。」と。かくの


基督

如くにして、基督は三十三年を一期として、十字架上の露と消え去りぬ。基督死して後、其の弟子等は激烈なる迫害に抵抗して、其の教を天下に弘めぬ。基督教卽ち是なり。

以上は四聖の略傳なり。其の人物・事蹟の高大にして雄偉なる、永く後人の敬慕し、崇拜すべき所なり。四聖の中釋迦を除きては、いづれも轗軻不遇の間に其の生を終へたり。孔子は志を四方に得ず、其の經綸を抱いて、空しく詠歎の間に歿せり。ソクラテスと基督とは、いづれも讒奸の手に罹り、或は毒を仰ぎ、或は盜賊と竝びて十字架上に釘殺せられたり。慘なりと謂ふべし。然れども、是等の人々の志す所は、天下後世にあり。現世の禍福と一身の安危とは、毫も其の顧慮する處にあらず。故に其の死に就くや、晏如として恰も歸するが如し。孔子は其の一身の不幸を憂へずして、却つて「わが道行はれずば、吾何を以てか後世に

涅槃
滅・圓寂・解脫
等と譯す

見えん」と嗟嘆せり。釋迦は衆生のために其の妻子と王位とを抛ちて、食を路傍に乞へり。ソクラテスは死罪の脅迫に遇うて揚言して曰く、「正義を信ずるものに取りて、死はた何するものぞ。吾をして一日の生あらしめんか、其の一日も國民の迷を覺まさざるべからず」と。基督は己を罪に陷るるもののために神に祈りたり。嗚呼、何ぞ其の慈悲の浩大にして無邊なる。

四聖は、其の生れたる處と時とを異にす。故に其の教理にも亦多少の差異なきを得ず。今其の大要を擧ぐれば左の如し。

釋迦の教理は、煩惱を斷滅して涅槃に達するを主旨とす。それ人生は苦にはじまりて苦にをはる。生・老・病・死、いづれか苦にあらざるべき。故に吾人は現世を苦界と觀ぜざるべからず。而して苦の原因は情慾にあり。情慾の原因は、「我」の一念に執着するにあり。故に吾人は「我」の一念を脫却して、無我無念の境界

身を修め
古之欲レ明ニ明
德ヲ於天下ニ者、
先治ニ其國ヲ
欲ハ治ニ其國ヲ
者先齊ニ其家ヲ
欲ハ齊ニ其家ヲ
者先修ニ其身ヲ
欲ハ修ニ其身ヲ
者先正ニ其心ヲ
欲ハ正ニ其心ヲ
者先誠ニ其意ヲ
（大學）

に達せざるべからず。これ人生究竟の樂地にして、涅槃卽ち是なり。

孔子の教は、身を修め、家を齊へ、天下を治むるにあり。而して身を修むる基は孝にあり。故に孝は百行の本なり。君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、皆之に基づく。人は生れながらにして美德を天に禀くれども、後天の氣質によりてこれを完うする能はざるもの多し。教育の要こゝに於てかあり。既に教育を受けて、身既に修らば、家自ら齊ふべく、家齊はば、國自ら治るべく、國治らば、天下自ら太平なるを得べし。故に孔子の教は一身の修養に始りて、治國平天下に終るものと見るべし。

ソクラテスの教は所謂知德合一說なり。謂へらく、「眞正の知識は卽ち道德なり。故に行ふと知るとはもの一體のみ。知つて行はざると、行うて知らざるとは共に知識・道德の眞正なるも

山上の垂訓
基督が猶太の祝福の山にて授けし教訓（馬太傳五・六・七章）その山は猶太のガラリヤ州にあり、今テルハッチンと呼ぶ

のにあらず。眞理を確信し、其の實行を以て最上の義務となせば、正義自ら其の中にあり。正義は靈魂の滿足なり。靈魂は肉體と異なりて、不朽不滅なるものなり。故に吾人の正義を行ふや、現世の利害は決して顧慮すべきにあらず。道德は富貴のために存せず。然れども富貴は道德の中に在り。」と。

基督の教は愛の教なりと稱せらる。所謂山上の垂訓は三年傳道の極意を包括するを以て、左に其の大略を擧げん。曰く、「心の貧しき者は福なるかな、天國は其の人の有なればなり。悲しむ者は福なるかな、其の人は慰めらるべければなり。飢ゑ渴く如く義を慕ふ者は福なるかな、其の人は飽くことを得べければなり。憐む者は福なるかな、其の人は憐みを得べければなり。心の淸き者は福なるかな、其の人は神を見るべければなり。惡に敵するなかれ。人若し汝の右の頰を打たば、左の頰をも轉じ

てこれに向けよ。汝の隣人を慈しみて、汝の敵を愛せよ。人に見せんがために、義を其の前に行ふなかれ。右の手に爲す處を左の手に知らしむるなかれ。僞善者の行に倣ふなかれ。隱れたるを鑑み給ふ神は、あらはに報い給ふべければなり。人は神と財とに兼ね事ふること能はず。人を是非するなかれ。人の目にある塵を見ながら、何ぞ己が目にある梁木を見ざる。汝等求めよ、然らば與へられん。尋ねよ、然らば遇はん。門を叩け、然らば啓かれん。窄き門より入れ。沈淪に至る門はその路大きく、これに入る者は多し。嗟吁、いかに生命に至る門は窄く、其の路は細く、これを得る者の少きぞ。凡そこの訓を聽きて行ふ者は、磐の上に家を建てたる智者の如く、聽けども行はざる者は、沙上に家を建つる愚人の如し。」と。基督教の精髓は後世の人樣々の色彩を加ふれども、實にこの山上の垂訓に基す。

かくの如きは、四聖の傳記及び教義の大要なり。嗚呼、四聖逝いて既に幾千年ぞ。而してこの教の今なほ凛々として生氣あるを見よ。世界累代の幾億兆の民衆は、この教に憑りてその道念を養ひ、その安慰を求む。四聖の如きは、實に人類の永遠なる救濟者なりと謂ふべし。其の遺德の高大なる、それ何を以て是に比せんや。（稈牛全集）

不許複製

昭和十二年七月二十一日印刷
昭和十二年七月二十四日發行
昭和十三年一月二十三日訂正再版印刷
昭和十三年一月二十六日訂正再版發行

著作者 垣内松三
西尾實

發行兼印刷者 東京市神田區錦小路町十八番地
株式會社 文學社
代表者 小林竹雄

發売 東京市神田區錦小路町十八番地
株式會社 文學社
電話神田三五一番
振替東京三八七八番

關西販賣所 大阪市西區靱北通二丁目十八番地
株式會社 盛文館
電話土佐堀一五二三番
振替大阪七四三番

實學業校 國文新選 新制版

一卷	定價金	壹圓
二卷	定價金	八十錢
三卷	定價金	九十錢
四卷	定價金	八十錢
五卷	定價金	八十錢

広島大学図書
2000044854